

筑波大学博士(言語学)学位請求論文

日中両言語の主題構文に関する

理論的考察

胡 亜敏

2020 年度

目次

第1章 序論	1
1. 研究背景と目的.....	1
2. 本論文の研究対象.....	5
3. 本論文の構成.....	5
第2章 先行研究の概観と問題の所在	8
1. はじめに.....	8
2. 主題の基本概念.....	8
2.1. 主題構文の基本形式.....	8
2.2. Li and Thompson (1976)の分析.....	11
3. 各言語における主題研究.....	14
3.1. 英語の主題構文.....	14
3.1.1 意味論・語用論の観点から.....	14
3.1.2 統語論の観点から.....	17
3.2. 日本語の主題構文.....	20
3.2.1 意味論・語用論の観点から.....	20
3.2.2 統語論の観点から.....	22
3.3. 中国語の主題構文.....	26
3.3.1 意味論・語用論の観点から.....	26
3.3.2 統語論の観点から.....	28
3.4. まとめ.....	33
4. 問題の所在.....	34

第 3 章 主題と焦点の区別：“连”の主題化現象から	38
1. はじめに.....	38
2. “连……都”焦点構文	40
3. 先行研究と問題提起.....	42
3.1. 中国語の焦点構文.....	42
3.2. “连”を焦点マーカーとして捉える立場.....	44
3.3. “连”を焦点マーカーとして捉えない立場	45
3.4. 問題提起.....	48
4. “连 NP”は主題になりうるか.....	49
5. 理論的分析	58
5.1. “连”の生起位置 と焦点範囲の関係	58
5.2. 日本語との対照から見た“连……都”の焦点範囲.....	60
5.2.1. 作用域について.....	60
5.2.2. 「さえ」「も」の作用域.....	62
5.2.3. “都”の作用域	64
6. 焦点マーカーは主題位置に生起できない.....	68
7. “连”主題の語用論的機能	69
8. 第 3 章のまとめ.....	72
第 4 章 動詞（句）主題化構文	74
1. はじめに.....	74
2. 先行研究と問題設定.....	75
2.1. Tsao (1987)の分析	76
2.1.2. 動詞の生起位置.....	76
2.1.2. 動詞の性質	78
2.2. Cheng and Vicente (2013)の分析	81
2.3. 問題提起.....	83
2.4. 本章の問題設定	84

3. 文頭に生起する V_1 の性質.....	85
4. 移動分析： $\sqrt{\text{root}}$ 移動.....	87
4.1. 分散形態論に対する説明.....	88
4.2. $\sqrt{\text{root}}$ 移動分析.....	92
5. 基底生成分析.....	98
6. 含意関係制約.....	101
6.1. 基底生成される動詞（句）主題化構文.....	101
6.2. $\sqrt{\text{root}}$ 移動生成される動詞（句）主題化構文.....	103
6.2.1. 単独の動詞が主題化する場合.....	104
6.2.2. 動詞句が主題化する場合.....	106
7. 第4章のまとめ.....	107
第5章 結論.....	109
1. 本研究のまとめ.....	109
2. 今後の展望.....	112
参考文献.....	114
各章と既発表論文および口頭発表との関係.....	120

凡例

本論文のグロスで使用する略記は下記のようにになっている。

- COP : コピュラ (copula)
- EXP : 経験 (experience)
- PERF : 完了 (perfect)
- PROG : 進行 (progressive)
- Q : 疑問詞 (question)

第1章 序論

1. 研究背景と目的

本論文は、中国語と日本語が主題構文に関して二つの相違点に着目し、生成文法理論の枠組みに基づいて統語的な分析を試みるものである。これまでの言語類型論的研究では、中国語も日本語も「主題卓越型言語」(topic-prominent language)¹として分類されており、共通した性質を持つことが指摘されてきた (Li and Thompson 1976)。しかし詳しく観察してみると、両言語の間には主題構文に関して違いも見られる。本論文では、日本語との間に違いを見せる二つの中国語の構文に焦点をあて、それらが提起する問題に対して、生成文法理論の観点から統語的分析を提案する。

まず共通する性質として、(1)~(3)に挙げるように、①主題は基本的に文頭に位置する、②主語、目的語や付加詞が主題になりうる、③名詞句が主題を担う場合、定的名詞や総称名詞でなければならないという特徴を持っている。

(1) a. この本は、私が読んだことがある。

b. 这本书，我 看过。

この本 私 読む-EXP

(2) a. 太郎はたくさんの人を知っている。

a'. 太郎，认识 很多人。

太郎 知る たくさんの人

b. ご飯はさっき食べたよ。

b'. 饭，我 刚刚 吃了。

ご飯 私 さっき 食べる-PERF

¹ ただし、日本語は「主語・主題卓越型」言語である。

c. 去年の夏は、私は富士山に登った。

c'. 去年夏天，我爬了富士山。

去年の夏 私 登る-**PERF** 富士山

(3) a. この本は、私が読んだことがある。 ((1a)再掲)

a.'这本书，我看过。 ((1b)再掲)

b.*一冊の本は、私が読んだことがある。

b'.*一本书，我看过。

一冊の本 私 読む-**EXP**

さらに、以上の特徴に加えて日本語と中国語の場合は (4) のような後続の文と文法的な格関係をもたない主題も認められている。この点については、「主題卓越」型言語しか持たない性質である。

(4) a. 魚は鯛が美味しい。

b. 这场火，幸亏消防员来的快。

この火事 幸い 消防隊 来る の 早い

「この火事は、幸い消防隊が来るのが速かった。」

このように、日中両言語は上記の共通した特徴を持つ一方で、両言語の主題構文には異なる特徴も見られる。相違点の一つ目は、日本語は形態的主题マーカーである「は」を持つのに対して、中国語では明示的な主题マーカーを持たないという点である。例えば日本語では、(5a)のように、「これは」は主题であり（以下、下線で主题を示す）、(5b)の「これが」が焦点である（以下、太字で焦点を示す）ことは「は」と「が」によって明確的に提示されている。

(5) a. これは 昨日買った本です。

b. **これが** 昨日買った本です。

一方で、(6)のように中国語では主题文の判定が困難な場合があり、主题と焦点との

間で曖昧性が生じている。

(6) a. 这 是 昨天 买 的 书。

これ COP 昨日 買う の 本

「これは昨日買った本です。」

b. 这 是 昨天 买 的 书。

これ COP 昨日 買う の 本

「これが昨日買った本です。」

形態上主題と焦点をはっきり区別する日本語と比べると、中国語における(6)の“这”は文脈によって主題の解釈と焦点の解釈いずれもとれる。つまり、主題と焦点の区別は形態的な特徴ではなく、発話者が強勢を与える方法や文脈との関連性でしか区別できない。また、中国語においては、(7)のような目的語が“连”とともに文頭に生起する現象がある。この場合も、文頭の“连这本书”（「この本さえ」）は主題か焦点かが形態上からは区別しにくい。

(7) [连 这本书], 他 都 没 看过。

LIAN この本 彼 DOU ない 読む-EXP

「この本さえ、彼は読んだことがない。」

(7)の構文は“连……都”焦点構文と呼ばれており、“连”は通常焦点マーカーとして捉えられている。中国語はかき混ぜ規則が適用しないため、語順が自由に変換できず、目的語が文頭に生起する場合は主題化（Topicalization）が行われていると一般的に考えられている(Qu 1994; Shyu 1995; Huang, Li and Li 2009 など)²。そのため、文頭に生起する目的語“这本书”（「この本」）は“连”という焦点マーカーを伴うと同時に、主題化されることにもなる。しかしながら、語用論の観点から見れば、主題はすでに話者に認識されている何らかの「既知情報/旧情報」であるのに対して、焦点は「未知情報/新情報」である。ゆえに、ある要素が主題を担いながら、同時に焦点がかかっている

² Huang, Li and Li (2009)では、SOV 語順の O は焦点であり、OSV 語順の O は主題であると指摘している。

ことは不可能だと考えられる。実際、焦点と主題の対立は日本語においてははっきり示される。それは、次の(8)のように、「さえ」「も」のような焦点マーカ―は主題マーカ―の「は」と共起できないことである。

(8) a.*この本さえは、彼が読んだことがない。

b.*この本もは、彼が読んだことがない。

(7)(8)の対照を通して、日本語と中国語では主題位置に生起する要素に対する制限が異なると考えられる。つまり、中国語の場合、主題位置に焦点マーカ―とみなされる“连”が生起できるのに対して、日本語では焦点マーカ―と主題マーカ―の共起が容認されない。こうした差異は個別言語のパラメータで説明できるのか、それとも他の要因が存在するのかは解明すべき問題である。また、中国語研究において、“连……都”焦点構文と主題の関係についての研究は多く見られるが、例示したような日本語との差異について、対照の観点から議論されているものは管見の限り見当たらない。

日中両言語におけるもう一つの相違点は動詞もしくは動詞句の主題化現象についてである。中国語の場合、(9a)のように動詞が直接に主題位置に出現できるのに対して、日本語では、(9b)のように動詞が主題位置に現れる際は「こと」や「の」といった名詞化辞を用いて名詞化されなければならない。

(9) a. [Topic 吃], 我是 吃过, 不过,...

食べる 私 COP 食べる-EXP しかし

b. 食べること/のは 私が食べたが、(お腹がいっぱいになっていない)。

c. *食べるは 私が食べたが、…

さらに、(9a)の構文に対して Cheng and Vicente (2013)では文頭の“吃”(「食べる」)が主題に相当すると指摘しているが、動詞が重複して生起する現象のみに着目し、動詞がどのようにして主題化するのかについては言及していない。

上述した背景に基づき、本研究では日中両言語の主題構文における形態的な差異から中国語の“连……都”焦点構文と日本語の「さえ」「も」の違いを提示し、“连……

都” 焦点構文に対する統語的分析を行う。そして、日本語との形態的な違いから、中国語における動詞（句）主題化現象の一連の特徴を考察する。

2. 本論文の研究対象

以上の研究背景から、本研究で扱う日中両言語の現象は以下の二つである。

(10) a. 中国語の“连”（「さえ」「も」）句の主題化現象

[连 这本书], 他 都 没 看过。 ((7)再掲)

LIAN この本 彼 DOU ない 読む-EXP

「この本さえ、彼は読んだことがない。」

“连……都” 焦点構文における“连”（「さえ」「も」）の主題化現象から、中国語の焦点と主題の統語的性質の違い、および日本語との形態上の違いを統語的観点から説明する。

b. 動詞（句）の主題化現象

[_{Topic} 吃], 我 是 吃过, 不过,... ((9)再掲)

食べる 私 COP 食べる-EXP しかし

「食べること/のは 私が食べたが、…」

具体的には、日本語の動詞（句）主題構文の形態的な違いから、中国語の動詞（句）が主題位置に出現する場合の統語構造と派生メカニズムを解明する。

3. 本論文の構成

本論文の構成は以下の5章からなる。

第1章では、研究の背景および本研究で扱う主題構文の概要および目的を提示する。

第2章では、議論の前提として、主題構文に関するこれまでの一般的な観察を整理

し、その通言語的な特徴を示す。また、言語類型学の観点から主題に関する世界言語の分類を示す。続いて、英語の主題に関する研究に基づき、本論文において中心的な研究対象となる中国語と日本語の主題研究に関する特徴を意味論・語用論と統語論という二つの領域に分けて提示する。最後に、先行研究では十分に議論されていない事実、および先行研究で残された問題点を指摘し、本論文の研究目的と関連付ける。

第3章では、中国語の“连……都”焦点構文を分析対象にして統語的考察を行う。中国語では一般的に目的語が文頭の位置に現れる場合は主題を担っていると見なされているため、目的語が“连”を伴って文頭の位置に現れる場合も主題と分析する研究が見られる。一方、かき混ぜ規則が適用可能な日本語は、語順が比較的自由であるため、「さえ」「も」が目的語を伴って文頭に生起し得るが、形態的な主題マーカ―「は」とは共起できない。つまり、日本語の「さえ」「も」は焦点を与える要素であり、主題にならないことを示している。この相違点に対して、本論文では、先行研究の分析(Shyu (1995, 2014)など)と新たな経験的な事実に基づき、“连……都”焦点構文において“连”は焦点マーカ―の機能を果たさないため、主題位置に出現し得るという議論を展開する。さらに、“连……都”焦点構文において、焦点マーカ―として機能するのはむしろ“都”であり、両言語の作用域の比較に基づいて“都”には日本語の「さえ」と「も」の両方の性質を併せ持つと分析する。以上の議論からの帰結として、“都”を含めて元から焦点機能を持つ要素は中国語でも日本語でも主題にならないという一般化が提案される。

第4章では、日本語と中国語のもう一つの相違点である動詞(句)が主題位置に現れる現象についての考察を行う。中国語でも日本語でも、動詞(句)が元位置にコピーを残して、文頭に生起する構文形式が見られる。しかし、中国語の場合には動詞や動詞句がそのままの形態で主題を担うことができるのに対して、日本語の場合には名詞化辞「こと」「の」が伴われなければならない。本論文では、この対立に対して、動詞がどのように文頭に生起するののかに関する議論を出発点として、日中両言語の共通点と相違点を捉える。中国語の場合、その生起方法については、動詞そのものが元位置にコピーを残して文頭に移動しているという分析が先行研究において提案されている(Cheng and Vicente 2013)。一方で主題位置にある動詞の性質については、主題になる動詞は動詞性が失われた要素であると分析されている(Tsao 1987)。しかし、この二つ

の分析には矛盾が生じている。それは、Tsao (1987)の脱動詞化(deverbalization)の分析が妥当であれば、動詞そのものが移動すると分析した場合、文頭に移動した動詞と元位置に残された動詞の範疇の間に差異が生じてしまうという問題である。この差異を解決するために、本論文では、動詞が主題位置に生起する場合には、島の条件 (island conditions) が関与するため必ず何らかの移動が生じていると主張しつつ、新たな移動分析を提案する。それは、「分散形態論」(Distributive Morphology)の観点から、動詞そのものが移動しているのではなく、まずは範疇が決まっていない語根√root が移動し、その後主題位置にある空の名詞化辞によって名詞化されるという分析である。さらに、目的語を伴う動詞(句)が主題化される場合は√root P の移動が生じていると指摘する。最後に、さらなる経験的な事実に関する観察を通して、中国語の動詞主題化構文において、主題位置に現れる動詞や動詞句の統語的な性質を明らかにする。第4章の議論のまとめとして、中国語の動詞(句)主題構文は、形態的に日本語との差異が見られるが、実際には動詞(句)そのものが主題位置に出現するのではなく、統語構造上では動詞の範疇変化が行われていると提案する。つまり、この現象においても日中両言語は共通した特徴を持つと言える。

第5章では、結論のまとめと今後の展望を提示する。

第2章 先行研究の概観と問題の所在

1. はじめに

本章では、主題構文に対する先行研究を概観し、問題の所在を指摘する。具体的な構成は以下の通りである。2節では、議論の前提として、主題構文に関するこれまでの一般的な観察を整理し、その通言語的な特徴を示す。また、言語類型学の観点から主題に関する世界の言語の分類を提示する。3節では、英語をはじめとして、本論文において中心的な研究対象となる日本語と中国語における主題に関する研究をそれぞれ意味論・語用論と統語論という二つの領域に分けて整理する。4節では、先行研究では十分に議論されていない事実、および先行研究で残された問題点を指摘し、本論文の研究目的と関連づけることにする。

2. 主題の基本概念

本節では、まず日中英語における主題構文がとる基本的な形式について見ていくこととする。また、Li and Thompson (1976)によって提案された言語類型論の下で、英語と日本語・中国語での主題に関する特徴の違いを提示する。

2.1. 主題構文の基本形式

主題とは、文が何について述べるのかという枠を設定するものであり、基本的には「主題-コメント(Topic-Comment)」の構造となっている。主題は一般的に談話上の概念と考えられており、話者が前述の要素について何らかのコメントをつけるか、もしくは聞き手が「ある程度の知識」を持っていると予想した上で、情報を伝えるために用いる構文形式である(Li and Thompson 1981: 86-100)。近年の主題文に対する研究では、語用論にとどまらず、意味論や統語論の領域でも活発な議論が行われている。

本節では、英語と日本語、中国語での主題の基本形式を比較することで、言語間の違いを示す。以下に、上記の言語における基本語順の文と、主題化した文を挙げる。

(1) 英語：

- a. I read this book.
- a'. This book, I read.
- b. I climbed Mount Fuji last summer.
- b'. Last summer, I climbed Mount Fuji.

(2) 日本語：

- a. 私はこの本を読んだ。
- a'. この本は、私が読んだ。
- b. 私は去年の夏に富士山に登った。
- b'. 去年の夏は、私は富士山に登った。

(3) 中国語：

- a. 我 看了 这本书。
私 読む-PERF この本
「私はこの本を読んだ。」
- a'. 这本书，我 看了。
この本 私 読む-PERF
「この本は、私が読んだ。」
- b. 我 去年 夏天 爬了 富士山。
私 去年 夏 登る-PERF 富士山
「私は去年の夏に富士山に登った。」
- b'. 去年 夏天，我 爬了 富士山。
去年 夏 私 登る-PERF 富士山
「去年の夏は、私は富士山に登った。」

(1~3a)、(1~3b)はそれぞれ英語、日本語、中国語の基本語順の文である。対して、(1~3a')は述語と文法的な格関係を持つ目的語が文頭に生起して主題となっている文であり、(1~3b')は付加詞が主題となっている文である。このように、目的語や文中の付加成分が文頭に生起し、語順の変化が生じている文は主題化文(Topicalization)(Gundel 1974; Chomsky 1977; Chafe 1987 など)と呼ばれている。

一方で、(1)~(3)のように語順変換によって生成された主題化文以外に、中国語と日本語において英語と異なる点として、次のようなタイプの主題構文が観察されている。

- (4) a. この木は葉が大きい。
b. 这棵树 叶子 大。
この木 葉 大きい
「この木は葉が大きい。」

(4)で示すように、「大きい」のは「この木」ではなく「葉」であり、主題を担う要素「この木」「这棵树」は主文の述語「大きい」「大」と文法的な関係を持たないため、目的語の主題化には相当しない。また、「葉」は「この木」と関連性があり、「この木」を付加詞として考えることもできない。このような場合の主題は“aboutness topic”（本論文では、以下「関連性主題」と呼ぶ）と言われている(Strawson 1964; Frascarelli & Hinterhölzl 2007; Reinhart 1981; Lambrecht 1994; Givón 1983 など)。

以上の事実から、日中英の三言語に共通して、文中の目的語や付加詞が語順変換を経て、元位置から文頭へ前置して主題化されるタイプの主題化構文が観察されている一方で、主題要素が語順の変換を経ずに生起し、かつ、その主題がコメント部分の文中要素と文法的な関係を持たない関連性主題構文は、日本語と中国語にしか観察されていないことがわかる。

ここまでの議論からは、日中英の三言語における主題構文について、共通する基本形式がある一方で、一部の言語にしか存在しない形式があることを確認した。次節では三言語における具体的な類型的差異を示す。

2.2. Li and Thompson (1976)の分析

前節で見た日中英語の間に存在する差異について、Li and Thompson (1976)では言語類型学の観点から説明が行われている。また、前節で提示された関連性主題の差異以外にも、英語と日中両言語の間にはさらなる相違点が見られる。本節では、まず Li and Thompson (1976)が提示した類型論を説明する。

Li and Thompson (1976)では、主題に関して、「主語卓越型」言語、「主題卓越型」言語、「主語・主題卓越型」言語、「主語・主題不卓越型」言語という四つの分類があることを提案している。そのうち、印欧語は「主語卓越型」言語であり、英語のように、主語と述語の文法関係が重視される。また、「主題卓越型」としての中国語、リス語(Lisu)などにおいては、主題とコメントの関係が重視される。そして、日本語、韓国語のような「主語・主題卓越型」言語においては主語と述語の文法関係及び主題とコメントの関係が両方とも重視される。最後に、「主語・主題不卓越型」言語としてのタガログ語(Tagalog)、イロカノ語(Illocano)などでは、主題と主語は区別されない。もちろん、それぞれの言語において主題と主語の重要性が異なるものの、「主題卓越型」言語では主語がない、あるいは「主語卓越型」言語においては主題が存在しないというわけではない。実際に、全ての言語に「主題-コメント」の構文が観察されている。

続いては具体的に「主題卓越型」³言語としての日本語・中国語のさらなる特徴を提示する (Li and Thompson 1976: 466-471)⁴。

まず一つ目は、「主題卓越型」言語の場合、主題には表面的な特徴が見られるということである(Surface coding)。リス語(Lisu)、ラフ語(Lahu)では、形態的なマーカーを用いて主題をマークし、また中国語では形態的な主題マーカーが欠けているが、文の語順として、主題は文頭に現れるという点でも表面的に観察できる特徴である。さらに、

³ 日本語は「主語・主題卓越型」言語と分類されているが、「主語」に関しては本稿の対象にならないため、本稿では中国語と共通する「主題卓越」という特徴のみ取り上げて議論する。

⁴ Li and Thompson (1976: 466-471)の原文では、それらの特徴を以下のように名付けている。ここでは順番を変えずに説明する。

- ①Surface coding
- ②The passive construction
- ③ “Dummy” subjects
- ④ “Double subject”
- ⑤Controlling co-reference
- ⑥V-final languages
- ⑦Constraints on topic constituent
- ⑧Basicness of topic-comment sentence

「主題・主語卓越型」の韓国語や日本語では、主題は「은/는」「ハ」でマークし、主語は「가/이」「ガ」でマークし、形態的な区別がなされている。

二つ目は、「主題卓越型」言語の場合、目的語を強調する際には、受動構造を用いる必要がなく、目的語が文頭の主題位置に生成すれば受動構造と同じ機能を果たすことができるという点である(The passive construction)。

(5) a. The floor was swept.

b. 地板 打扫了。

床 掃除する-PERF

c. 床は 掃除した。

(5)は、三言語とも目的語を強調し、主語が顕在的には現れない文である。しかし、英語の場合、目的語の“The floor”が文頭に現れる際には、受動形(“was swept”)が優先的に選択される。それに対して、中国語と日本語は受動形“地板被打扫了”「床が掃除された」を用いるのではなく、動詞の能動形が生起し、主題化文が選択されやすい傾向にある。

三つ目は、「主題卓越型」言語では、英語の“it”、“there”のように、虚辞を主語としての出現が要求されないという点である(“Dummy” subjects)。

(6) a. It is hot in here.

b. 这儿 很 热。

ここ とても 暑い

c. ここはとても暑い。

(6a)の英語では、虚辞“it”が主語として出現する必要がある一方で、(6b, c)の中国語と日本語においては、虚辞を用いずに、“这儿”「ここ」が直接に主題位置に生起し、コメント文が後続するという形式で英語の文と同等の意味を表している。

四つ目は、「主題卓越型」言語において、一見主語が二つ生じているような文が常用されるという点である(“Double subject”)。

(7) a. この木は葉が大きい。 (4)再掲)

b. 这棵树 叶子 大。

この木 葉 大きい

「この木は葉が大きい。」

(7)の文に関して、Li and Thompson (1976)では“double subject”（「二重主語」）という用語を用いているが、2.1節で言及した関連性主題のように、この場合には文頭に生起する「この木」「这棵树」を主題として見なしている。このような構文形式は全ての主題卓越型言語において存在するが、英語のような純粋な「主語卓越型」言語には現れない。

五つ目は、「主題卓越型」言語において、主題構文には常に主題および主題と同一指示を持つ要素の主題連鎖がある点である(Controlling co-reference)。つまり、後続の文に、必ず何らかの要素（代名詞、もしくは空範疇）が生起し、主題によって先行される。

(8) a. 那棵树_i 叶子 大, 所以 我 不 喜欢 e_i 。

その木 葉 大きい なので 私 ない 好き

「その木は葉が大きいので、私は好きではない。」

b. その木_iは 葉が大きいので、私は e_i 好きではない。

(8)において、後続文には「その木」「那棵树」と同一指示を持つ空範疇が存在し、主題によって束縛されている。この場合、主題と空範疇は一つの主題連鎖を成していると言える。

六つ目は、「主題卓越型」言語では動詞が文末に来る傾向がある点である(V-final languages)。例えば、日本語、韓国語、リス語は全て動詞後置タイプである⁵。

七つ目の特徴としては、主題位置に生起する要素の制限に関する点である(Constraints on topic constituent)。「主題卓越型」言語は、名詞や付加詞（時間副詞、前置詞句など）が主題になりうるのに対して、「主語卓越型」言語では主題要素に対してより厳しく制

⁵ Li and Thompson (1974a, 1974b)において、中国語も動詞後置だと指摘されている。

限する。例えば、「主語卓越型」言語であるインドネシア語における主題は、主語あるいは属格の主語しかならないことが観察されている。

最後の八つ目の特徴は、「主題卓越型」言語において、「主題ーコメント」という構文形式は基本的な文型として存在する点である(Basicness of topic-comment sentence)。対して、「主語卓越型」言語の場合はそうではないことが指摘されている。

以上の八つの特徴を見ると、言語によって「主題」の重要性、主題構文の形式及び主題要素の制限などが異なることがわかる。しかしながら、例えば日本語と中国語は同一言語類型の特徴を持つが、完全にその特徴が共通しているわけではない。したがって、言語間の主題構文の特徴をより正確的に捉えるために、次節では英語、日本語及び中国語それぞれの主題に対する先行研究を概観する。

3. 各言語における主題研究

前節では、言語類型学の観点から、諸言語の主題類型について分類を行った代表的な先行研究をまとめた。しかし、異なる類型に属す言語の間に差異が見られるだけでなく、同一類型の言語の間においても、主題構文の語用論・意味論的な特徴や、統語的な性質に異なる点も見られる。本節では、意味・語用論と統語論という二つのレベルを設け、日中英三言語それぞれにおけるこれまでの主題に対する研究を概観する。そのうち、以下では特に統語論の分析に焦点を当てる。

3.1. 英語の主題構文

本節では英語の主題構文の意味・談話的な性質、及び統語構造と派生メカニズムについての先行研究の分析を示す。

3.1.1 意味論・語用論の観点から

まずは意味論と語用論の観点からの分析を確認する。談話機能上、主題は一般に「既知情報」もしくは「旧情報」だと考えられており、「未知情報」「新情報」を表す焦点と対立している(Lambrecht 1994; Erteshik-Shir 2006; Heycock 2008)。しかし、「既知」に対する定義もそれぞれの研究によって異なっている。例えば、「既知情報」は必ず前文で言及した事物なのか、それとも前文で主題が表す事物が具現していなくても話し手

と聞き手の双方が持つ背景知識があれば「既知情報」となるかという点に関して、多くの先行研究で論じられている。

現在では、多くの研究において後者の立場が採用されている。そのうち、Chafe (1976: 28)によって、主題が表す「既知情報」は、聞き手が話を聞く時に意識している情報、および話し手が既に持っている知識であると定義されている。この定義に従えば、「既知情報」は必ずしも具現した言語形式で提示された情報である必要はなく、聞き手と話し手の双方が持つ背景や知識に対する認識も該当すると考えられる。また、Copel and Davis (1983)、Lambrecht (1988)では「既知情報」の「既知」に関して、その程度を[±意識]と[±指示対象の認識]というように素性を付けて議論している。つまり、ある情報が[+意識][+指示対象の認識]という素性を持つなら「既知」の程度が高く、対して、ある情報の素性が[-意識][-指示対象の認識]であれば「既知」の程度が低いといった捉え方をしている。このとき、「既知」の程度が低くなるほど、焦点との境界線が曖昧になる。その主題と焦点の曖昧性をどう捉えるかについては、Rizzi (1997)において主題と焦点を区別するための特徴を提示している⁶。

また、通常「対照」の機能を持つのは焦点だと考えられているが、語用論の観点からの分析では、主題にも「対照」機能を持つことができるという提案が見られる。例えば、Bianchi and Frascarelli (2010)では、Frascarelli and Hinterhölzl (2007)の分析に基づき、主題を関連性主題⁷、通常主題(Familiar Topic)、対照主題(Contrastive Topic: CT)の三つに分類している。対照主題とは、焦点の値に影響を与えず、他の主題に関して対立のペアを作成する要素だとしている(Kuno 1976; Büring 2003)。以下に例を示す。

⁶ 詳細は第3章4節参照。

⁷ 英語におけるいわゆる関連性主題は、Frascarelli and Hinterhölzl (2007)によって指摘されており、文が何かについて説明するという意味上の関連性を示すものである。以下の(i)に Frascarelli and Hinterhölzl における定義を引用する。

(i) Aboutness topic: “what the sentence is about” (Reinhart 1981, Lambrecht 1994); in particular a constituent that is “newly introduced, newly changed or newly returned to” (Givón 1983: 8), a constituent which is proposed as “a matter of standing and current interest or concern” (Strawson 1964)

Frascarelli and Hinterhölzl (2007: 87-88)

すなわち、英語の関連性主題構文は、(4)で挙げた日本語と中国語の構造上の関連性主題構文とは異なる。本稿で扱う「関連性主題」の概念は全て「二重主語文」の構造を指すため、英語には「関連性主題」が存在しないと捉える。

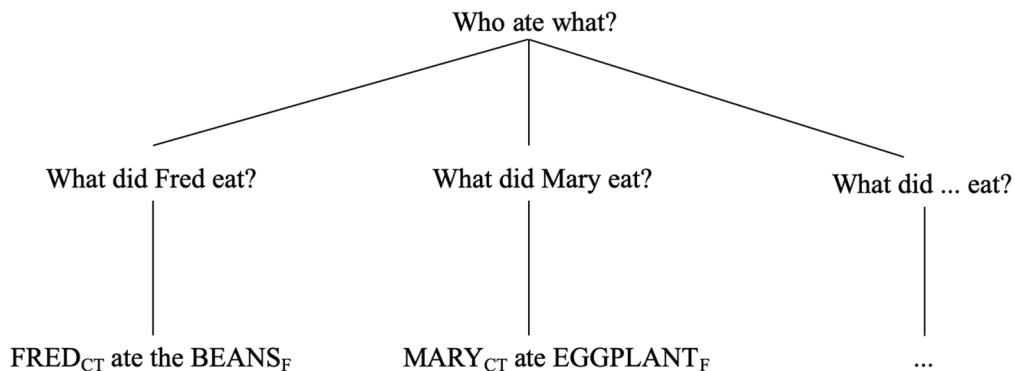
(9) [FRED]_{CT} ate [the BEANS]_F.

(Büring 2003: 519)

(9)において、“FRED”は対照主題、“the BEANS”は焦点と分析される(Büring 2003)。この文において、もし“FRED”が対照主題として見なされず、通常の文法的な主語と見なされる場合、対応する疑問文は“What did Fred eat?”(「Fredは何を食べたか?」)となる。一方で、(9)に示すように“FRED”が対照主題となる場合には、“FRED”と“BEANS”の両方が同時に質問される対象になることが可能である。すなわち、対応する疑問文は“What did x eat?”(「誰が何を食べたか?」)と仮定できる(Bianchi and Frascarelli 2010: 49)。

ここから、(9)が表している情報は、Büring (2003)によって以下のように示されている。

(10)



(Büring2003: 520)

(10)が示しているのは、複数の人間“FRED”、“MARY”、“...”(変項)が全て何かを食べたということである。また、「Fred」は“the BEANS”、“Mary”は“EGGPLANT”、“...”は“Y”を食べた」という対比的な意味も含んでいる。ゆえに、“What did Fred eat?”に対する回答文の“Fred ate the BEANS”は他の何らかの文との対比関係は成しておらず、通常のTPである。一方で、“Who ate what?”に対する回答文“FRED ate the BEANS”

は“FRED”を“FRED”以外の人と対比している対照的主題構文である。この場合、前文脈では“FRED”について言及されていないが、「既知・旧情報」を持つ主題と見なすことができる。

つまり、以上のような対照主題の分析からは、「既知・旧情報」における「既知」の程度の差によって生じた主題と焦点の間の曖昧性を捉えることができる。したがって、「対照主題」という分類も主題構文において重要な位置を占めていると考えられる。実際に、英語だけでなく、中国語、日本語においても議論されており、日本語と中国語に関する議論は 3.2、3.3 節で説明する。次節では、英語の主題構文に対して統語論の観点からの分析を見ていく。

3.1.2 統語論の観点から

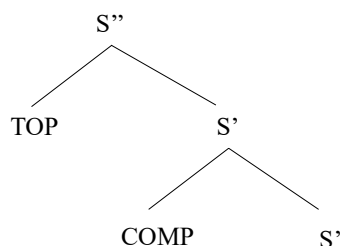
続いて、統語論の観点から、英語の主題はどのような位置に生起するのか、統語構造上ではどのようなメカニズムで派生されるのかについて分析した先行研究を概観する。

まず、早期に主題の統語上の生起位置を検討したのは Chomsky (1965)である。Chomsky (1965: 211)では、文の主題は表層構造における S の最も左側にある NP だと定義されている。

その後、Chomsky (1977)では、主題は独立した領域にあり、主題領域は中心文(core sentence)に属さず、構造上では最も外側にあると指摘している(Emonds 1969; Hooper & Thompson 1973)。構造で示すと以下の通りである。

(11) a. S'' → Top S'

b. S' → COMP S'



(Chomsky 1977: 91)

統語上の生起位置のほかに、派生メカニズムについても Chomsky (1977)では議論されている。Chomsky (1977)では、主題要素は S の外側から直接主題領域に生起し（いわゆる基底生成）、かつ *wh* 移動も生じていると指摘している。*wh* 移動というのは、*wh* 疑問詞が節の先頭（CP の指定部（Specifier））に位置しないとイケないという規則によって移動が生じる現象である。

(12) a. *Did you buy what?

b. [_{CP} What_i [_{C'} (did) [_{TP} you buy *t_i*]]]?

(12)で示すように、*wh* 疑問詞“what”は元位置に生起すると非文であるが、痕跡(trace)を残して CP の指定部へ移動することで正文になる。さらに、*wh* 移動は非項位置への移動（A' 移動）であるため、長距離移動が許される一方で、島の条件(island constraints)⁸が関わる場合には移動が容認できなくなる。ここから、主題構文の生成に *wh* 移動が関わっていることが、以下の(13)のように示されている。

(13) a. This book_i, I really like *e_i*.

b. This book_j, I believe Mary will assign to all her students to read *e_i*.

c. *This book_i, I hope that Mary will see the need to assign to all her students to read *e_i*.

(Miyagawa 2017: 3)

⁸ 島の条件とは、変形規則の適用対象となっている要素の元位置に関する条件である。具体的には、複合名詞句制約(Complex NP Constraint)、*wh* 島の条件(*wh*-island Condition)、主語条件(Subject Condition)、付加詞条件(Adjunct Condition)がある。

- 1) 複合名詞句制約：複合名詞句内に含まれる要素をその外へ移動してはならない。
 - a. Sherlock proved [_{NP} the claim [_{S'} that John killed who]].
 - b. *Who did Sherlock proved the claim that John killed
- 2) *wh* 島の条件：*wh* 句を持つ節の中から要素を抽出することはできない。
 - a. You wonder [_{S'} what [John ate when]].
 - b. *_{S'} When do [_S you wonder [_{S'} what [_S John ate ____]]]]?
- 3) 主語条件：主語内の要素を抽出することはできない。
 - a. [_{NP} Your interest in jazz] surprised John.
 - b. *_{S'} What did [_S [_{NP} your interest in ____] surprise John]]?
- 4) 付加詞条件：付加詞の中からその一部を抜き出すことはできない。
 - a. *Which book did you go to college [without reading ____]?
 - b. *To whom did they leave [before speaking ____]?

(13a)では、後続のコメント文に“**This book**”と同一指示を持つ空範疇が存在するため、“**This book**”そのものが移動して主題位置に生起しているように見える。しかし、(13b)のように長距離移動が容認されることから、項の位置へのA移動ではないと考えられる。このことから、主題要素は主題位置に基底生成していると言える。一方で、(13c)は島の条件に違反しているため、非文になる。つまり、(13c)では主題としての“**This book**”は基底生成であるものの、*wh*移動も生じているために、島の条件が関わることが示されている。上述の分析から、英語の主題構文の派生は一種の*wh*移動(A'移動)だと見なされている。

以上に挙げたような統率・束縛理論 (Government and Binding Theory, 以下はGB理論と略称する) (Chomsky 1981)での分析では移動は任意の範疇に自由に適用されるものだと見なされるのに対して、ミニマリスト・プログラム (Minimalist Program, 以下はMPと略称する) (Chomsky 1995 他)では、移動は自由に適用されるのではなく、素性照合 (feature checking)によって動機づけられるものとして分析されている。つまり、MPにおける移動操作は、移動される要素、あるいは移動を引き起こす要素の素性と照合を伴う場合にのみ適用される。そのため、MP以降の主題構文の派生方法に関しては、単なる任意的な*wh*移動ではなく、[+*wh*]素性と照合するために*wh*移動が生じるという分析が用いられている。

しかしながら、全ての言語において、[+*wh*]素性の照合もしくは*wh*移動が生じるわけではないため、*wh*移動の代わりに、音形を持たない関係詞としての空演算子 (Null/Empty Operator)が移動するという仮説が採られている (cf. Chomsky 1981; Haegeman 1994; Cinque 1991 など)。

Miyagawa (2017)ではさらに、素性照合と空演算子移動分析に基づいて、COMPに δ 素性 (談話-階層素性) という主題素性を仮定し、 δ 素性と照合するため、空の主題演算子をCP指定部へ移動させた後に、主題構文が派生されると分析している (cf. Rizzi 1997)。

(14) [_{TopP} this book [_{CP} OP_i C _{δ} [_{TP} I really like *t_i*]]]

(Miyagawa 2017: 3)

(14)では、“this book”が文頭の TopP の指定部に基底生成し、後続の CP の主要部にある談話の[+ δ]素性と照合するために、空の主題演算子 OP が移動していることを示している。このような空演算子移動分析は、wh 移動を必要としていないが、島の制約が関わる言語に対して、主題構文の派生メカニズムを説明することが可能である。

ここまでは、英語の主題構文に対して主題の統語位置とその派生メカニズムに関する分析をまとめた。次の二つの節では、英語の分析に基づき、日本語と中国語がどのように分析されているのかを概観する。

3.2. 日本語の主題構文

本節では、日本語の主題に対する先行研究を概観する。日本語の主題研究について、生成文法以前にも山田 (1936)、三上 (1959, 1960, 1963 など)によって分析がなされており、後続の研究に非常に重大な影響を与えている。また、生成文法の枠組みを用いた分析に関しては、Kuroda (1965)、Kuno (1973)などが中心となってその議論が展開されてきた。本節では意味論・語用論の観点から分析した先行研究、統語論の観点から分析した先行研究に分けて、日本語における主題研究を確認する。

3.2.1 意味論・語用論の観点から

まず、意味的観点から見ると、英語の主題と同じように、日本語の主題も「説明対象」となり、後続の文がそれに対する「説明内容」を加えることを示す。さらに、日本語においては、形態的な主題マーカー「は」を用いて主題要素をマークし、必ず総称的あるいは照応的な意味を持つため、「が」と区別される (Kuno 1973: 44)。

また、談話機能に関しては、主題は「既知・旧情報」、焦点は「未知・新情報」を表している。また、日本語においても、英語と同様に「既知情報」の「既知」の程度に関する議論が行われている。

例えば高見・久野 (2006) では、主題は「指示対象既知」名詞句でなければならないと主張している。高見・久野 (2006) における「指示対象既知」が示している内容は、①すでに会話に登場した人物や事柄、②会話に登場していなくても、話し手、聞き手、会話の場所に密接に結びついているもので、その指示対象が明らかなもの、③話し手、

聞き手の間で了解済みの概念を表す名詞句である。

さらに、堀川 (2012)では、(15A)の事実から既知の程度を説明している。

(15) Q : タイ料理、何か食べたことある？

A : トムヤムクンは 食べたことがあります。

(堀川 2012: 29)

(15Q)は明示的な「トムヤムクン」は出ていないが、「タイ料理」という話し手と聞き手が共有する知識の中に属しているため、(15A)における「は」も主題を提示していると主張している。つまり、「既知」は必ずしも言語化された内容ではないと言える。

一方で、多くの研究では、日本語の「は」は主題提示と対照という二つの機能を持っていることを指摘しており、その区別について議論している。

例えば、Kuno (1973)では、全ての「は」句は対照的に解釈しうるが、一文に「は」句が複数生じる場合は、一般的に最も左に生起する「は」句のみが主題の解釈を受けると指摘している。

(16) a. 私は タバコは吸います。

b. 私は タバコは吸いません。

c. 私は タバコは 吸いますが、酒は 飲みません。

(Kuno 1973: 48)

Kuno の指摘に従うと、(16)の「私は」は主題または対照の両方として機能することができるが、「タバコは」は文中にあるため、対照のみを含意する。特に、(16c)では二つ目の「は」が後の「酒は」と明らかな対照関係を成している。

しかしながら、Kuno の分析のように、従来の研究では対照の「は」と主題の「は」を区別するのに対して、最近の研究では英語の分析でも言及したように、「対照的主题」という概念が多く受け入れられている。例えば、(15A)の回答文についても、「タイ料理のうち、他の料理は食べたことがないが、トムヤムクンは食べたことがある」という比較的な意味も含意する。一方で、「トムヤムクン」は「タイ料理」として話し手と

聞き手の間に共有されている情報であるため、「既知情報」を持つ主題でもある。すなわち、このような主題は「対照的主题」と見なされる。

本節では、日本語の主題構文に対する意味論・語用論的な分析を概観した。主題の意味的な機能としては、英語と同じようにある対象を説明することである。また、日本語においても「対照的主题」として捉えられる主題が存在する。次節では、統語論の観点からの主題分析を確認する。

3.2.2 統語論の観点から

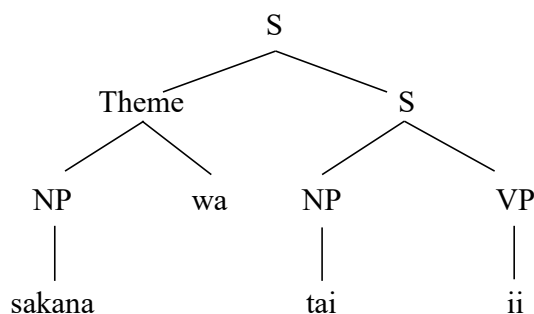
続いて、統語論の観点からの日本語主題研究を概観する。主題構文の統語構造について、Kuno (1973)で提案された(17)の構造が広く認められている。

(17) a. 魚は 鯛がいい。

b. S - Theme + S

c. Theme - NP + wa

d.



(Kuno 1973: 254)

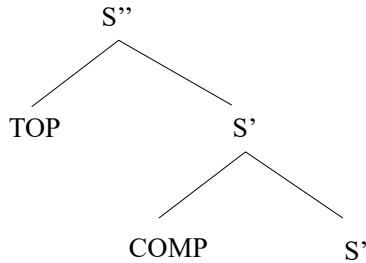
(17)はいわゆる特徴的な関連性主題構文である。この場合の主題「魚」は後続の述語「いい」と文法的な格関係を持たない。また、構造の示し方として、“Topic”という表記が用いられないが、主題は文の外側に位置するという点は英語と同様である。

実際に、Kuno (1973)以降は、日本語研究にも Chomsky (1977)によって提案された(11)の構造を受け入れ、生成文法の枠組みの下で日本語の主題構造に対する分析が行われ

ている(cf. Hoji 1985, Saito 1985, Ishii 1991, Kuroda 1988 など)。

(18) a. $S'' \rightarrow \text{Top } S'$ (11)再掲

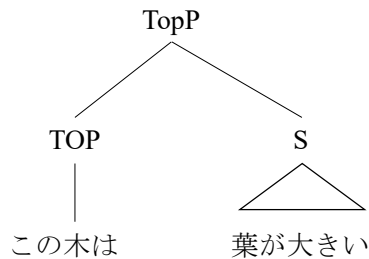
b. $S' \rightarrow \text{COMP } S'$



(Chomsky 1977: 91)

(19) a. [_{TopP} [_{TOP} この木は] [_S 葉が大きい]]. (4a)再掲

b.



(19)に示すように、主題としての「この木」は TopP の主要部に生起し、S の外側に位置している。

しかしながら、英語と違い、日本語では主題構文のタイプが異なれば、生起位置も異なることがある。英語の場合、主題要素は構文のタイプを問わず、通常的主題構文、対照的主題構文においても TopP の主要部に生起するのに対して、日本語の場合は、通常的主題構文と関連性主題構文における主題は TopP の主要部に生起するが、対照的主題構文では TP の指定部に生起すると指摘されている(cf. Rizzi 1997, Miyagawa 2017)。したがって、ここからは日本語の主題構文におけるそれぞれのタイプの派生メカニズムに関する議論を概観する。

初めて日本語の主題の派生に目を向けたのは Kuroda (1965)であり、Kuroda によって

「ハ句倒置(wa-Phrase Inversion)」が提案された。「ハ句倒置」というのは「は」が元々ある要素 X の後ろに位置し、文頭に倒置することで主題文になるという分析方法である。

(20) a. Sen → S-wa

b. wa-Attachment

[X - NP - Y]_S - wa → [X - NP + wa - Y]_S - wa

c. wa-Deletion

[X - NP - Y]_S - wa → [X - NP + wa - Y]_S

d. si-Insertion

V - AUX - wa → V - wa - si - AUX

e. wa-Phrase Inversion

##X - NP - wa → ##NP - wa - X, where X is not X' - NP - wa.

(Kuroda 1965: 63)

(20)の派生規則に従うと、(21)の文の派生は(22)のように示される(Saito 1985)。

(21) あの本はジョンが買った。

(22) a. [_S ジョンが - あの本 - 買った] - は



wa-Attachment

b. [_S ジョンが - あの本は - 買った] - は



wa- Deletion

c. [_S ジョンが - あの本は - 買った]



wa-Phrase Inversion

d. [_S あの本は - ジョンが - 買った]

(Saito 1985: 327-328)

上記の「ハ句倒置」が提起されたことで、日本語の主題構文の統語構造と派生メカニズムに対する研究は盛んになる。Kuno (1970, 1973)、Ishii (1991)、Saito (1985)などで

は、日本語の主題は基底生成によって生起すると分析している。その証拠として、島の条件が観察されていない点が挙げられている⁹。

(23) a. その紳士_iは、[_S [_{NP} [_S e_i 着ている] 洋服] が汚れている]。

(Kuno 1973: 249)

b. その人_iは [_S [_{Adjunct} e_i 死んだのに] 誰も悲しかなかった]。

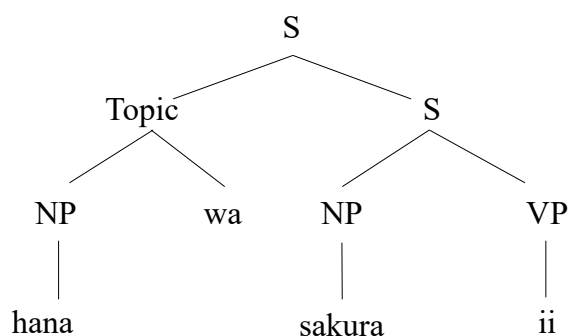
(Saito 1985: 283)

(23a)(23b)において、「その紳士」と「その人」は主題であり、それぞれ関係節と付加詞の中にある空範疇と同一指示を持っている。仮に、主題要素が痕跡を残して移動によって文頭に生起するのであれば、複合名詞句制約と付加詞制約という島の条件に違反して非文になるはずである。それにもかかわらず、上記の例で容認可能な文となっているのは、移動が生じていないため、島の条件が関わらないと考えられる。

さらに、関連性主題の場合も基底生成であると分析されている(Saito 1985, cf. Kuno 1970, 1973)。その理由としては、(24a)(24b)のような文において、主題は項を束縛していないためである。

(24) a. 魚は [_S 鯛が美味しい]。

b. 花は [_S 桜がいい]。



(Saito 1985: 282)

⁹ Kuno (1973)は対照の「は」と主題の「は」を明確に区別しているため、派生分析を行う際に対照の「は」を考慮せず、通常の主題化構文または関連性主題構文のみを観察している。

一方で通常の主題構文や関連性主題構文と異なり、対照的主題構文の場合、主題は一般的に移動によって生成されていると考えられている(Hoji 1985, Saito 1985, Miyagawa 2017, cf. Kuroda 1988, Sakai 1994)。

ここまでは日本語において、意味論、語用論、統語論のアプローチから主題研究を概観した。次節では中国語の先行研究を確認する。

3.3. 中国語の主題構文

本節では中国語における主題研究を意味論・語用論と統語論の二つの観点から概観する。中国語も日本語と同様に「主題卓越型」言語と捉えられており、日本語の主題分析と共通する部分が見られるものの、異なる部分もあることを示す。

3.3.1 意味論・語用論の観点から

まず、意味論・語用論の観点からの研究を見てみよう。意味論的観点から見ると、中国語の主題も文の述べる対象を指し、通言語的な特徴を持つといえる。

英語、日本語と同じように、中国語における主題は、談話機能上「既知・旧情報」という情報機能を持ち、「未知・新情報」としての焦点とは対立関係を成すと考えられている。そのうち、「既知・旧情報」はどの程度「既知」であれば主題になるかについて、英語や日本語と同じように、「対照主題」という単独の分類を取り上げて議論する研究も見られる。

徐・刘 (1998: 100)では、「対照主題」ではなく、「主題焦点」という用語を用いている。徐・刘 (1998: 100)によって、焦点は自然焦点 ([+突出, -対比])¹⁰、対照焦点 ([+突出, +対比])、主題焦点 ([-突出, +対比]) の三つのタイプに分けられている。主題と焦点の中間的な位置づけにあるのは「主題焦点」である。具体的には、中国語の焦点構文としての“连……都”構文 (日本語の「さえ」「も」構文に相当) において、“连 NP” は顕著な対比性を持つことが観察されている(徐・刘 1998)。

¹⁰ 徐・刘(1998)の中国語原文、および木村裕章氏の翻訳版の用語を用いている。意味としては、「突出」は「強調」を表し、「対比」は「対照・対比」の意味を表す。

(25) 连 老王 都 忍受 不下去 了。

LIAN 王さん DOU 我慢する ~できない LE¹¹

「王さんさえ (も) 我慢できなくなった。」

(徐・刘 1998: 100)

(25)では、“老王”(「王さん」)が主題焦点となっており、“老王”以外の人と対比していることを示している。また、焦点がかかっているのは“忍受不下去”(「我慢できない」)の部分である。したがって、全体的には「王さんさえ我慢できなくなった、(他の人は言うまでもない)」という意味を表している(徐・刘 1998)。

このような対比の意味を持つ主題タイプについて、Shyu (2014)においては「対照主題」という概念として捉えている。例えば、以下の(26A)は対照的主題構文として指摘されている。

(26) Q: 你 有 孩子 吗?

あなた いる 子供 Q

「あなたは子供がいますか？」

A: 儿子 我有, (可是 女儿 没有)

息子 私 いる しかし 娘 いない

「息子は(私は)いますが、(娘はいません。)」

(Shyu 2014: 116)

(26Q)の質問に対する回答文である(26A)は、「息子はいますが、娘はいません」という対比的な意味を表している。この文では「(子供が) いるかないか」の答えを求めているので、焦点は“有”(「いる」)にかかっている。さらに Shyu (2014)では、“儿子”(「息子」)を対照的主題と見なしている。それは、“儿子”は質問者がすでに提示した“孩子”(「子供」)という情報に含まれた部分集合であるためである。つまり、前文脈では顕在的には“儿子”が提示されていないものの、“儿子”も「既知・旧情報」を表

¹¹ ここでの“了”は状態変化を表すため、グロスでは完了の「PERF(Perfect)」ではなく、「LE (アルファベット)」で表記する。

し、主題として認識することができる。

また、Shyu (2014)では、以下のような特徴を挙げ、対照主題が通常の主語や関連性主題と区別することができる指摘している。

- (27) a. 不定的な要素が容認される
- b. 常に他の対照要素が並列されている（潜在的あるいは顕在的）
- c. 必ずしも排他的なわけではない
- d. より高い位置にある要約主題に先行される

(Shyu 2014: 115)

ここまでの日中英三言語の意味論・語用論における主題研究の説明をまとめると、主題は通言語的に「ある対象に対して説明内容を加える」という意味を表す。また、「既知・旧情報」について考える際に、「既知」の程度が低くなるほど焦点との区別がしにくくなるという点も三言語とも共通している。対比の意味を持つのは主題なのか焦点なのかという問題を解決するために、先行研究では、「対照主題」という独立なタイプを取り出して主題と焦点の間に位置付けている。

3.3.2 統語論の観点から

続いては、中国語の主題構文に対して統語的な観点からの研究を概観する。過去の通言語的な研究において、主題を担う要素は定格的 (definite) や総称的 (generic) な名詞句でなければならないと指摘されている (Li and Thompson 1976)。初期の研究では、中国語の主題に対しても同様の指摘が見られていたが、現在では (28) に挙げるように動詞 (句) が主題位置に現れる現象が観察されたため、主題が名詞 (句) である必要はないことが示された (Tsao 1987b, 徐・刘 1998, Cheng and Vicente 2013)。

- (28) [_{TopP} [_{TOP} 吃], [_{TP} 我 是 吃了]].
 食べる 私 COP 食べる-PERF
 「食べることは、私は食べた。」

そして、主題構文の統語構造に関しては、日本語と同様に、多くは Chomsky (1977) の分析 (3.1.2 節) に基づいて検討されている (Huang 1984; Huang, Li and Li 2009; Xu and Langendoen 1985; 徐・刘 1998; Shyu 1995; Shyu 2014 など)。すなわち、中国語の主題も CP/TP より上位にある TopP の主要部に位置すると説明されている。

主題の統語的位置に対する分析を前提に、中国語の主題派生メカニズムに関しては二つの分析方法が議論されている。一つは移動分析で、もう一つは基底生成分析である。また、移動分析の中には、Huang を代表とした移動と基底生成の両方を取り入れた分析 (Huang 1982; Huang, Li and Li 2009; Shyu 1995, 2014 など) と、Shi (1992) が主張する純粋な移動のみを仮定する分析に分かれている。次では各々の分析を説明する。

まず、(29a) のように主題と述語が文法的な関係を持たない関連性主題の派生について確認する。Tsai (1994a) は基底生成分析を主張するのに対して (cf. Huang 1982, 1984)、Shi (1992) では、(29b) に示すように “那场火” (「あの火事」) が文頭に移動すると分析している。

(29) a. 那场火, 幸亏 消防队 来得 快。

あの火事 幸い 消防隊 来る DE 速い

「あの火事は、幸い消防隊が来るのが速かった。」

b. 那场火_i, 幸亏 消防队 来得 快,

あの火事 幸い 消防隊 来る DE 速い

_{t_i} 才 没有 造成 损失。

その結果 ない 引き起こす 損失

「あの火事は、幸い消防隊が来るのが速いので、損を引き起こさなかった。」

(Shi 1992: 111)

Shi (1992) によると、(29a) は後続の結果文が省略されている文であり、事件全体を完全に描写するとすれば、(29b) のように “才没有造成损失” (「損を引き起こさなかった」) を入れなければならないとしている。この場合、結果文の主語は “那场火” (「あの火事」) であり、痕跡 (t_i) を残して文頭に移動することによって主題化すると説明している。

一方で Huang, Li and Li (2009) では、Shi (1992) の問題点を指摘し、中国語の主題構文

を全て移動生成の観点で分析すべきではないと主張している。すなわち、CP/TP内に空所がある場合は移動分析が適用されるが、空所のない関連性主題及び主題と同一指示を持つ再帰代名詞がある場合は基底生成分析が適用されることを指摘している。そのうち関連性主題に対して基底生成分析が適用される証拠として、次の二つの根拠を提示している。

まず、一つ目の根拠は、(30)のように主題名詞句が後続のコメント文の中に復元できない点である。

(30) *张三, 我 最 喜欢 [(张三的) 爸爸]。

张三 私 最も 好き 张三の 父

直訳: 「*张三といえば、私は(张三の)お父さんが一番好きだ。」

(Huang, Li and Li 2009: 203)

(30)で示すように、主題として生起する“张三”(「张三」)がコメント文内に現れると非文になる。したがって、名詞句“张三的爸爸”(「张三の父」)の中から“张三”を取り出して主題位置に移動するという分析は妥当ではないと Huang, Li and Li (2009)が示している。

また、もう一つの根拠は島の制約に従わないことである。

(31) 水果_i, 我 最 喜欢 [[不 怕 吃 香蕉_i 的] 人]。

果物 私 最も 好き ない 嫌がる 食べる バナナ の 人

「果物といえば、私はバナナを食べるのを嫌がらない人が一番好きだ。」

(Huang, Li and Li 2009: 203)

(31)のように、主題の“水果”(「果物」)と同一指示を持つ“香蕉”(「バナナ」)は複合名詞句“不怕吃香蕉的人”(「バナナを食べるのを」嫌がらない人)の中に生起しているが、文が容認できるため、島の制約に従わない Huang, Li and Li (2009)によって指摘されている。

さらに、関連性主題構文以外にも、コメント文の中に再帰代名詞がある場合も同じ

く基底生成だと分析されている(Huang 1982; Shyu 1995, 2014)。

(32) a. 张三_i, 我 看见 他_i 了。

张三 私 見る 彼 PERF

「张三_iは、私は彼_iを見た。」

b. 张三_i, 我 看过 [他_i 写的 书]。

张三 私 読む-EXP 彼 書く の 本

「张三_iは、私は彼_iが書いた本を読んだことがある。」

(32)では、“张三”と同一指示を持つ代名詞“他”(「彼」)が形態的に出現している。また、(32b)のように、複合名詞句の中に“张三”と同一指示を持つ代名詞“他”が現れても容認できるため、島の条件に抵触しないと言える。すなわち、移動ではなく基底生成であると考えられる。

以上の事実からは、中国語の関連性主題、及び空所のない主題化構文は基底生成分析であると説明される。ただし、移動によって主題が生成される主題構文も存在する。Huang, Li and Li (2009)では、後続の文内に主題と同一指示を持つ空範疇がある際には、主題は移動によって生成されると提案している。さらに、この場合の移動は英語の *wh* 移動と同じく A' 移動である(cf. Huang 1982, 1984; Huang, Li and Li 2009; Tsai 1994; Shyu 1995)。A' 移動を主張する根拠として、(33)のように長距離移動が許される現象を挙げている。

(33) 张三_i, 我知道 李四 觉得 你们 都会 喜欢 *e_i*。

张三 私 知る 李四 思う あなたたち みな だろう 好き

直訳：「张三_iは、私は李四がみんなは(彼_iのことが/*e_i*)好きだろうと思っ
ていることを知っている。」

= 「张三のことに、みんなが好きだろうと李四が思っていることを私が知
っていた。」

(Huang, Li and Li 2009: 207)

(33)のように文境界がない場合は、深く埋めこまれた要素が長距離移動を経て主題化することが可能である。そして、移動が生じている根拠については、Huang, Li and Li (2009)によって島の条件で説明されている。

(34) a. *李四_i, 我认识 [很多 [[e_i 喜欢] 的] 人]。

李四 私 知り合う たくさん 好き の 人

「李四_iに関して、私は（彼が_i）好きな人とたくさん知り合っている。」

b. *李四_i, 我 很 喜欢 [[[e_i 唱歌] 的] 声音]。

李四 私 とても 好き 歌う の 声

「李四_iに関して、私は（彼_iの）歌う声がとても好きだ。」

(Huang, Li and Li 2009: 208)

(34)は、複合名詞句の中から“李四”を取り出して移動させているが、複合名詞句制約に違反するため、非文となる。ここから主題である“李四”は移動によって生成されていると言える。

上記の移動分析に対して、Xu and Langendoen (1985)、徐・刘 (1998)では反論が提示されている。彼らは中国語の主題構文は基底生成であり、移動によって派生するものではないことを主張している。その理由は(35)で示されている。

(35) a. *这本书, 读 过 [] 的 人 来 了。

この本 読む EXP の 人 来る PERF

「*この本は、読んだことがある人が来た。」

b. 这本书, 读 过 [] 的 人 不 多。

この本 読む EXP の 人 ない 多い

「この本は、読んだことがある人が多くない。」

(徐・刘 1998: 56)

(35)に挙げた二つの文は同じ構造であり、島の条件によって両方の文が非文になることが予測される。しかし、(35a)は予測通り非文となる一方で、(35b)は容認できる文と

なっている。つまり、(35a)については、島の条件以外の原因によって非文法性が生じていると考えられることから、主題は移動によって生成されたのではないと Xu and Langendoen (1985)は述べている。この反論に対して、Huang and Li (1996)、Shi (1992)、Li (1990)では、主題が無生物を表す場合には島からの移動が可能であること、容認可能性の差異が生じる理由については、述語の性質も関与することを示している。

上述の説明から、中国語の主題構文において、関連性主題および空所がない主題化主題は基底生成分析が適用され、空所がある主題化主題に対しては移動分析が適用されるという二つの派生方法があることがわかる。

また、ここまでは先行研究における関連性主題構文と主題化主題構文の統語構造及びその派生メカニズムを概観したが、前節で言及したように、中国語の主題構文は関連性主題構文と主題化主題構文だけではなく、対照的主题構文も存在する。しかしながら、対照主題に関して、統語構造と派生メカニズムはまだ明らかにされていない (Shyu 2014)。

3.4. まとめ

ここまでは、英語、日本語、中国語それぞれの主題に関する先行研究を概観した。これらの三言語における主題の分析をまとめると、以下の表のようになる。

表 1 英語、日本語、中国語における主題研究の整理

	言語類型	主題要素	主題タイプ	生起位置	派生方法
英語	主語卓越型	NP, PP	通常主題	TopP, Spec	基底生成 (<i>wh</i> 移動)
			対照主題		
日本語	主語・主題卓越型	NP, PP	通常主題	TopP, Spec	基底生成
			関連性主題		
			対照主題	TP, Spec	移動
中国語	主題卓越型	NP, PP, V(P), A(P)	通常主題： 空所あり	TopP, Spec	移動
			通常主題： 空所なし		基底生成
			関連性主題		
			対照主題	?	?

次節では、これまでの議論では言及されていない、もしくは十分に論じられていない点を指摘し、本論文で解決すべきことを提示する。

4. 問題の所在

前節では意味・語用論的な観点および統語的な観点という二つのレベルを分け、英語、中国語、日本語における主題構文を巡る研究についてそれぞれ概観した。本節では先行研究で十分に論じられていない点、もしくは先行研究の分析における妥当ではない点を指摘し、本研究の具体的な目的を示す。

問題点を示す前に、まずは第一章及び前節までの先行研究に対する説明の中から日本語と中国語の相違点をまとめる。

(36) 日本語と中国語の相違点

a. 形態的マーカー :

日本語には形態的マーカーがある一方で、中国語には存在しない。そのため、中国語では主題構文において焦点と主題を区別するのが困難である。

b. 動詞（句）の主題化 :

中国語は動詞（句）が直接主題になることができる。他方、日本語の場合には動詞（句）が直接主題位置に現れることはできず、「こと」「の」によって名詞化される必要がある。

(36)の相違点に基づいて、第1章で提示した本論文での課題と関連する問題を以下のように指摘する。

① 主題と焦点の違い（第3章）

日本語と中国語は同じく「主題卓越型」言語に所属するが、形態的なマーカーを持つ日本語では、(37)のように主題の「は」と焦点の「さえ」「も」などの要素と共起できない。一方で、(38)のように「さえ」「も」と同じ意味を表す“连”は主題位置に出現することができる。

(37) a. この本は、彼が読んだ。

b. この本さえ、彼が読んだ。

c. *この本さえは、彼が読んだ。

(38) 连 这本书， 我 都 不 想 看。

LIAN この本 私 DOU ないたい 読む

「この本さえ、私は読みたくない。」

徐・刘 (1998)において、(38)のような“连……都”構文における“连”は対比を表し、主題焦点（いわゆる「対照主題」）として指摘しているが、“连”を焦点マーカーと見なす研究も少なくない (Tsai 1993; Paris 1994; Badan and Del Gobbp 2010; 何 2011 など)。また、“连 NP”が対比を表しても、先行研究によって“连”を表す情報の「既

知」程度については言及されていないため、「対照主題」と見なせるかどうかは断言できない。そのため、“连”は焦点か主題かという点において曖昧性が生じている。さらに、“连”は日本語の「さえ」「も」と同じ意味と考えられているが、もし“连 NP”が主題であれば、日本語の「さえ」「も」との関係をどのように説明すべきなのかという問題も生じる。

② 主題化されることが可能な要素の違い (第4章)

中国語においては、動詞(句)が主題を担うことができる。

- (39) 吃, 我是吃了, (但是没吃饱)
食べる 私 COP 食べる-PERF しかし ない 食べる お腹いっぱい
「食べることは、私は食べたが、(お腹がいっぱいになっていない)」

先行研究の説明でまとめた特徴に示すように、中国語では関連性構文と空所のない通常の主題化構文は基底生成であり、空所がある主題化構文は移動によって生成される。それでは、述語が主題になる場合、どのようなメカニズムで派生されたのかという問題が生じる。

また、日本語の場合、(40a)のように動詞(句)の直後に「は」を付加することはできない。動詞(句)が主題位置に出現するのであれば、(40b)で示すように、「こと」「の」のような名詞化辞を伴わなければならない。

- (40) a. *食べるは 私は食べたが、…
b. 食べること/のは 私は食べたが、…

つまり、日本語の場合、「こと」「の」によって動詞を名詞化してから主題位置に生起することが可能になるのに対して、中国語では動詞がそのまま主題位置に生起することができる。このような中国語と日本語の動詞(句)主題化構文の形態上の差異を説明している先行研究は見られない。

ここから以上の二つの問題に対して、それぞれ第3章と第4章で分析を行い、解決

を試みる。

第3章 主題と焦点の区別：“连”の主題化現象から

1. はじめに

本章では、中国語の焦点マーカーと捉えられている“连”（「LIAN」）の主題化現象を取り上げ、並行的な意味を表す日本語の「さえ」「も」との比較を行う。そのうえで、日中語の主題構文における主題位置の生起制限の共通点を示す。

中国語において、“连……都”（「さえ（も）」）構文は焦点構文であり、“连”は一般的に焦点マーカーとみなされている（Tsai 1994; Gao 1994; Badan 2007 など）。

(1) 他[连 这本书] 都 没 看过。

彼 LIAN この本 DOU ない 読む-EXP

「彼はこの本さえ（/も）読んだことがない。」

(1) の中国語において、“这本书”（「この本」）は目的語として、“连”を伴い、主語（“他”「彼」）と動詞（“没看过”「読んだことがない」）の間に現れている。SOV 語順が中国語における焦点構文に相当するという Huang, Li and Li (2009)の分析に従い（Huang, Li and Li 2009）、同様の語順となっているこの構文も焦点構文といえる。すなわち、(1)では「この本」を強調し、「(他の本に関しては言うまでもなく、)この本も読んだことがない」という解釈となる。他方で、日本語では、(2)のようにとりたて詞である「さえ」や「も」、あるいは「さえ…も」を用いることで同じ意味を表すことが可能である。

(2) a. 彼はこの本 さえ 読んだこと がない。

b. 彼はこの本 も 読んだこと がない。

c. 彼はこの本 さえ 読んだこと も ない。

また、以下に示すように、中国語の“連 NP”句と日本語の「さえ」「も」を含んだ句は文頭に現れることができる。

(3) [连 这本书], 他 都 没 看过。

LIAN この本 彼 DOU ない 読む-EXP

「この本さえ、彼は読んだことがない。」

(4) a.この本さえ、彼は読んだことがない。

b.この本も、彼は読んだことがない。

Huang, Li and Li (2009)によると、基本的には中国語において SOV 語順は焦点構文に相当し、OSV 語順は主題構文に相当すると言及されている。そのため、(3)のように“连”が目的語を伴って文頭に生起する場合には“连 NP”句は主題として解釈されると考えられる。しかしながら、日本語の場合にはかき混ぜ規則(Scrambling)が適用し、語順の変化が中国語より自由であるため、(4)の「この本さえ」と「この本も」は必ず主題要素になるわけではない。さらに、一般的には“连”は日本語の「さえ」や「も」と同じように、焦点マーカーと見なされているため (Tsai 1994; Gao 1994; Badan 2007; 何元建 2011 など)、主題位置に現れることは不可能なはずである。また、語用論的な観点から見ると、旧情報としての主題と新情報を表す焦点は対立の関係にあり、一つの要素が同時に主題と焦点を担うことはできない。従って、“连 NP”句を主題として論じる分析と、“连”を焦点マーカーとして論じる分析は矛盾することとなる。このような矛盾は、焦点、主題ともに形態的なマーカーを持つ日本語では明示的な形で表される。

(5) a.*この本さえは、彼は読んだことがない。

b.*この本もは、彼は読んだことがない。

上記の事実に対する観察に基づき、本章では以下の点を考察する。

(6) a. 中国語において、文頭に生起する“连 NP”句は焦点句か、それとも主題か。

- b. “连”は意味的に極めて日本語の「さえ」に似ているが、統語上の生起位置に差も見られる。このような両言語における二つの焦点構文の異同をどのように捉えるか。

本章の構成は以下の通りである。2 節では中国語の“连……都”焦点構文の基本的な特徴を説明する。3 節では、“连”を焦点マーカールと見なす分析と“连”を焦点マーカールと見なさない分析の代表的な先行研究を概観し、問題提起を行う。4 節では、さらなる証拠を提示し、“连”が焦点マーカールとして機能しないために、“连 NP”が主題となりうるという主張を支持する。5 節では、理論的な分析を通して、“连……都”焦点構文において、焦点マーカールとして機能するのはむしろ“都”であり、“都”は日本語の「さえ」と「も」の両方の性質を併せ持っているという分析を、両言語の作用域の比較に基づいて提示する。6 節では、経験的事実に基づき、“都”を含めて焦点機能を持つ要素は中国語でも日本語でも主題にならないという一般化を提案する。7 節では、“连 NP”が主題になる際に、対照主題を示すという語用論的な機能を持つことを論じる。8 節では第 3 章全体の議論をまとめる。

2. “连……都”焦点構文

詳細な議論に入る前に、まず本章の議論の前提となる“连……都”焦点構文の基本的な文型と省略に関する制限を本節で観察しておくことにする。

“连……都”焦点構文においては、(7b)のように“连”が主語につくのであれば、生起位置は変わらずに焦点構造が派生されるのに対して、(7c~e)で示すように、“连”が目的語につく場合、“连+目的語”は必ず文頭や動詞句の前に現れなければならない(何 2011)。また、“都”に関してはいずれの語順の場合であっても、動詞の前に現れる。

(7) a. 张三 开过 飞机。 [基本語順 SVO]

张三 運転する-EXP 飛行機

「張三は飛行機を運転したことがある。」

- b. [连 张三] 都 开过 飞机。 [主語+连 SVO]
 LIAN 張三 DOU 運転する-EXP 飛行機
 「張三さえ（/も）飛行機を運転したことがある。」
- c. * 张三 都 开过 [连 飞机] [元位置の目的語+连 SVO]
 張三 DOU 運転する-EXP LIAN 飛行機
- d. [连 飞机] 张三 都 开过。 [文頭位置の目的語+连 OSV]
 LIAN 飛行機 張三 DOU 運転する-EXP
 「飛行機さえ、張三が運転したことがある。」
- e. 张三 [连 飞机] 都 开过。 [文中位置の目的語+连 SOV]
 張三 LIAN 飛行機 DOU 運転する-EXP
 「張三は飛行機さえ運転したことがある。」

さらに、“连……都” 焦点構文の中にある“都”は省略できないが、“连”の音韻的具現は随意的である。(8)のいずれの文も“连”は省略できるのに対して、“都”を省略すると非文になる。

- (8) a. [(连) 张三] * (都) 开过 飞机。
 LIAN 張三 DOU 運転する-EXP 飛行機
 「張三さえ飛行機を運転したことがある。」
- b. [(连) 飞机] 张三 * (都) 开过。
 LIAN 飛行機 張三 DOU 運転する-EXP
 「飛行機さえ、張三が運転したことがある。」
- c. 张三 [(连) 飞机] * (都) 开过。
 張三 LIAN 飛行機 DOU 運転する-EXP
 「張三は飛行機さえ運転したことがある。」

以上の基本的な特徴に基づき、次節では、先行研究において“连……都” 焦点構文に対してどのように分析されているかを示す。

3. 先行研究と問題提起

本節では、まず、“连……都”焦点構文における“连”が焦点であるかどうかについて二つの異なる立場の研究をそれぞれ概観する。次に、先行研究で十分に論じられていない問題を指摘する。

3.1. 中国語の焦点構文

徐 (2001)によって、中国語の焦点は四つの形式でマークされると指摘されている。それは、ゼロ形式、アクセント、語順および焦点マーカである。“连……都”はどのような焦点形式なのかについては、同じく焦点構文としての“是……的”と異なる分析がなされている。

日本語の分裂文である「～のは～だ」の意味を表す“是……的”焦点構文において、“是”は焦点マーカとして機能しているが(Teng 1979; Huang 1982; Cheng 1983; Chiu 1993; Shi 1994; Lee 2005; Huang and Li and Li 2009 など)、通常の「(基礎)判断文」にある場合はコピュラ動詞と見なされている(Paris 1979; Paul and Whitman 2008; 何 2011 など)。すなわち、“是”自体はコピュラ動詞であり、ある特定の構文の中に生起することで焦点マーカとしての機能を果たすと言える。この点に関しては、多くの先行研究において見解が一致している。

例えば、何元建 (2011)では、(9)に示したような“张三”（「張三」）に焦点を与える分裂文では、(10a)のような基礎判断文から“是”が移動することによって生成されると指摘している。また、統語構造は(10b)のように示されている。

(9) 是 张三 戴 隐形眼镜 的。

COP 张三 つける コンタクトレンズ の

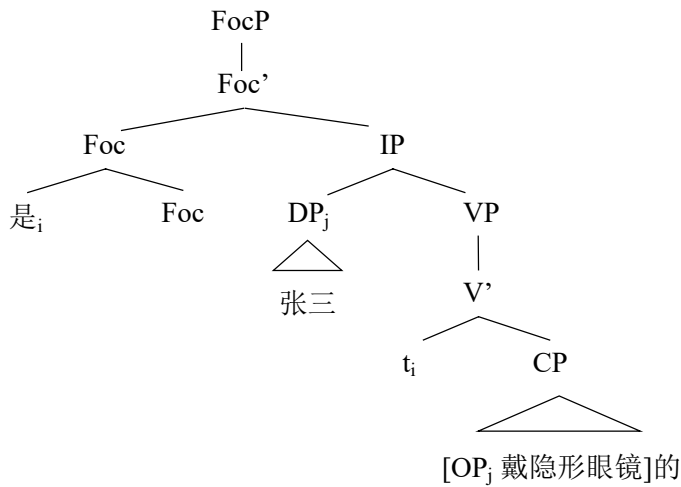
「コンタクトレンズをつけているのは張三だ。」

(10) a. 张三 是 戴 隐形眼镜 的。

张三 COP つける コンタクトレンズ の

「張三はコンタクトレンズをつけている（人である）。」

b.



(何元建 2011 : 392)

(10b) が示しているのは、“是”が元々動詞句の主要部に位置するコピュラ動詞であり、FocPの指定部に移動することによって、ゼロ焦点詞と併合し、焦点の機能を持つということである。この場合、“是……的”焦点構文内の要素はいずれも純粋な焦点マーカーではなく、ゼロ形式の焦点主要部が存在し、構文が成り立ってから焦点が付与されると言える。

一方で、“是……的”と同様に構文で焦点を表す“连……都”に対する分析には二つの立場が見られる。一つは、“连”を意味的に焦点マーカーと見なし、“连……都”全体が焦点構文だと捉える分析である (Tsai 1993; Paris 1994; Badan and Del Gobbo 2010; 何 2011 など)。もう一つは、“连”自体は焦点マーカーではなく、“连”と“都”を組み合わせることで構文全体が焦点の機能を果たすという分析である (Shyu 1995, 2014; Tsao 1990; 徐・刘 1998 など)。

こうした異なる立場が存在するのは、“连”の性質がまだ解明されていないことを示唆している。また、日本語と比較すると、“连”と「さえ」は同様の意味を表すが、両者は完全に並行的な性質を持つわけではないことも考慮に入れる必要がある。次の3.2節と3.3節では、“连”に対する二つの立場からの捉え方について先行研究をそれぞれまとめる。

3.2. “连”を焦点マーカーとして捉える立場

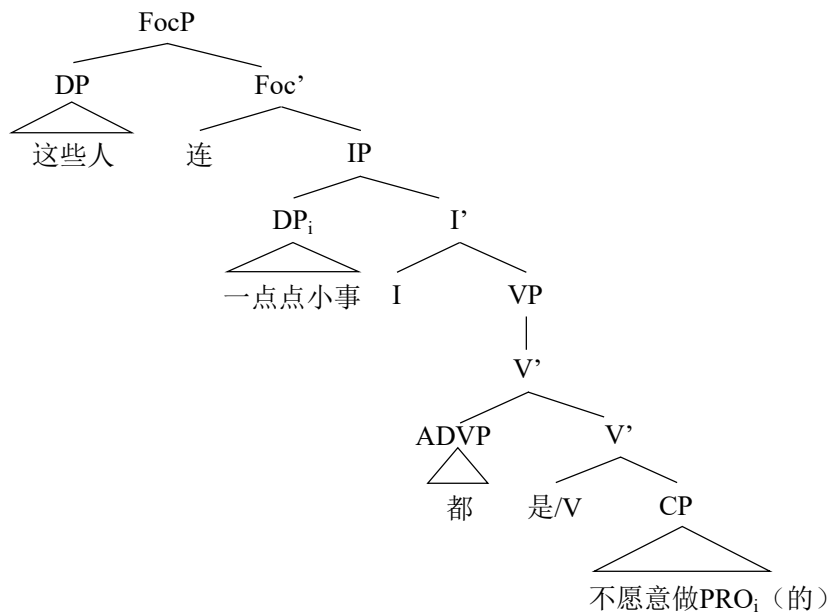
まずは、“连”は焦点マーカーであり、“连……都”全体で焦点構文が構成されるという分析を採用している先行研究を整理する (Tsai 1994; Gao 1994; Badan 2007; Paris 1994; 何元建 2011 など)。

例えば、何元建 (2011) は“连……都”焦点構文の派生について、(11)のように分析を行っている。このとき、(10b)に挙げた“是……的”構文とは異なり、この分析では“连”そのものが焦点主要部となっており、“一点点小事 (ちょっとした仕事)”に焦点を与えている。

(11) a. 这些人连一点点小事都是不愿意做的。

「これらの人は、ちょっとした仕事さえやりたがらないんだ。」

b.



(何元建 2011: 407)

(11b)に示しているように、“连”は焦点主要部として基底生成しており、(10b)のように移動によって焦点機能を得ていないと言える。

3.3. “连”を焦点マーカーとして捉えない立場

前節で示した先行研究とは異なる立場として、Shyu (1995,2014)や刘・徐 (1998)がある。これらの先行研究では“连……都”を焦点構文として見なす一方で、“连”自体は焦点マーカーとして扱わない分析を提案している。

Shyu (2014)では、“连 NP”句は生起位置と派生方法によって、異なる機能を担うことを指摘している。例えば、(12a)のように“连”が文頭に生起し“都”は従属節にある場合や、(12b)のように“连”が文中に生起し、“连”と“都”が同一単文内にある場合は、“连 NP”句は移動によって派生され、焦点になる。一方で、(13)のように“连”は文頭に生起するが、“都”が主節にある場合、“连 NP”は基底生成であり、主題になる。

(12) “连 NP” 焦点 :

a. 连 玛丽 张三 认为_[CP 李四 都 不喜欢]。

LIAN メアリ 张三 思う 李四 DOU 好きではない

「メアリのことさえ、李四は好きではないと張三が思っている。」

b. 张三 认为_[CP 李四 连 玛丽 都 不喜欢]。

张三 思う 李四 LIAN メアリ DOU 好きではない

「張三は李四がメアリのことさえ好きではないと思っている。」

(13) “连 NP” 主題 :

连 玛丽 张三 都 认为 _[CP 李四 不喜欢]。

LIAN メアリ 张三 DOU 思う 李四 好ではない

「メアリのことさえ、李四も好きではないと張三も思っている。」

また、それぞれの派生については(14)のように示されている。

(14) a. 连-DP_i Subj... _[CP S t_i 都 V t_i] (= (12a,b))

b. 连-DP_i Subj 都-V... _[CP S V e_i] (=13)

(Shyu 2014 : 117)

(14a)では、“连 NP”句は移動によって生成され、文中に現れる際には痕跡 t_i までで止まる。一方、(14b)では“都”が主節にあり、文頭の“连 NP”句は基底生成であることを示している。“连 NP”句が文頭に基底生成する根拠を説明するために、Shyu (2014)では(15)のような事実を挙げている。

(15) a. 连 玛丽_i 张三 都 [不 送 给 她_i 书]。

LIAN メアリ 张三 DOU ない 贈る あげる 彼女 本

直訳：「メアリさえ、張三は本を彼女に贈らない。」

＝「張三はメアリさえ（にも）本を贈らない。」

a'.* 张三 连 玛丽_i 都 不 送 给 她_i 书。

张三 LIAN メアリ DOU ない 贈る あげる 彼女 本

b. 连 李四_i 张三 都 不 看 [他/* t_i 的 书]。

LIAN 李四 张三 DOU ない 読む 彼 の 本

直訳：「李四さえ、張三が彼の本を読まない。」

＝「張三は李四の本さえ読まない。」

b'.连 玛丽_i, 张三 都 讨厌_{[NP[CP e_j 夸奖 她_i/* t_i 的] 人_j]}。

LIAN メアリ 张三 DOU 嫌い 褒める 彼女 の 人

直訳：「メアリさえ、張三は彼女を褒める人も嫌いだ。」

＝「張三はメアリを褒める人さえ嫌いだ。」

(Shyu 2014 : 117)

通常の“连……都”焦点構文は(7)で示したように、“连”が文頭にも文中にも生起できる。しかし、(15a)と(15a')のように、再帰代名詞（“她”（彼女））が出現する場合、それと同一指示を持つ“玛丽”（メアリ）は文頭に生起することは可能であるが、文中に生起することはできない。また、(15b)と(15b')に示すように、複合名詞句の中から要素を取り出すことはできないという島の制約に基づき、再述代名詞の出現は容認される一方で、痕跡のままでは非文となっている。

さらに、Shyu (1995, 2014)によって、弱交差効果(Weak Crossover; WCO)による影響から“连 NP”句が主題位置に生起できること、すなわち“连”は焦点マーカではない

ことが示されている。弱交差というのは、痕跡を c 統御していない代名詞を先行詞が飛び越える現象である。Benincà and Poletto (2004)では、焦点マーカーは演算子の一種として、LF 部門で上昇して作用域を決定するため、WCO 効果に影響されることを指摘している。一方で、主題要素は決して WCO 効果を起こさない (Rizzi 1997, Shyu 1995, Gasde 1999)。例えば、Badan and Del Gobbo (2010) によって提示された(16)では、“連 NP” が埋め込み文の主語を束縛していないため、非文である。この語順は Shyu が提示した(14a)の構造と一致する。つまり、(16)の“連 NP” は焦点となっているため、WCO に影響され、非文法性が見られる。対して、通常の主語構文である(17)においては WCO 効果が起こらない。

Cf. 連-DP_i Subj... [CP S t_i 都 V t_i] (14a)再掲

(16) *我 连 妹妹_i 都 [把 她_i 喜欢的 玩具]_j 抢 走 了 t_j。

私 LIAN 妹 DOU BA 彼女 好きな おもちゃ 奪う 行く PERF

= 「私は妹が好きなおもちゃさえ奪った。」

(Badan and Del Gobbo 2010: 7)

(17) [这条 可爱的 狗]_i, [它_i 的 主人] 会 喜欢 t_i。

この 可愛い の 犬 それ の 飼い主 だろう 好き

「この可愛い犬_iは、きっと飼い主が (この犬_iが) 好きだろう。」

そこで、Shyu (1995, 2014)は以上のような WCO 効果と主題・焦点の関係に基づき、(14b)の構造を持つ(18)の文は WCO に影響されていないため、文頭にある“连张三” (「LIAN 张三」) は基底生成された主題であると分析している。

Cf. 连-DP_i Subj 都-V... [CP S V e_i] (14b)再掲

(18) 连 张三_i, [NP 批评 他_i 的 那个女人] 都 认为 [CP 玛丽 喜欢 (他_i)]

LIAN 张三 批判する 彼 の あの女 DOU 思う メアリ 好き 彼

直訳：「张三_iさえ、彼_iを批判する女はメアリが (彼_iのこと) が好きだと思っている。」

＝「張三を批判する女さえ、メアリが(張三のことを)好きだろうと思っている。」

(Shyu 1995: 135)

ここまでは、中国語の“连……都”焦点構文の基本的な文型を示し、“连”に関する2種類の捉え方を概観した。次節では、前述の先行研究に残された問題を提示する。

3.4. 問題提起

前節でまとめたように、Shyu (2014)では、(19a)のように、“连 NP”が移動によって文頭や文中に生起する場合には焦点を表す一方で、(19b)のように文頭に基底生成する場合には主題を表すと分析している。この分析を行う前提として、Shyuは“连”が焦点マーカ―ではないことを指摘している。

(19) a. 连-DP_i Subj... [CP S t_i 都 V t_i] (14再掲)

b. 连-DP_i Subj 都-V... [CP S V e_i]

ここで問題が生じる。それは、“连”は意味的に「さえ」と並行的であり、「最低限」や「最小限」という極端な事柄を強調する前置詞である。しかし、日本語の「さえ」は焦点マーカ―であるのに対して、Shyuなどによると“连”は焦点機能主要部として同じような役割を果たしていない。この機能上の非対称性はどのように扱うのかは問題となる。つまり、日本語において、「さえ」や「も」はある要素を強調するための焦点マーカ―であり、焦点構文の中では、「さえ」や「も」によって強調される要素に焦点を与える。対して、中国語の“连”が焦点マーカ―でないのであれば、“连……都”焦点構文においてどのように焦点を与えるのかは先行研究では言及されていない。また、確かにShyuにより、“连”が焦点マーカ―ではないという主張から、焦点マーカ―と主題位置の矛盾は解決されたものの、言語対照の観点から見ると、日本語の「さえ」「も」構文との共通点をどのように捉えられるかという問題も生じる。

ここまでの説明に基づき、本章で補足分析と解決すべき問題を以下のように設定する。

(20) a. “连”が焦点マーカではないという分析を支持するさらなる証拠を提示する。

(4 節)

b. “连……都” 焦点構文は、日本語の「さえ」「も」に対してどのような関係にあるか。(5 節と 6 節)

c. “连”は焦点マーカでなければ、どのような機能を果たしているのか?(7 節)

次節からは、上記の設問に対して具体的な分析を行う。

4. “连 NP”は主題になりうるか

本節では、“连”は焦点マーカではないという立場に立ち、さらなる証拠を提示する。具体的には、Rizzi (1997)によって提案された通言語的な主題と焦点の区別に従い、“连 NP”句が文頭に基底生成する場合と、移動によって文頭や文中に生成する場合の統語的な違いを示した上で、Shyu (1995, 2014)で論じられていた文頭に基底生成される“连 NP”が主題であるという分析が支持されることを示す。Rizzi (1997)では、Cinque (1990)の分析を参考に、通言語的な主題と焦点の区別を以下のように挙げている。

(21) ①残留接語 (Resumptive Clitic)

②弱交差効果 (Weak Cross-over)

③裸量化要素 (Bare Quantificational Elements)

④唯一性 (Uniqueness)

⑤wh 句との両立性 (Compatibility with *Wh*)

Rizzi はイタリア語を中心に分析を行っているが、本節ではこのような違いが中国語にも当てはまるかについて検証を行う。また、経験的事実の観察を通して、“连 NP”句が文頭に基底生成する場合は主題になりうるという Shyu (1995, 2014)の分析が支持されることを示す。

① 残留接語との共起

フランス語やイタリア語のようなロマンス語において、代名詞は接語の一種であり、

主題化される場合には、主題節後のコメント文内に残留接語を含むことができる。例えば、(22a)のように主題化された構成素 ‘Il tuo libro’ (‘Your book’) が直接目的語の場合、接語 ‘lo’ (‘I’) は義務的に出現し、(22b)のように省略されると非文となる。一方で、(23a)が示しているように、直接目的語 ‘IL TUO LIBRO’ が焦点化される場合は、残留接語 ‘lo’ と共起できず、(23b)のように省略することが要求される (Cinque 1990: 63)。

(22) 主題化

a. Il tuo libro, lo ho comprato

'Your book, I bought it.'

b. *Il tuo libro, ho comprato t

'Your book, I bought.'

(23) 焦点化

a. *IL TUO LIBRO lo ho comprato (non il suo)

'YOUR BOOK, I bought it (not his)'

b. IL TUO LIBRO ho comprato (non il suo)

'YOUR BOOK, I bought it (not his)'

(Rizzi 1997 : 289-290)

中国語において、主題化を引き起こす際には上記と同様の現象が見られる。ただし、Rizzi の観察と異なるのは、(24a)のように、主題化された構成素が主語の場合にはコメント文内に代名詞“他”(「彼」)を必要とするが、目的語の代名詞残留については、(24b)に挙げたように義務的ではない。

(24) 主題化

a. 张三_i, 我 以为 [* (他_i) 进 去 了]。

张三 私 思う 彼 入る 行く PERF

「張三は (ね)、私は彼が入ったと思う。」

- b. 张三_i, 我 以为 [你 看见 e_i/他 了]。
 张三 私 思う あなた 見かける e_i/彼 PERF
 「張三は（ね）、私はあなたが（彼を）見かけたと思う。」

また、(25)の焦点構文を観察してみると、焦点化された要素が主語か目的語かといった違いにもかかわらず、代名詞の残留は全て容認できない。

(25) 焦点化

- a. 我 认为 连 张三_i (*他_i) 都 不 喜欢。
 私 思う LIAN 张三 彼 DOU ない 好き
 「私は張三さえ好きじゃないと思う。」
- b. 我 认为 连 张三_i 李四 都 不 喜欢 (*他_i)。
 私 思う LIAN 张三 李四 DOU ない 好き 彼
 「私は李四が張三さえ好きじゃないと思う。」

それでは、“连 NP”句が文頭に基底生成する場合には、どのような性質を示すか確認する。

- (26) a. 连 张三_i, 我 都 以为 [他_i/*e_i 不 去 学校]。
 LIAN 张三 私 DOU 思う 彼/*e_i ない 行く 学校
 直訳：「張三_iさえ、私は彼_iが学校へ行かないと思う。」
 = 「私は張三さえ学校へ行かないと思う。」
- b. 连 张三_i, 我 都 以为 [李四 没 看见 e_i/他_i]。
 LIAN 张三 私 DOU 思う 李四 ない 見かける e_i/彼
 直訳：「張三_iさえ、私は李四が（彼_iを）見かけていないと思う。」
 = 「私は李四が張三さえ見かけていないと思う。」

(26a)では、(24)の主題化の文と同様に、主語前置の際にはコメント文内に同一指示を持つ代名詞が義務的に現れるが、(26b)のような目的語前置の場合には代名詞の出現

は義務的ではない。

② 弱交差

以下に示すように主題要素は弱交差が起こらないが、焦点要素は弱交差効果によって容認度の差が見られる。

(27) 主題

Gianni_i, sua_i madre lo_i ha sempre apprezzato.

‘Gianni, his mother always appreciated him.’

(28) 焦点

?? GIANNI_i, sua_i madre lo_i ha sempre apprezzato t_i (not Pireo)

‘GIANNI his mother always appreciated, not Pireo.’

(Rizzi 1997: 290)

中国語に関して、この点については 3.2 節で先述したように Shyu(2014)によって分析がなされている。端的に言えば、(29)のように主題構文には弱交差が観察されないのに対して、(30)で示すような焦点構文では弱交差が観察される。また、(31)のような“連 NP”が文頭に基底生成する場合は弱交差が引き起こされていないため、主題構文として捉えられる。

(29) [这条 可爱 的 狗]_i, [它_i 的 主人] 会 喜欢 t_i. ((16)再掲)

この 可愛い の 犬 それ の 飼い主 だろう 好き

「この可愛い犬_iは、きっと飼い主が（この犬_iが）好きだろう。」

(30) *我 连 妹妹_i 都 [把 她_i 喜欢的 玩具]_j 抢 走 了 t_j.

私 LIAN 妹 DOU BA 彼女 好きな おもちゃ 奪う 行く PERF

= 「私は妹が好きなおもちゃさえ奪った。」

((17)再掲)

- (31) 连 张三_i, [NP 批评 他_i 的 那个女人] 都 认为 [CP 玛丽 喜欢 (他_i)]
 LIAN 張三 批判する 彼 の あの女 DOU 思う メアリ 好き 彼
 直訳：「張三_i さえ、彼_i を批判する女はメアリが (彼_i のこと) が好きだと思っ
 ている。」
 =「張三を批判する女さえ、メアリが(張三のことを)好きだろうと思っている。」
 ((18)再掲)

③ 裸量化要素との共起

Rizzi では、DP 内の語彙選択を伴わない量化要素は主題となることはできないが、
 焦点化は許されることが論じられている。

- (32) a. *Nessuno, lo ho visto.

'No one, I saw him.'

- b. *Tutto, lo ho fatto.

'Everything, I did it.'

- (33) a. NESSUNO ho visto t.

'NOONE I saw.'

- b. TUTTO ho fatto t.

'EVERYTHING I did.'

(Rizzi 1997: 290)

(32)(33)で示されている 'Nessuno' ('No one')、'Tutto' ('Everything') はそれ自体
 が「未知情報」であり、「主題」が要求する「既知」という意味的機能と矛盾している。
 そのため、(34)の主題化文は非文法的となる。一方で(35)の場合は発話の強調を
 'NESSUNO'、'TUTTO' に与えて焦点化しているので、容認できる。

中国語の主題文については、必ずしも「停頓詞」¹² を要求しないが、「停頓詞」が文

¹² Tsao (1987, 1989)では、中国語の“啊, 呀, 吧, 呢”という“停顿词”(「停頓詞」)(日本語の文末助詞
 「ね, よ」などと対応する)を主題マーカールとみなしている。しかし、これらの「停頓詞」は日本語の「は」
 のように形態上で主題を提示するのではなく、主題とコメント文の間のポーズを強調するか、もしくは発
 話者の語気を表すかという談話的な機能を持つ。

頭の構成素に含まれる場合にはより直観的に主題提示機能が果たされる。そのため、(34a)のように、“没人”（‘no one’）の後ろに「停顿詞」“啊”が共起すると主題構造になり、量化詞“没人”の出現が容認されない。

- (34) a. *没人 啊, 要 来。
誰でもない 停顿詞 しようとする 来る
- b. 没人 要 来。
誰でもない しようとする 来る
「来ようとする人は誰でもない。」

なお、“连……都”構文においても同様の現象が見られる。

- (35) a. *连 没人 我 都 觉得 他 不知道。
LIAN 誰でもない 私 DOU 思う 彼 知らない
直訳：「*誰でもないことさえ、私は彼が知らないと思う。」
- b. 我 连 没人 都 不知道。
私 LIAN 誰でもない DOU 知らない
「私は誰でもないことさえ知らない。」

(35a)は、“连 NP”句が文頭に基底生成する文であり、このとき“没人”（‘no one’）と“连”は共起できない。一方で、(35b)の“连没人”は文中に生起することで焦点として機能するため、裸量化詞の“没人”が焦点化される。この場合の“没人”は“连”と共起できる。

④ 焦点における唯一性

Rizzi では、一つの文において主題は複数生起することが可能であるが(Paul & Whitman 2017)、焦点は一つしか生起できないと述べている。

(36) Il libro, a Gianni, domani, glielo darò senz' altro.

‘The book, to John, tomorrow, I’ll give it to him for sure.’

(37) *A GIANNI IL LIBRO darò (non a Piero, l' articolo).

‘TO JOHN THE BOOK I’ll give, not to Piero, the article.’

(Rizzi 1997: 290)

(36)の ‘Il libro’ (‘The book’), ‘a Gianni’ (‘to John’), ‘domani’ (‘tomorrow’) は全て主題となるが、(37)のように、‘A GIANNI’ (‘TO JOHN’) と ‘IL LIBRO’ (‘THE BOOK’) は両方とも焦点化されると容認できない。

中国語では、(38a)は通常の主語構文、(38b)は焦点マーカ―“只是”(「だけ」)を含む文であるが、この両者の文は上記の特徴によって区別することができる。

(38) a. 刘晓波, 2010年, 委员会 授予 了 他 诺贝尔 和平奖。

劉曉波 2010年 委員會 授与する PERF 彼 ノーベル賞 平和賞

「劉曉波は、2010年には、委員會が彼にノーベル平和賞を授与した。」

(Paul & Whitman 2017 : 12)

b. *只是 刘晓波, 只是 2010年, 委员会 授予了 他 诺贝尔和平奖。

だけ 劉曉波 だけ 2010年 委員會 授与する- PERF 彼 ノーベル賞平和賞

(38a)のように、通常の主語構文では複数の主題が認められるのに対して、(38b)のような“只是”(「だけ」)を用いて名詞句に焦点を与える文では、複数の焦点が現れると非文になる。

ここから、“连……都”構文においても基底生成する際には複数の“连 NP”句が生起できることが予測される。実際に、“连……都”構文では、“连 NP”が文頭に基底生成する場合は複数の“连”の出現が容認される。

(39) 连 张三, 连 我, 我们 都 觉得 那个人 赢不了。

LIAN 張三 LIAN 私 私たち DOU 思う あの 人 勝てない。

直訳：「*張三さえ、私さえ、私たちはあの人が勝てないと思う。」

= 「張三と私さえ、あの人が勝てないと思う。」

(39)では、“連张三”と“連我”という二つの“連”が現れている。Rizzi (1997)、Paul and Whitman (2017)で指摘された焦点の唯一性や日本語の訳文との対照から、本来“連”が二回出現するのは基本的には不可能だと考えられる。しかし、(39)が容認される理由として、二つの“連”のうち一つは焦点ではない、もしくは両方とも焦点ではないためだと考えられる。すなわち、(39)で“都”が主節にあるため、文頭の“連 NP”は基底生成されており、主題を表している。そのため、“連 NP”句が二回出現することが可能だと考えられる。

⑤ *wh* 句との両立性

Rizzi では、主文の疑問文における *wh* 演算子は、(40)のように (Top, WH) という固定された順序で Topic とともに現れることはできるが、(41)のように Focus と現れることはできないと述べている。

(40) 主題

a. A Gianni, che cosa gli hai detto?

"To Gianni, what did you tell him?"

b. *Che cosa, a Gianni, gli hai detto?

"What, to Gianni, did you tell him?"

(41) 焦点

a. *A GIANNI che cosa hai detto (, non a Piero)?

"TO GIANNI what did you tell (, not to Piero)?"

b. *Che cosa A GIANNI hai detto (, not to Piero)?

"What TO GIANNI did you tell (, not to Piero)?"

(Rizzi 1997 : 291)

(40)が示しているのは、(40a)のように疑問詞の‘che cosa’ (‘what’) は主題‘A Gianni’ (‘To Gianni’) の後ろに現れることができるが、(40b)のように逆にすると非文になる

ことである。一方で(41)において、‘A GIANNI’は主題ではなく、焦点化されている場合、疑問詞‘che cosa’は‘A GIANNI’の前でも後ろでも出現できない。

以下に示すように、“連……都”構文についても、同様の現象が観察される。

- (42) a. 连 张三_i, 我 都 想 知道 [你 给了 他_i 什么] ?
LIAN 张三 私 DOU したい知る あなた あげる-PERF 彼 何
直訳：「*張三さえ、私はあなたが彼に何をあげたのも知りたい。」
＝「私は、あなたが張三に何をあげたことさえ知りたい。」
- b. *连 张三_i, 我 想 知道 [你 都 给了 (他_i) 什么] ?
LIAN 张三 私 したい知る あなた DOU あげる-PERF (彼) 何
- c. *你 连 张三 都 给了 什么 ?
あなた LIAN 张三 DOU あげる-PERF 何

(42a)では、“连”が基底生成の場合には疑問詞と共起できることを示している。一方で、(42b)のように移動によって文頭に生成される場や、(42c)のように文中にある場合には疑問詞と共起できない。ここまでの観察をまとめると、“连”が文頭に基底生成する場合は、焦点の特徴を持っておらず、主題になりうると言える。

本節では、先行研究における“连”に対する二つの分析のうち、“连”が焦点マーカ―ではない立場に立ち、さらなる証拠を提示した。具体的には、Rizzi (1997)によって一般化された主題と焦点を区別する特徴を援用し、“连……都”焦点構文に関する経験的な事実の観察を行い、その結果として、文頭に基底生成された“连 NP”句は主題を表すことを明らかにした。従って、“连……都”焦点構文において、焦点要素に焦点を与えるのは少なくとも“连”ではないと考えられる。

それでは、“连……都”焦点構文において、“连”が焦点マーカ―でなければ、どのように焦点付与が行われているのだろうか。次節では、“连……都”焦点構文に対して理論的な観点から分析を行い、“连……都”焦点構文における焦点付与メカニズムを明らかにする。

5. 理論的分析

“連……都”焦点構文において、特に“連 NP”が主題である場合は焦点要素にならないため、どの部分に焦点を与えているのかは一目瞭然ではない。つまり、焦点付与メカニズムを解明するためには、“連……都”焦点構文の作用域を明らかにしなければならない。従って、本節では、“連……都”焦点構文と並行的な意味を持つ日本語の「さえ」「も」の作用域の議論に基づき、“連……都”焦点構文の中では“都”が焦点マーカ―となること、また生起位置の違いによって取れる作用域の範囲が異なることについて、理論的分析を通して説明を行う。

5.1. “連”の生起位置と焦点範囲の関係

4節では、“連……都”焦点構文において、“連”が焦点マーカ―ではないことを先行研究から裏付けた。本節では、“連”ではなく、“都”が統語構造の中で機能主要部として焦点要素に焦点を与える機能を果たすことを示す。

(43)で示すように、“都”は単独で日本語の「さえ」や「も」と同様の意味を表すことが可能である。ここから、焦点マーカ―として対応するのは“都”だと考えられる。その構造は(44b)のように分析することができる。

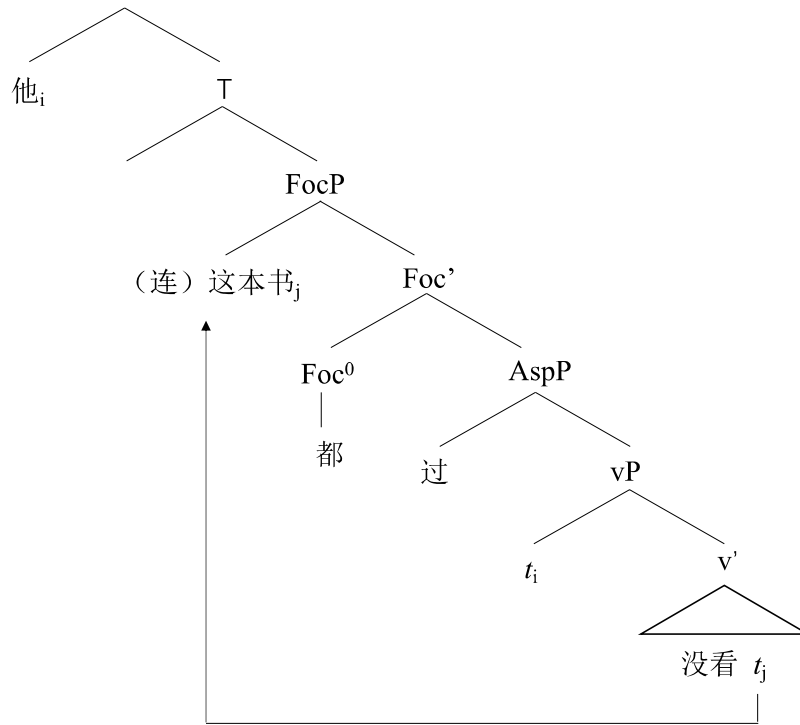
(43) 他 (連) 这本书 都 没 看过。

彼 LIAN この本 DOU ない 読む-EXP

「彼はこの本さえ(も)読んだことない。」

(44) a. 他(連)这本书都没看过。

b.



ただし、(44b)の構造からは、“都”が焦点を付与するのは、その直前に現れる要素であると考えられるかもしれない。しかし実際には、“都”は常に直前の要素に焦点を与えているのではないことを、(45)のように“(连) NP”が主題位置に出現する場合から説明することができる。

(45) a. 连 这本书，我 都 知道 他 没 看过。

LIAN この本 私 DOU 知る 彼 ない 読む-EXP

「私は彼がこの本を読んだことがないことさえ知っている。」

b.*连 这本书，我都 知道 他 没 看过， 但 王五 不知道。

LIAN この本 私 DOU 知る 彼 ない 読む-EXP しかし王五 知らない

「私は彼がこの本を読んだことがないことさえ知っているが、王五は知らない。」

(45a)は、“连”が文頭に生起し、“都”が複文の主節に生起する場合、つまり“连 NP”が主題になる場合である。このとき、(45b)のように後続に主節主語(“我”)と比較関係を表すような文が加わると非文となる。これは、(45a)の文において“都”の直

前の要素である“我”には焦点がかかっていないことを示している。つまり、(43, 44a) と (45a) の間では“都”の直前要素に焦点がかかるか否かという点で焦点範囲の違いが観察されることになる。それでは、この両者の焦点範囲の差はどのように捉えるべきだろうか。この問題を解明するために、本研究は“連……都”焦点構文と並行的な意味を持つ日本語の「さえ」「も」に対する作用域の分析を援用して説明を試みる。

5.2. 日本語との対照から見た“連……都”の焦点範囲

本節では、日本語の「さえ」「も」との対照から、“都”の作用域を明らかにする。

5.2.1. 作用域について

日中両言語の対照分析に入る前に、まずは「作用域」という統語的な概念を説明しておきたい。

作用域は意味解釈に関わる概念であり、演算子¹³の作用が及びうる領域を示す(Chomsky 1965, 1970; Jackendoff 1972; May 1977, 1985)。演算子のほかに、量化副詞、助動詞、特定の動詞や形容詞も作用域をとることができる。また、阿部 (2008: 126)が提示している定義によると、作用域は、あるタイプの言語表現について、その表現の意味が及ぶ範囲を示すものである。また、作用域に関する意味解釈規則は以下のように定式化されている。

(46) 任意の α と β が作用域をとる表現とすると、 α が β を c 統御する場合、 α は β より広い作用域をとる。 (阿部 2008: 129)

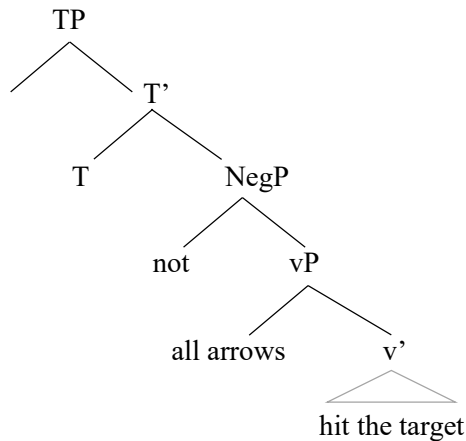
例えば、次のように否定を表す ‘not’ (「ない」) と数量詞句 ‘All arrows’ (「全ての矢」) は構造上の作用域の違いによって意味解釈が異なり、二通りの解釈が生じる。

(47) All arrows did not hit the target.

¹³ 演算子(Operator)とは、every, some のように数や量を表す表現である数量詞と、論理形式(Logical Form: FF)において論理演算子(logical operator)として振る舞う wh 疑問詞などを総称して用いる名称である (奥野・小川 2002: 111)。

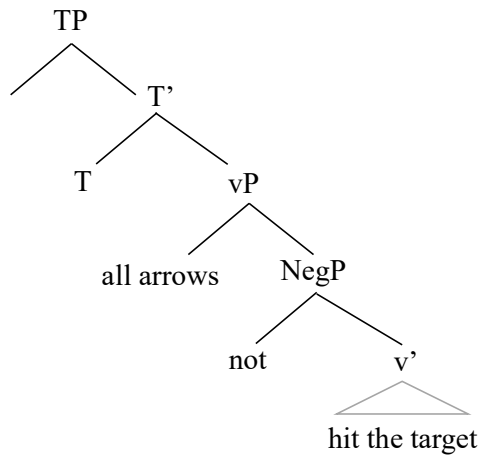
まず ‘not’ が ‘All arrows’ を c 統御する場合、‘not’ が ‘All arrows’ より広い作用域を取る。このとき (47)の解釈は、「全ての矢が的に当たったわけではない」である。この場合、「ない」は「全て」より広い作用域をとる。その統語構造は以下に示される。

(48)



次に、(47)の文では ‘All arrows’ が ‘not’ を c 統御し、‘All arrows’ が ‘not’ より広い作用域を取ることも可能である。このときの解釈は、「全ての矢が的に当たらなかった」であり、統語構造は(49)のように示される。

(49)



以上の作用域の意味解釈規則に基づき、日本語と中国語の分析を観察する。

5.2.2. 「さえ」「も」の作用域

青柳 (2006)によると、「さえ」と「も」は異なる作用域をとると指摘されている。「さえ」の焦点連結(association with focus)はVPまでしか拡張しない一方で(Kuroda 1965)、「も」の焦点連結は主語を含むvPまで拡張しうる。

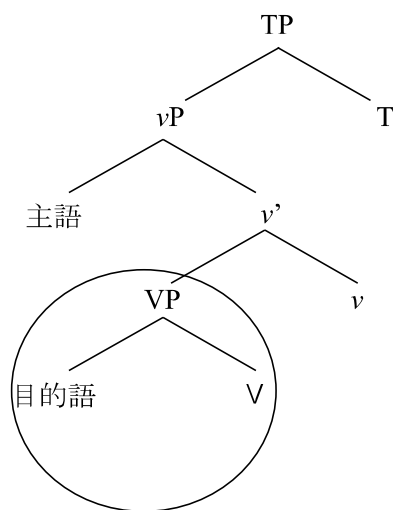
(50) 昨日のコンパで、まだ未成年の太郎は酒を飲んだばかりか…

- a. タバコを吸いさえした。
- b. タバコさえ吸った。

(青柳 2006: 122)

(50a)の「さえ」は動詞の後ろにあるため、「酒を飲む」以外に「タバコを吸う」というVP全体を焦点とすることができる。対して、(50b)では、「さえ」は「タバコ」に付いており、特定の文脈がなければ、「タバコ以外の何かを吸った」ことを含意するが、この文脈において、「タバコを吸うこと以外の何らかの行為をした」ことを含意することも可能である。そのため、「さえ」はVP全体を焦点に取ることができると説明されている(青柳 2006)。そこで、「さえ」の作用域の構造は、(51)のように示されている。

(51)



(青柳 2006 : 132)

一方で「も」に関しては、文脈がなければ直前の要素を焦点にとるが、(52)のように、特定の文脈がある場合、「も」はどの位置に置かれても文全体を焦点に取りうる。つまり、a, b, c 文のいずれもが「太郎がピアノを弾く」以外の何らかの出来事が起こった」という意味を表す。従って、「も」は「vP」全体の作用域を取り、その作用域は主語を含む文全体であるため、広い焦点を取ると説明されている。

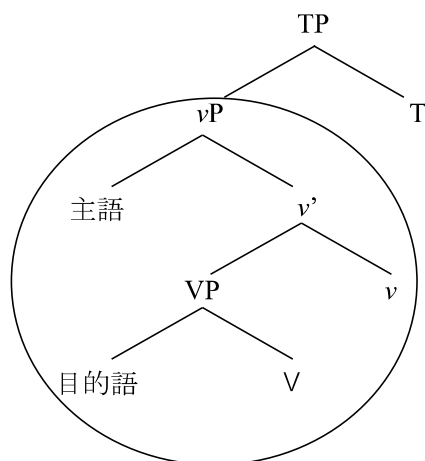
(52) 昨日のパーティーでは、花子がダンスを踊っただけではなく、

- a. 太郎が ピアノを 弾きも した。
- b. 太郎が ピアノも 弾いた。
- c. 太郎も ピアノを 弾いた。

(青柳 2006 : 123)

このときの「も」の作用域の統語構造は、(53)のように示されている。

(53)



(青柳 2006 : 132)

ここから、「さえ」と「も」は同様にとりたて詞として焦点付与の機能を果たすが、統語的にそれぞれが取る作用域が異なっている。そこで、次節では日本語の分析を参考に、中国語の“都”が焦点を取る範囲を考察する。

5.2.3. “都”の作用域

5.1 節で観察したように、“連”が主題位置に生起するかどうか、また“都”が複文の主節もしくは従属節に生起するかによって、“連……都”焦点構文が取れる焦点範囲が異なる。例えば、(54)のように、“連 NP”が主語と動詞の間に生起する場合、文の焦点は“都”の直前の“連 NP”にかかっている。対して、(55)のように、“連 NP”が主題位置に生起し、“都”が複文の主節に生起する場合、“都”の直前の“我”に焦点はかかっていない。すなわち、(54) (55)において“都”は同一の焦点機能主要部として焦点マーカーとして分析されるが、生起位置の違いによって焦点を与える要素が異なっていることが観察される。従って、本節では青柳(2006)の作用域分析を用い、この違いを説明することを試みる。

(54) 他 (連) 这本书 都 没 看过。 ((43)再掲)

彼 LIAN この本 DOU ない 読む-EXP

「彼はこの本さえ(も)読んだことない。」

(55) a. 连 这本书, 我 都 知道 他 没 看过。 ((45)再掲)

LIAN この本 私 DOU 知る 彼 ない 読む-EXP

「私は彼がこの本を読んだことがないことさえ知っている。」

b.*连 这本书, 我都 知道 他 没 看过, 但 王五 不知道。

LIAN この本 私 DOU 知る 彼 ない 読む-EXP しかし王五 知らない

「私は彼がこの本を読んだことがないことさえ知っているが、王五は知らない。」

まず、“連 NP”が主題になる場合、つまり(56)の構造を有する場合を考える。

(56) 连-DP_i Subj 都-V... [CP S V e_i] ((14b)再掲)

(57) 连 钢琴 我 都 知道 李四 不会 弹。

LIAN ピアノ 私 DOU 知る 李四 できない 弾く

「私は李四がピアノさえ弾けないことを知っている。」

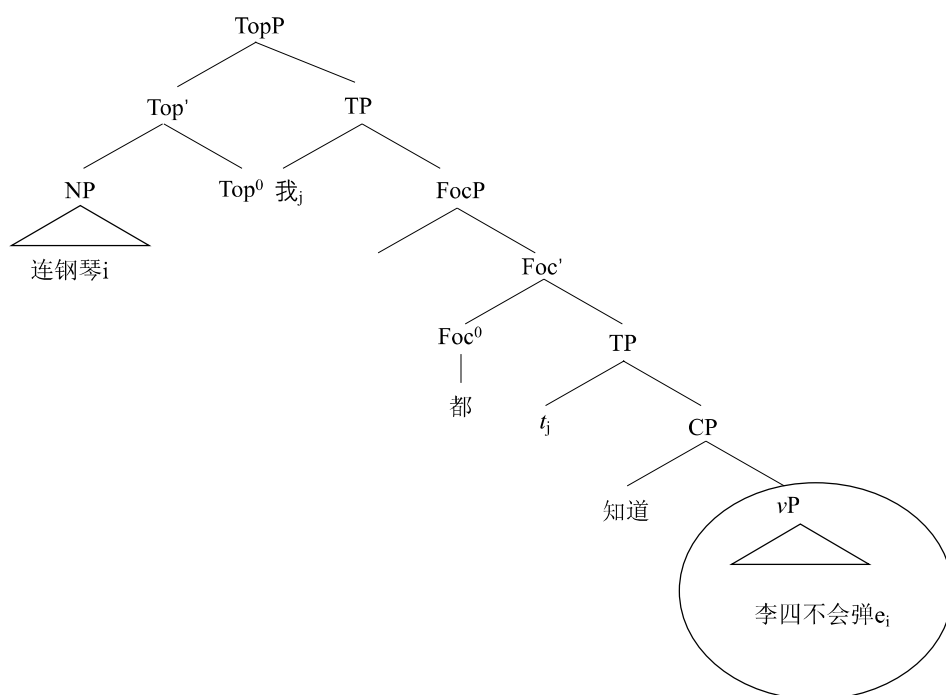
(57) の文を単独でみると、「私は李四がピアノを弾けないだけでなく、他の楽器もで

きないことを知っている」という意味を表し、“钢琴”（「ピアノ」）を焦点にとるが、文脈を加えると、より広い作用域をとることが可能になる。

(58) 连 钢琴 我 都 知道 李四 不会 弹，
 LIAN ピアノ 私 DOU 知る 李四 できない 弾く
 更别说 我还 知道 王五 不会 拉 小提琴 了。
 言うまでもなく 私 さらに 知る 王五 できない 弾く バイオリン PERF
 「私は李四がピアノを弾けないことさえ知っているので、王五がバイオリンを弾けないことももちろん知っている。」

この文では、「私は李四がピアノを弾けないこと以外に、他の人のことも知っている」という意味を表している。つまり、(58)において、“都”が取れる作用域はその直前の“我”ではないものの、“连钢琴”だけでもない。それは「も」と同じように、動詞句の主語を含む vP 全体をとっていると考えられる。従って、その構造を(59)のように示すことができる。

(59)



次に、“連 NP”が焦点になる場合、つまり(60)の構造を有する場合について検討する。

(60) 連-DP_i Subj... [CP S t'_i 都 V t_i] (14a)再掲

(61) a. 連 钢琴, 我 知道 李四 都 没 弹。

LIAN ピアノ 私 知る 李四 DOU ない 弾く

「私は李四がピアノさえ弾かなかったことを知っている。」

b. 連 钢琴, 我 知道 李四 都 没 弹,

LIAN ピアノ 私 知る 李四 DOU ない 弾く

更别说 跳 舞 了。

言うまでもない 踊る ダンス PERF

「私は李四がピアノを弾かなかったことさえ知っているのので、踊らなかったことももちろん知っている。」

c. *連 钢琴, 我 知道 李四 都 没 弹,

LIAN ピアノ 私 知る 李四 DOU ない 弾く

更别说 王五 跳 舞 了。

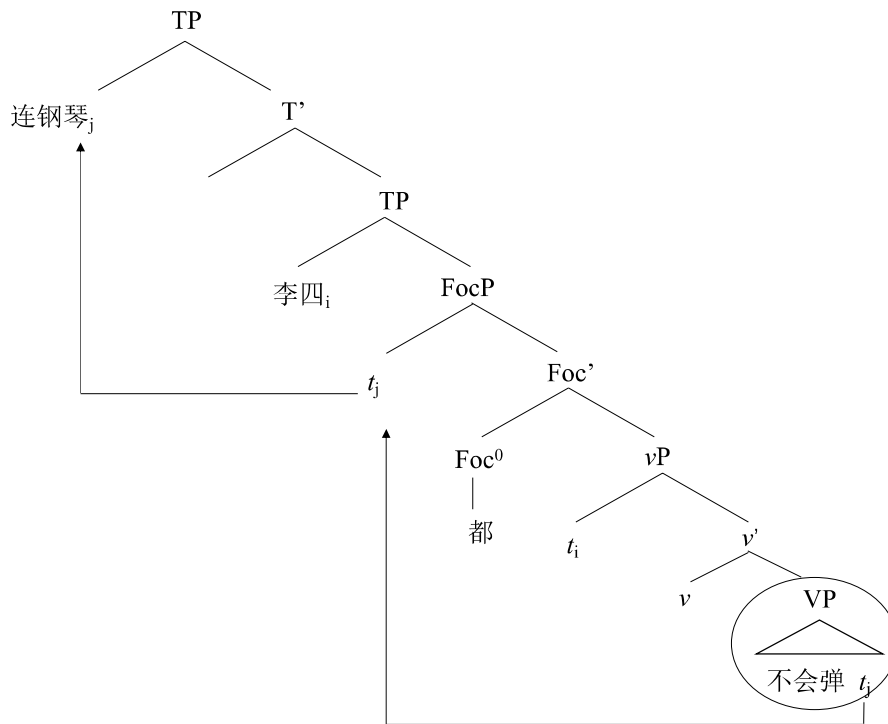
言うまでもない 王五 踊る ダンス PERF

「*私は李四がピアノを弾かなかったことさえ知っているのので、王五が踊らなかったことももちろん知っている。」

(61a)では、“钢琴”(「ピアノ」)を焦点にとり、「私は李四がピアノを弾かなかった以外に、他の楽器も弾かなかったことを知っている」という意味を表している。さらに文脈を加えると、(61b)のように「私は李四がピアノを弾かなかった以外に、他のこともしなかったことを知っている」という解釈が可能になる。しかし、(61c)が非文となることから、動詞句の主語“李四”までは焦点が取れないことが分かる。

上述の分析に基づき、(60)の構造を持つ文の場合における“都”の作用域は日本語の「さえ」と同じように VP までしかとれないと考えられる。従って、その構造を(62)のように示すことができる。

(62)



(62)の構造は、基本的には“连 NP”句が文中に生起する場合と一致する。ただし、“连 NP”句が“都”によって焦点を付与された後に、さらに文頭へと移動している。

上述の分析を通して、まず、焦点マーカールと見なされている“连”が主題位置に生起できるという矛盾を解決することができる。つまり、“连……都”焦点構文において、焦点マーカールの機能を果たしているのは“都”であり、“连”は焦点マーカールとしては機能していないため、“连”が主題位置に出現することができる。そして、“连”と“都”の生起位置によって“都”が取れる焦点範囲が異なることを示し、青柳 (2006)による作用域分析に基づき、“都”が日本語の「さえ」「も」と同じ性質を持つことを解明した。従来の先行研究では、中国語の“连……都”焦点構文において、“连”が焦点マーカールと見なされている一方で、“连 NP”句が主題位置に生起できるという事実は認識されており、その情報構造的ステータスと統語位置との矛盾が問題であった。本研究では、作用域と統語位置の相関性が、意味的に対応する日本語の「さえ」「も」と並行的であるということを論拠に“都”が焦点マーカールであることを主張した。ここから、“连 NP”句が焦点としても主題としても解釈され得ることを説明することが可能であり、上述の矛盾を解消したと言える。

6. 焦点マーカ―は主題位置に生起できない

ここまでは、“連……都” 焦点構文において“都”が焦点マーカ―であると分析してきた。語用論的な観点で言及したように、焦点と主題は対立する概念であり、焦点マーカ―であれば主題位置に生起できないはずであることから、“都”が真に焦点マーカ―であれば主題位置に生起できないことが予測される。そこで本節では、“都”が主題位置に生起するかどうかを検証する。

“連……都” 焦点構文の基本特徴として、“都”は必ず“連”の後ろに位置する。そのため、この構文において“都”が“連”を越えて文頭の主題位置に生起できないことは当然だと思われる。しかし、(63a)のように“都”は独立した焦点マーカ―として機能する場合もある。この場合は「さえ」「も」ではなく、「全て」の意味を表し、意味的な焦点となっている。その他、意味上に焦点を表せる要素としては(63b)のような“才”(強調肯定「これこそ…である」)や、(63c)で挙げる“就”(「…にほかならない」)などがある。

(63) a. 所有人 都 去。

全部の人 全て 行く

「全ての人がみな行く。」

b. 张三 才 是 我 要 找 的 人。

張三 こそ COP 私 したい 探す の 人

「張三こそ私が探している人だ。」

c. 张三 就 是 我 要 找 的 人。

張三 にほかならない COP 私 したい 探す の 人

「私が探している人は張三にほかならない。」

これらの焦点マーカ―は、構造上の主題位置に生起すると非文になる。

(64) a. * [TOP 所有人_i 都] [TP e_i 去]。

全部の人 全て 行く

直訳：「*全ての人みなは、行く。」

b. * [TOP 张三_i 才 是] [TP 我 要 找 的 人_i].

張三こそ COP 私 したい 探す の 人

直訳：「*張三こそは、私が探している人だ。」

c. * [TOP 张三_i 就 _____ 是] [TP 我 要 找 的 人_i].

張三にはかならない COP 私 したい 探す の 人

直訳：「張三のことは、私が探している人だ。」

(64)の文は、(63)から語順の変化が生じていないが、統語上 TP の外側に位置するため、“所有人都”（「全ての人みな」）、“张三才是”（「張三こそ」）、“张三就是”（「張三にはかならない」）の後ろに主題を提示するポーズを入れると非文になる。もちろん、「停顿詞」を入れることもできない。また、“连……都”構文における“都”にも同じような制限が観察される。

以上の観察をまとめると、“都”を含む焦点マーカ―は主題位置に生起できないため、“连”は焦点マーカ―ではないという分析に対してさらなる証拠を加えた。また、この観察から、日本語と同じような生起制限が見られると言える。

7. “连”主題の語用論的機能

第2章の3節では各言語における主題構文の分析をまとめたが、その中で、対照主題という主題構文についても言及した。語用論の観点から見ると、主題は「既知・旧情報」を表すが、必ずしも前文脈で出現した情報ではなく、話し手と聞き手両方が持っている背景知識でも「既知・旧情報」と捉えられる。この点においては主題と焦点の境界が曖昧であり、この曖昧性を捉えるために「対照主題」という概念が提案されている(Kuno 1976; Büring 2003 など)。中国語に対しても、「対照主題」に関する分析が見られる。例えば、Shyu (2014)によって、(65A)における“儿子”（「息子」）は対照主題として指摘されている。

(65) Q: 你 有 孩子 吗?

あなた いる 子供 Q

「あなたは子供がいますか？」

A: 儿子 我 有, (可是 女儿 没有)
 息子 私 いる しかし 娘 いない
 「息子は(私は) いますが、(娘はいません。)」

(Shyu 2014: 116)

(65A)における“儿子”には顕在的な情報が提示されていないが、(65Q)で提示されている“孩子”(「子供」)に関連する情報として、「既知・旧情報」に見なすことが可能である。しかし、この場合他の何らかの情報と対比しなければならない。つまり、(65A)では、表面的には“儿子我有”だけで回答しているとしても、話者が“女儿没有”(「娘はいません」)という対比する情報を伝達しようとすることを含意している。また、Shyu (2014)ではこのような対照主題に関して、通常の主語や関連性主題と区別する特徴を以下のように指摘している：

- (66) a. 不定的な要素が容認される
- b. 常に他の対照要素が並列されている (潜在的あるいは顕在的)
- c. 必ずしも排他的なわけではない
- d. より高い位置にある要約主題に先行される

(Shyu 2014: 115)

従って、本章の最後の議論として、“连……都”焦点構文において文頭の主題位置に基底生成される“连 NP”は、対照主題に属すと考えられる。

(67) 连 一 本 书, 我 都 知 道 他 没 看。
 LIAN 一 冊 本 私 DOU 知 る 彼 不 是 读 的
 直訳：「一冊の本さえ、私は彼が読んでいないことを知っている。」
 = 「私は彼が一冊の本さえ読んでないことを知っている。」

(68) *一 本 书, 我 看 了。
 一 冊 本 私 读 的-PERF
 「*一冊の本は、私は読んだ。」

Cf. (这本) 书, 我 看了。

この本 私 読む-PERF

「(この) 本は、私は読んだ。」

“一本書”（「一冊の本」）は不定名詞であり、(67)のように“連 NP”主題にはなりうるが、(68b)のように通常の主題にはならない。そして、(67)の文は「一冊の本でも読んでいないのに、他のことももちろんしていない」という対比的な意味を含意している。また、(67)を含む全ての“連……都”構文は、使用状況としては一般的に単独で使われるのではなく、常にある話題に関して何らかの情報を強調するため、(69)のように前文脈に“他今天什么都没做”（「彼は今日何もしなかった」）といった要約主題が存在する。

(69) 他 今天 什么也 没 做, 连 一本書 我 都 知道 他 没 看,
彼 今日 何も ない する LIAN 一冊の本 私 DOU 知る 彼 ない 読む
别说 写 读后感 了
言うまでもない 書く 感想文 PERF

「彼は今日何もしなかった。私は彼が一冊の本さえ読んでないことを知っているから、感想文を書いたわけがない。」

上記の分析に従い、主題位置に基底生成された“連”は対照的主題と見なすことができる。従って、第2章の表1を補足すると、以下の表2になる。

表2 英語、日本語、中国語における主題研究の整理（補足）

	言語類型	主題要素	主題タイプ	生起位置	派生方法
英語	主語卓越型	NP, PP	通常主題	TopP, Spec	基底生成 (<i>wh</i> 移動)
			対照主題		
日本語	主語・主題卓越型	NP, PP	通常主題	TopP, Spec	基底生成
			関連性主題		
			対照主題	TP, Spec	移動
中国語	主題卓越型	NP, PP, V(P), A(P)	通常主題： 空所あり	TopP, Spec	移動
			通常主題： 空所なし		基底生成
			関連性主題		
			対照主題	TopP, Spec	基底生成

8. 第3章のまとめ

本章では、中国語の“连……都”焦点構文を取り上げ、以下の点について議論した。

- (70) a. “连……都”焦点構文における二つの異なる立場の分析をそれぞれ概観し、本研究では「“连”は焦点マーカ―ではない」という主張を提示した。
- b. Rizzi (1997)の主題と焦点の区別に関する一般化に基づき、“连 NP”句が文頭に基底生成する場合は主題になるという Shyu (2014)の分析が支持されることを示した。
- c. “都”が焦点マーカ―として機能することを主張し、日本語の「さえ」「も」の作用域の分析に従い、“都”の作用域を明らかにした。
- d. “连 NP”句の派生方法の違いによって、“都”の作用域の広さが変化することを論じた。そのため、“都”は日本語の「さえ」と「も」の両方の性質に対応していることを指摘した。

- e. “都”を含む焦点マーカ―は主題位置に生起できないことを提示し、“连”は焦点マーカ―ではないという分析に対してさらなる証拠を加えた。
- f. “连”が主題位置に生起する際に、対照主題という語用論的な機能を持つことを提示した。

以上の議論を通して、中国語の“连……都”焦点構文では、“连 NP”句が主題位置に生起することが観察され、これは焦点マーカ―が主題位置に出現できるように見える。しかし実際には、“连……都”焦点構文における“连”は焦点機能を持たない要素であるために、主題になりうるのと考えられる。そして、“连……都”焦点構文における真の焦点マーカ―である“都”は主題位置に出現できないことを考慮に入れると、中国語においても主題位置に現れる要素の性質は日本語と同じように制限されていると言える。また、“连 NP”句が主題位置に生起する場合は対照主題として捉えられる。このとき“连 NP”句は基底生成によって派生されているため、対照主題が移動によって派生される日本語とは異なることもわかる。

第4章 動詞（句）主題化構文

1. はじめに

本章では、日本語との対照から、中国語において主題位置に現れる述語の範疇上の制限について考察する。前章でも述べたように、言語類型学の観点から見ると、日本語と中国語は同様に「主題卓越型」に属するが、主題構文に関しては形態上および統語上それぞれに共通点と相違点が存在する。本章では、動詞や動詞句が主題位置に生起する際に、日中両言語では形態的には差異が存在するものの、統語的には共通した特徴が示されることを提案する。

まず、以下では動詞の話題化について具体的なデータをみていくことにする。中国語では、(1)のように動詞の“吃”（「食べる」）がそのまま直接文頭に生起することができる(Cheng 2008; Cheng and Vicente 2013)。

- (1) [TOP 吃], 我 是 [FOC 吃过] 了, 不过,...
食べる 私 COP 食べ- EXP-PERF しかし
「私は食べることは食べたが...」

一方で日本語の場合、中国語と異なり、(2a)のように動詞（「食べる」）が直接主題マーカーの「は」の直前に生起すると非文となる。動詞が主題位置に現れる際には、(2b)のように必ず「こと」や「の」によって名詞化される必要がある。

- (2) a. *食べるは食べたが、…
b. 食べる {こと/の} は食べたが、(お腹がいっぱいになっていない)。

また、中国語と日本語における共通点として、動詞が文頭の子題位置に現れる際に

は、後続のコメント文の中に必ず同じ動詞が重複して現れることが観察されている。すなわち、(3)で示すように、(1)、(2b)の文において後続の文中に生起する動詞を削除すると非文になる。

(3) a. *吃， 我 是 __ 过了， 不过……

食べる 私 COP EXP-PERF しかし

b. *食べることは、__が…

こうした事実観察を出発点として、本章では、日中両言語における上述の相違点と共通点の観察をめぐって議論を行う。本章の構成としては、まず2節では、中国語において、動詞や動詞句が主題位置に生起し、後続文内に同一動詞が現れる構文に対する研究を整理し、問題設定を明示化する。3節では、先行研究の分析を踏まえて、中国語の主題位置に生起する動詞の性質を明らかにする。4節では、分散形態論の理論を導入し、この理論に基づいて動詞(句)主題構文の派生メカニズムを考察する。5節では第4章の議論をまとめる。

2. 先行研究と問題設定

日中両言語において、先述した(1)、(2)のような構文は、主題構文という構文範疇ではなく、動詞重複構文(verb doubling/copying)という構文範疇の下で注目されている。従って、本章で扱う動詞(句)主題構文は、先行研究における「動詞重複構文」に相当するものである。また、動詞重複構文に対する研究は、主に生成文法の枠組みで動詞がどのようなメカニズムで重複するのかについて議論が行われている。そこで、本節では中国語におけるいわゆる動詞重複構文と主題との関連について統語的性質と派生方法に着目した先行研究を整理する。

本節で取り上げる先行研究では、それぞれ二種類の動詞重複構文を扱っている。一つは、(4a)のように動詞(句)“看书”(「本を読む」)が文中に現れ、文末に副詞句“五个小时”(「5時間」)が来るタイプ(Tsao 1987)であり、もう一つは、(4b)のように動詞“吃”(「食べる」)が文頭に現れ、後続の文中にコピュラ動詞“是”を伴う分裂文タイプ(Cheng and Vicente 2013)である。この2種類の動詞重複構文に関する具体的な議論を

2.1 節と 2.2 節で行う。

(4) a. [TOP 他] [TOP 看 书] 看 了 五个小时。

彼 読む 本 読む PERF 五時間

「彼は本を五時間読んでいた。」

b. [TOP 吃], 我 是 [FOC 吃过] 了, 不过,...

食べる 私 COP 食べ- EXP-PERF しかし

「私は食べることは食べたが…」

2.1. Tsao (1987)の分析

まず、Tsao (1987)は、文末に副詞句が現れる動詞重複構文に対して、統語上の生起位置および動詞の性質を議論している。それぞれの議論を以下で提示する。

2.1.2. 動詞の生起位置

まずは動詞（句）の統語位置についての分析を確認する。Tsao が扱っている動詞重複構文は、動詞が文頭に生起するのではなく、文の二番目の位置に現れる構文である。例えば、(5)のように、前の動詞“看”（「読む」）は目的語“书”（「本」）を伴って、「主主題」の“他”（「彼」）の後ろに出現し、“看书”（「本を読む」）という動詞句全体が一つのまとまりとなって「副主題」として捉えられている (Tsao 1987, 1990; 徐・刘 1998)。さらに、後続のコメント文中には動詞の“看”が重複して出現している（以下、前の動詞を V₁、後ろの動詞を V₂と呼ぶことにする）。

(5) [TOP 他] [TOP 看 书] 看 了 五个小时。 ((4a)再掲)

彼 読む 本 読む PERF 五時間

「彼は本を五時間読んでいた。」

(Tsao 1987: 17)

従来の主題研究(Chomsky 1965, 1977; Li and Thompson 1976 など)においては、主題要

素は統語的に文の先頭に位置する必要があると一般に考えられていた。しかしながら、(6)に示すように、日本語や中国語のような「主題卓越型」言語だけではなく、「主語卓越型」言語に属するイタリア語においても、一文の中に複数の主題が出現し得るといふ通言語的な現象が観察されている(Rizzi 1997; Paul and Whitman 2017; Benincà and Poletto 2004)。

(6) a. 中国, 大城市, 上海, 交通 比较 乱。

中国 大都会 上海 交通 とても 乱れる

b. 中国は、大都会は、上海は、交通が乱れている。

(Paul and Whitman 2017: 12)

c. Mario, nel 1999, gli hanno dato il premio Nobel.

Mario in.the 1999 to.him have given the prize Nobel

'Mario, in 1999, they gave him the Nobel prize.'

(Italian, Benincà and Poletto 2004: 67)

Tsao (1987, 1990)では、主題が複数現れることが可能であることから、全ての主題が文頭に位置する必要はなく、「同一主題連鎖の先頭」に位置すれば容認されると指摘している。つまり、主題は先行詞として生起し、それと同一指示を持つ全ての要素と一つの主題連鎖を構成したうえで、常に主題連鎖の先頭に位置すると言える。

具体的には、(7)では文頭の“他”（「彼」）は主主題であり、その次の“写字”（「字を書くこと」）は副主題である。二つの主題はそれぞれ同一指示を持つ空範疇を束縛しているため、「他_i…e_i」、「写字_j…e_j」は二つの独立した主題連鎖となり、「他_i」と「写字_j」は各連鎖の先頭に位置する(Tsao 1987)。

(7) 他_i 写 字_j 写 得 很 快, 但是

彼 書く 字 書く DE とても 速い しかし

____i 写 得 不 整齐, ____i 我 不 想 用。

書く DE ない きれい 私 ない たい 採用

直訳:「彼は_i、字を書くこと_jがとても速い。しかし_{e_j}書くことがきれいではない。

_{e_i}私は採用したくない。」

= 「彼は字を書くことが速いが、(字を書くことが) 綺麗ではないので、彼を採用したくない。」

(Tsao 1987: 22)

以上のことから、(5)のような動詞重複構文では、“他”(「彼」)と“看书”(「本を読むこと」)のそれぞれが異なる主題連鎖の先頭に生起し、“看书”は表面的には文頭に現れていないものの、副主題として主題位置に生起していると Tsao (1987)によって論じられている。つまり、文頭だけではなく、文中にも主題が生起することが可能だと示している。

2.1.2. 動詞の性質

そして、Tsao (1987)では、V₁の性質についても議論を行っている。具体的には、V₁とV₂は同じ動詞の性質を持つように見えるが、後続のコメント文にあるV₂は確かに動詞である一方で、副主題の位置に生起しているV₁は動詞性が失われた要素(いわゆる脱動詞化: deverbialization)であり、動詞としての性質が異なるという分析がなされている。

Tsao (1987)では、V₁が動詞性を失っている証拠として以下の三つの特徴を提示している。まず、一つ目の証拠として、(8)、(9)に示すようにV₁はアスペクトマーカー“了”(Perfect)、“过”(Experience)と共起できないという事実が挙げられる。

(8) a. 他 [看 书] 看了 五个小时。

彼 読む 本 読む-PERF 五時間

「彼は本を五時間読んでいた。」

b. *他 [看了 书] 看了 五个小时。

彼 読む-PERF 本 読む-PERF 五時間

c. *他 [看了 书] 看 五个小时。

彼 読む-PERF 本 読む 五時間

(9) a. 他 [照 相] 照过 两次。

彼 撮る 写真 撮る-EXP 二回

「彼は写真を二回撮ったことがある。」

b. *他 [照过 相] 照过 两次。

彼 撮る-EXP 写真 撮る-EXP 二回

c. *他 [照过 相] 照 两次。

彼 撮る-EXP 写真 撮る 二回

(Tsao 1987: 17)

(8a)、(9a)ではV₁とアスペクトマーカが共起しておらず、文法的な文となっている。それに対して、(8b, c)、(9b, c)のように、V₁に“了”“过”を伴った場合には非文となる。また、(8c)、(9c)から分かるように、V₂とアスペクトマーカ共起は、上記の文の容認性には影響を与えていない。

次に、二つ目の証拠として、(10)、(11)に挙げるようにV₁は否定辞を伴わないという事実が見られる。

(10) a. 他 上个月 [打 球] 打了 三次。

彼 先月 打つ ボール 打つ-PERF 三回

「彼は先月にボールを打つことを三回した。」

b. 他 上个月 [打 球] 没 打 三次。

彼 先月 打つ ボール ない 打つ 三回

「彼は先月ボールを打つことを三回しなかった。」

c. *他 上个月 [没 打 球] 打 三次。

彼 先月 ない 打つ ボール 打つ 三回

(11) a. 妈妈 [挂 衣服] 挂 在 衣架 上。

お母さん かける 洋服 かける に ハンガー 上

「お母さんは洋服をハンガーにかける。」

b. 妈妈 [挂 衣服] 不 挂 在 衣架 上。
 お母さん かける 洋服 ない かける に ハンガー 上
 「お母さんは洋服をハンガーにかけない。」

c. *妈妈 [不 挂 衣服] 挂 在 衣架 上。
 お母さん ない かける 洋服 かける に ハンガー 上

(Tsao 1987: 19)

中国語では、“没”“不”を用いて否定を表す。(10b, c)、(11b, c)が示すように、V₂に否定辞が伴っている場合には容認されるが、V₁が否定辞と共起した場合には非文となる。

最後に、(12)、(13)に示すように単音節の副詞は V₁ の前に生起できないという事実がある。

(12) a. 他 [念 书] 只 念了 三年。
 彼 勉強する 本 だけ 勉強する-PERF 三年
 「彼は三年しか勉強しなかった。」

b. *他 [只 念 书] 念了 三年。
 彼 だけ 勉強する 本 勉強する-PERF 三年

(13) a. 他 [唱 歌] 还 唱 得 不错。
 彼 歌う 歌 程よい 歌う DE 悪くない
 「彼が歌を歌うのは悪くない。」

b. *他 [还 唱 歌] 唱 得 不错。
 彼 程よい 歌う 歌 歌う DE 悪くない

(Tsao 1987: 20)

(12b)、(13b)では、“只”、“还”のような単音節の副詞は V₁ と共起できないことを示している。以上に挙げた三つの統語的な性質を通して、Tsao(1987)は V₁ が動詞性を失った要素であるという分析が裏付けられるとしている。

ここまでは Tsao (1987)によって指摘された(5)のような動詞重複構文における V₁ の

生起位置と性質を簡単にまとめた。上記の議論からは、Tsao (1987)で扱われている構文に関して、動詞句が主題を担う場合にはその動詞はすでに動詞性が失われており、動詞句全体が名詞性を持つと言える。次節では、動詞が文頭の主題位置に現れる構文についての分析を整理する。

2.2. Cheng and Vicente (2013)の分析

本節では、Cheng and Vicente (2013)における動詞重複構文の派生メカニズムについて説明する。動詞が文頭の主題位置に生起する場合、Cheng (2008)、Cheng and Vicente (2013)では動詞重複の現象に注目した形で議論が行われている。

- (14) [TOP 吃], 我 是 [FOC 吃过] 了, 不过,... ((6b)再掲)
 食べる 私 COP 食べ- EXP-PERF しかし
 「私は食べることは食べたが…」

(14)の構文に対して、Cheng (2008)ではV₁の“吃”(「食べる」)を主題に、V₂の“吃”をVerum focus (Höhle 1992)¹⁴と見なしている。また、Cheng and Vicente (2013)では、動詞重複のメカニズムとして、動詞そのものが文頭のTopPの指定部に移動して生成されたものであると論じている。以下では、その根拠として挙げられている二つの現象について説明を行う。

まず、一つ目の証拠として、動詞重複が島の制約に従わなければならないことが挙げられている。(15)のように、付加詞の中にある動詞は重複できない。

- (15) *吃, [他是 已经 吃了 _____ 以后], 我才 回到 家
 食べる 彼 COP もう 食べ-PERF 以後 私 そのときに 帰る 家
 「食べることは、彼がすでに食べた後で、私は家に帰った。」

(Cheng and Vicente 2013 : 8)

¹⁴ Verum focus (あるいは極性焦点: polarity focus) とは、Höhle (1992)によって提出された概念であり、命題内容の真価を強調する機能を果たし、通常の焦点から独立したカテゴリーである。

(15)は島の条件の中での「付加詞節制約」が適用され、付加詞節の中から要素を取り出して移動することができない。仮に“吃”（「食べる」）は基底生成のであれば、島の条件に関わらず、(15)は容認可能なはずである。しかし、(15)は島の制約に影響され、非文になるため、移動が生じていると Cheng and Vicente (2013)によって論じられている。

二つ目の根拠は、動詞同一制約 (Lexical identity effects) である。Cheng and Vicente (2013)による動詞重複のメカニズムでは、動詞そのものが移動し、元位置に残されたコピーが発音されるため、文頭の V₁ と後ろの V₂ は同一でなければならない。従って、(16)のように、文頭の動詞と後続文内の動詞は同一でなければ非文になる。

(16) a. *旅行, 我 是 [坐过] 飞机

旅行する 私 COP 乗る-EXP 飛行機

「旅行することに関して、私は飛行機に乗ったことがある。」

b. *煮菜, 我 是 [烤过] 鸡

料理を作る 私 COP 焼く-EXP チキン

「料理を作ることにに関して、私はチキンを焼いたことがある。」

(Cheng and Vicente 2013 : 9)

(16a)の文頭の“旅行”（「旅行する」）と(16b)の文頭の“煮菜”（「料理を作る」）はそれぞれ後ろの動詞“坐”（「乗る」）、“烤”（「焼く」）とは異なっているため、非文となる。こうした理由で、Cheng and Vicente (2013)では(14)の文の派生メカニズムを以下のように分析する。

(17) a. [TOP 吃], 我 是 [FOC 吃过] 了, 不过,... ((14)再掲)

食べる 私 COP 食べ- EXP-PERF しかし

「私は食べることは食べたが…」

b. [TOP 吃_i] 我 pro_{PRED} 是 [SC [FOC 吃_i 过] [t_{PRED}]] 了

(Cheng and Vicente 2013: 10)

(17)では、“吃”がコピーを残してから小節(SC: Small Clause)の中から主題位置(TopPの指定部)に移動することを示している。しかし、元位置に残されたコピーは文頭の“吃”によってc統御されているが、削除操作を受けていない。この点に関して、Cheng and Vicente (2013)では、元位置に残されたコピーは形態部門で隣接した空の焦点主要部(focus head)と形態的融合(fusion)を行うため、融合したコピーは削除操作の適用を受けないと指摘している。従って、(14)のような動詞が重複して生起する構文が生成されるとしている。

Cheng and Vicente (2013)の分析によると、動詞が主題位置に生起する場合は、動詞が元位置にコピーを残し、かつ動詞そのものが移動している。さらに、後続文内の同一形態の動詞が顕在的に発音されることが可能なのは、そのコピーが空の焦点主要部と形態的な融合を行っているためである。しかし、この分析はTsao (1987)による脱動詞化の分析と矛盾する。次節では具体的な問題点を指摘する。

2.3. 問題提起

先述したように、Tsao(1987)で扱われている構文形式は(18a)のような動詞(句)“看书”(「本を読む」)が文中に現れ、文末に副詞句“五个小时”(「5時間」)が来るタイプ(注:副主題といってもよいのかもしれませんが)であり、このタイプの構文での主題位置の動詞(句)に対して、Tsaoは動詞性が失われていると分析している。一方で、Cheng (2008)、Cheng and Vicente 2013が取り上げている(18b)のような構文形式は動詞“吃”(「食べる」)が文頭に現れ、後続の文脈中にコピュラ動詞“是”を伴う分裂文タイプであり、Tsaoが扱っているタイプとは異なる。しかし、後者の構文形式に関してもCheng (2008)によって、文頭動詞が主題として捉えられると指摘されている。すなわち、(18b)の場合にもV1の動詞性が失われているのか、それとも動詞の性質を保ったまま主題を担っているのかという疑問が生じてくる。

(18) a. [TOP 他] [TOP 看 书] 看 了 五个小时。 ((4)再掲)

彼 読む 本 読む PERF 五時間

「彼は本を五時間読んでいた。」

b. [TOP 吃], 我 是 [FOC 吃过] 了, 不过,...
 食べる 私 COP 食べ- EXP-PERF しかし
 「私は食べることは食べたが…」

また、仮に Cheng and Vicente (2013)の分析に従い、動詞そのものが移動すると考えるならば、(19)のような動詞が目的語を伴って主題位置に出現する場合は説明できない。

(19) a. [TOP 吃 饭], 我 是 [FOC 吃过] 了, 不过,...
 食べる ご飯 私 COP 食べ- EXP-PERF しかし
 「ご飯を食べることは私が食べたが…」

b. * [TOP 吃 饭], 我 是 [FOC 吃过 饭] 了, 不过……
 食べる ご飯 私 COP 食べる-EXP ご飯 PERF しかし
 直訳：「*ご飯を食べることに関して、私はご飯を食べたが…」

(19a)では、文頭の主題位置に現れるのは単独の動詞“吃”ではなく、動詞句の“吃饭”(「ご飯を食べる」)が生起している。もし主題位置の動詞が移動生成なのであれば、目的語の“饭”はどこから挿入されたのかが問題となる。仮に動詞句全体が移動すると考えた場合、(19b)のように V₂にも目的語が伴うはずだが、実際には、(19b)は非文になる。したがって、動詞移動分析には問題があると考えられる。

上述の二つの疑問点に対する考察は、3節で具体的な分析を行う。

2.4 本章の問題設定

ここまでは中国語の動詞重複構文に関する先行研究をまとめ、問題点を指摘した。ここから、上述の分析を踏まえ、動詞(句)主題化構文(いわゆる動詞(句)重複構文)における問題を以下のように設定する。

- (20) a. Tsao (1987)では、動詞が副主題の位置で主題化される場合、動詞性が失われると分析されている。この分析が妥当であるならば、Cheng (2008)、Cheng and Vicente (2013)が取り上げているような動詞が文頭の主題位置に生起する場合も同様に動詞の性質が変わると考えられるか？ (3.1 節)
- b. 仮に文頭の動詞も脱動詞化が生じているのであれば、Cheng and Vicente (2013)の動詞移動分析は、動詞そのものが移動する分析であるため、V₁とV₂の性質上のずれが説明できず、分析が適用されない。この場合、動詞は一体どのようなメカニズムで主題化されているのか？ (3.2 節および3.3 節)
- c. 動詞（句）が主題を担う際に、どのような統語的、および意味的な制限があるのか？ (3.4 節および3.5 節)

次節からは、中国語具体的な分析に入る。

3. 文頭に生起する V₁ の性質

本節では文頭の主題位置に中国語の動詞もしくは動詞句が生起する場合には、Tsao (1987)が提案したように動詞性を失っているかどうかを統語的な性質から検証していく。2.1.2 節でまとめたように、Tsao (1987)では、動詞が副主題の位置に生起する場合は脱動詞化によって動詞性が失われると分析している。それでは、動詞が文頭の主題位置に現れる際にも同様の分析が適用できるのか、検証が必要となる。以下では、Tsao が V₁ に脱動詞化が生じている証拠として挙げている三つの現象（アスペクトマーカ―“了”、“过”との共起、否定辞との共起、単音節副詞との共起）を用いて、当該構文における V₁ の特徴を示す。

まず、文頭に動詞が生起する動詞主題化構文における V₁ に関しても、アスペクトマーカ―“了”、“过”とは共起しない。

- (21) a. 吃, 我 是 吃过了, 不过…
 食べる 私 COP 食べる-EXP-PERF しかし
 「食べることにに関して、私は食べたが…」

- b. *[吃过], 我 是 吃过了, 不过…
 食べる-EXP 私 COP 食べる-EXP-PERF しかし
- c. *[吃过], 我 是 吃, 不过…
 食べる-EXP 私 COP 食べる しかし

(21a)は動詞主題化構文の基本形式であるが、(21b, c)のように、V₂とアスペクトマーカ어의 “过” が共起するかにかかわらず、V₁と “过” が共起すると非文になる。

次に、V₁は否定辞を伴わないことを示す。(22a)に挙げるように、V₂には否定辞が共起するが、(22b, c)のように、V₁が否定辞を伴うと非文になる。

- (22) a. 吃, 我 是 没 吃。
 食べる 私 COP ない 食べる
 「食べることに関して、私は食べていない。」
- b. *没 吃, 我 是 没 吃。
 ない 食べる 私 COP ない 食べる
- c. *没 吃, 我 是 吃。
 ない 食べる 私 COP 食べる

最後に、単音節の副詞と V₁ との共起について確認する。

- (23) a. 吃, 我 是 只 吃 饭。
 食べる 私 COP だけ 食べる ご飯
 「食べることに関しては、私はご飯だけ食べるが…」
- b. *只 吃, 我 是 吃 饭。
 だけ 食べる 私 COP 食べる ご飯
- c. *只 吃, 我 是 只 吃 饭。
 だけ 食べる 私 COP だけ 食べる ご飯

(23a)では、V₂は単音節の副詞 “只” (「だけ」) と共起できるが、(23b, c)のように V₁

とは共起できない。

以上の(21)~(23)で示したように、動詞が文頭の主題位置に生起する動詞主題化構文においても、Tsao (1987)が取り上げた動詞が副主題の位置に生起する場合と同様、V₁は動詞性が失われた要素だと考えられる。すなわち、このような構文において、V₁は名詞化された要素だと言える¹⁵。

ここから、Cheng and Vicente (2013)が提案した動詞移動分析は適用できないと考えられる。したがって、動詞主題化構文に対しては新たな派生メカニズムを提起する必要がある。次節では具体的な分析方法を提示する。

4. 移動分析：√root 移動

まず、2.2 節で示した Cheng and Vicente(2013)の分析から、(24)や(25)で示すように、二つの「動詞」の間には島の制約および同一性制約が見られるため、移動が生じていることは否定できず、基底生成の可能性は排除される。

(24) 島の制約

*吃, [他是 已经 吃了 以后], 我才 回到家
食べる 彼 COP もう 食べ-PERF 以後 私 そのときに 帰る 家
「食べることは、彼がすでに食べた後で、私は家に帰った。」 ((15)再掲)

(25) 同一性制約

*旅行, 我是 [坐过] 飞机 ((16a)再掲)
旅行する 私 COP 乗る-EXP 飛行機
「旅行することに関して、私は飛行機に乗ったことがある。」

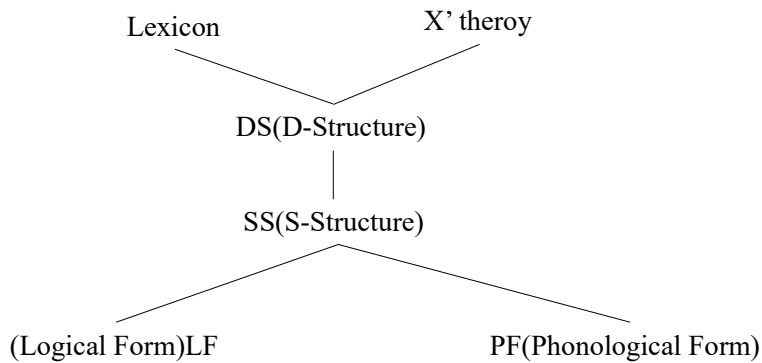
以上の理由から、動詞句主題構文の派生には移動が関わると考えられるが、前節の分析からは、動詞主題化構文において V₁は動詞そのものが移動しているとは言えない。この問題を解決するために、本稿では分散形態論の観点から新たな動詞主題化メカニズムを提案する。

¹⁵ 本論文では、通常の名詞主題構文と区別するために、「動詞」「動詞句」という用語をそのまま用いるが、実際に V₁は名詞化されている要素であると考えられる。

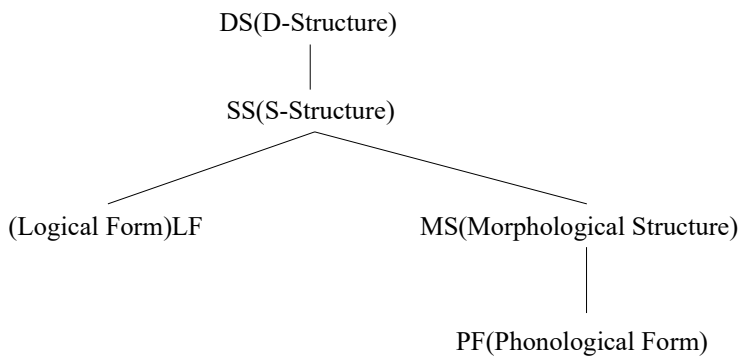
4.1. 分散形態論に対する説明

本節では、考察を行う前に、理論的装置としての分散形態論の仕組みを提示する。分散形態論 (Distributed Morphology、以下 DM 理論) は、Halle and Marantz (1993)によって提案された統語部門で語形成を説明する言語理論である。伝統的な生成文法理論における文の生成メカニズムは、心的辞書 (Lexicon) の中から単語を取り出した後に、統語構造に導入し、統語操作を受けるというものであった。対して、DM 理論では、単語は直接レキシコンの中からは取り出したのではなく、MP 理論の計算規則に基づき、統語部門での計算によって生成されるという仮説を提示している (Harley 2008:6)。以下に、DM 理論の文法モデルを(28b)に示す。

(26) a. GB 理論の文法モデル



b. DM 理論の文法モデル



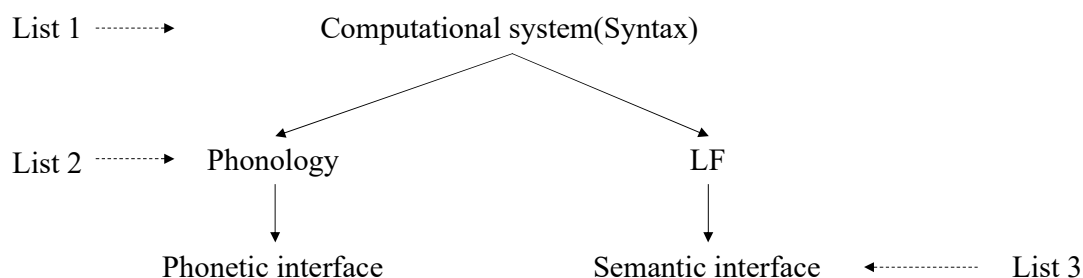
(Halle and Marantz 1993: 114)

(26a)の GB 理論の文法モデルとの比較から分かるように、DM 理論の文法モデルが

GB 理論から最も著しい変化は、レキシコンというレベルが消え、代わりに、統語部門と音声形式(Phonological Form : PF)の間に形態部門(Morphological Structure: MS)が現れている点である。MS は語彙の統語的な表現でありつつ、PF の一部でもある。そのため、MS は統語部門と音声形式のインタフェースとして、語彙項目(Vocabulary item)が挿入されるレベルである。

また、DM 理論の具体的な特徴として、DM 理論の文法モデルには、(27)に示すような統語的終端項目(List 1: Syntactic Terminals)、語彙項目(List 2)、百科事典(List 3: Encyclopedia)という三つの項目を持っている。

(27) DM 理論文法モデルにおける独特の項目(Marantz1997: 204)



(27)で示した三つの項目はそれぞれ異なる段階で計算が行われる。まず、終端項目は統語計算の最初として、形態素レベルの語根 ($\sqrt{\text{root}}$) と一連の形式素性(Formal feature)を含んでいる。 $\sqrt{\text{root}}$ は、一部の意味素性と音韻素性を持つが、統語的な性質を持たない。形式素性は語の語彙範疇、性別、人称、数などを決める¹⁶。

そして、二つ目の語彙項目は、形式素性の具体的な音と挿入規則によって構成されており、発音形式を決定する部門である。このような統語計算が行われた後に音を決める操作は Late insertion と呼ばれている。しかし、言語によって、形態上の豊富さが異なるため、全ての形式素性が必ず発音されるわけではない。例えば、日本語の「彼がピザを食べる」と英語の 'He eats pizza' を比べてみると、日本語の動詞「食べる」には形態上および音声上に 3 人称が現れていないといった違いが見られる。

最後に三つ目の百科事典は、意味的インタフェースに位置し、人間の生得的な言語

¹⁶ 例えば、[n]は名詞素性で、[+1p(erson)]は 1 人称である。

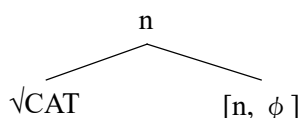
知識として、語彙の意味解釈を提供する。この部門に入るまでは全て意味を持たない記号的な計算が行われているが、百科事典に入ることによって語彙に意味が付与される。そのため、百科事典部分は非生産的である。

以上の三つの項目は、伝統的な生成文法におけるレキシコン部門の代わりに、それぞれ異なる段階で働き、語彙の生成と音の挿入が異なるレベルで行なわれることになる。この点が、DM 理論が「分散形態論」と呼ばれる最も重要な理由である。

ここまでの議論を簡単にまとめると、DM 理論とは語彙範疇が指定されていない語根 ($\sqrt{\text{root}}$) とその語根の性質を決定する形式素性が終端項目にあり、一連の統語計算によって生成された語に、語彙項目で音を挿入し、百科事典で意味を付与するメカニズムである。

ここで、具体的な例に沿って DM 理論における派生メカニズムを確認する。例えば、名詞の ‘cat’ の派生は以下のように示される。

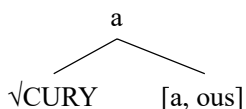
(28)



(Embick and Marantz 2008 : 6)

(28)の ‘√CAT’ は $\sqrt{\text{root}}$ であり、[n](nominal)と併合することで名詞になる。派生形態素がない場合は[φ]で示している。名詞のほか、形容詞の派生は(29)のようになる。

(29) curious の構造

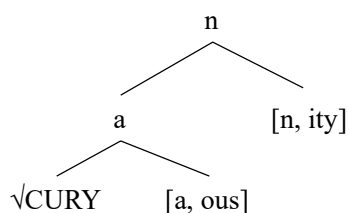


(Embick and Marantz 2008 : 12)

(29)が示しているのは、語根 ‘√CURY’ が形容詞の範疇素性[a](adjective)と接辞[ous]

と併合し、PFの段階で形態的操作を受けることで、最終的に‘curious’が派生されるというメカニズムである。さらに、形容名詞の‘curiosity’の統語派生は(30)のように説明されている。

(30) curiosity の構造



(Embick and Marantz 2008 : 12)

(30)では、語根‘√CURY’から派生された(29)の形容詞‘curious’が、さらに範疇素性[n]と接辞[ity]と併合することで、形容名詞の‘curiosity’になる構造を示している。

以上が、DM理論の概要である。このような分散形態論の考え方を採用する理由としては、語彙が統語操作によって派生されるのであれば、範疇が決まる前の段階で移動や併合の操作も受けることが可能だと考えるためである。つまり、DM理論に基づくことで、3.1節で提示したV₁とV₂の性質のずれが説明できることに加え、文頭に生起するV₁が移動操作を受けているという考え方の妥当性も保つことができる。実際、語根の√rootを範疇が決まる前に移動させ、文の一部として統語操作を受けることを指摘する先行研究が見られる。

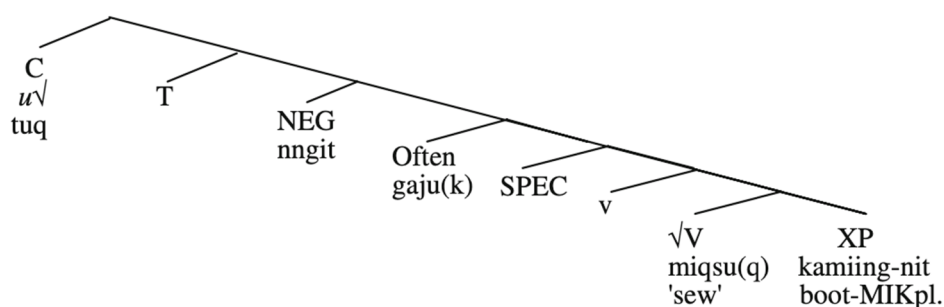
Koenig and Davis(2001)では、DM理論に基づき、動詞は2つの部分から構成されており、一つは、否定接辞、アスペクトなどに修飾されることが可能な対象となる little v (いわゆる[v])であり、もう一つは意味を持つ√rootであると指摘している。また、Johns (2007)では、DM理論とKoenig and Davis (2001)での指摘を踏まえ、√rootの移動を仮定してイヌクティトゥット語(Inuktitut)における制限的複合語(Restricting incorporation)の現象を説明している。Johnsの分析では、[v]と√rootは統語構造上それぞれ独立した節点を占めており、「動詞」という語彙範疇に派生するまでの段階で統語操作を受け、√rootのみの移動が行われる。

具体的には、(31a)に挙げるようなイヌクティトゥット語の動詞複合語の派生は、

(31b)のように示されている。

(31) a. Miqsu-gaju-nngit-tuq kamiing-nit
 sew-often-neg.-part.3s boot-MIKpl.
 'She hardly ever sews boots.'

b.



(Johns 2007: 558)

(31b)において、C の位置はある種のモード ($u\sqrt{\quad}$)が存在する(Rizzi 1997)。この $u\sqrt{\quad}$ は、値が定まっていない素性 $\sqrt{\quad}$ を持つ探査子(Probe)として、 $\sqrt{\text{root}}$ との併合を要求している。そのため、元位置にある語根 $\sqrt{\text{miqsu}}(q)$ ('sew')はCへと移動しなければならない。このような移動と形態的融合を行うことで、最終的に動詞複合語' Miqsu-gaju-nngit-tuq 'が生成される。

上述の分析によると、 $\sqrt{\text{root}}$ は形式素性と併合する前に移動することが可能である。つまり、DM 理論に基づくことで、 $\sqrt{\text{root}}$ 移動分析を展開することができる。ここから、次節では Koenig and Davis (2001)と Johns (2007)の考え方に基づき、中国語の動詞主題化構文に対して $\sqrt{\text{root}}$ 移動分析が適用できるかどうかを検証していく。

4.2. $\sqrt{\text{root}}$ 移動分析

形態的観点から見ると、中国語はイヌクティトゥット語と大きく異なっている。しかし、孤立語である中国語では語彙の形態変化は見られないものの、(32)のような文脈によって同じ語が名詞と動詞の語彙範疇が変わる現象は少なくはない。

(32) 名詞用法

a. 李四 很 喜欢 学习。

李四 とても 好き 勉強

「李四は勉強のことが好きだ。」

動詞用法

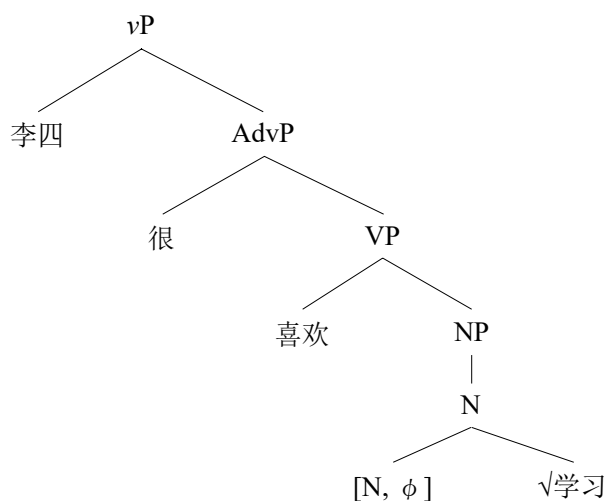
b. 李四 在 学习 日语。

李四 PROG 勉強する 日本語

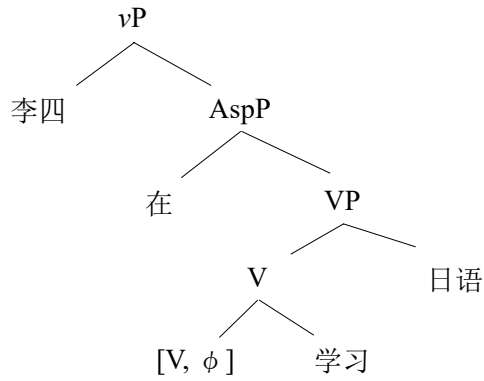
「李四が日本語を勉強している。」

(32a)(32b)における“学习”（「勉強（する）」）はそれぞれ名詞用法と動詞用法として用いられている。すなわち、中国語の場合、日本語のような動名詞の変換が「する」によって形態的な変化を起こすのではなく、形態変化が起こらずに語彙の範疇変化が行われると言える。仮に、単語がレキシコンの中から取り出した後に統語構造に入るのであれば、同一の単語が名詞として用いられる場合と動詞として用いられる場合が存在することは説明できない。したがって、(32)の例は DM に基づいて説明することが可能である。(32a, b)の構造をそれぞれ(33a)(33b)で示す。

(33) a.



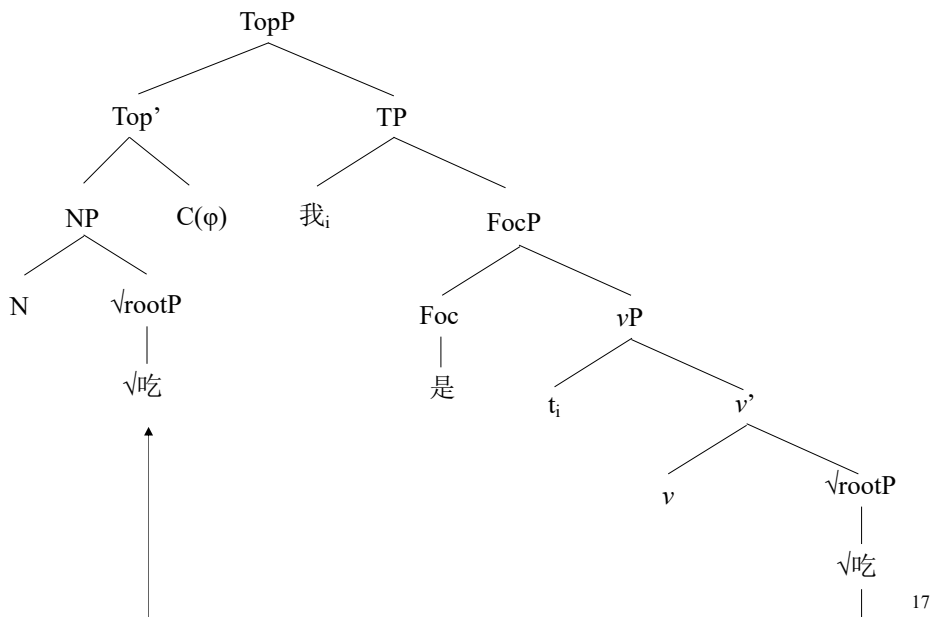
b.



上述の分析から、(34)に挙げるような動詞主題化構文における V_1 と V_2 の性質のズレを説明することは可能だと考えられる。具体的には(34)の構文の派生について、(35b)のように分析する。

- (34) [TOP 吃], 我 是 [FOC 吃过], 不过,...
 食べる 私 COP 食べ- EXP しかし
 「私は食べることは食べたが…」

(35)



¹⁷ 第三章の 3.1 節では、“是”が元々動詞句の主要部に位置するコピュラ動詞であり、FocP の指定部に移

(35)では、主題位置に値を持たない $u\sqrt{\text{吃}}$ が探査子として、「 $\sqrt{\text{吃}}$ 」との一致を求めているため、移動が生じる。ここで説明しておきたいのは、3 節では主題位置に現れる“吃”（「食べる」）はすでに名詞化された要素であると分析しているため、(35)の Top' の位置に空の名詞化辞が存在すると考える。つまり、C の位置には日本語の「こと」「の」のような名詞化辞が目に見えない形で埋め込まれている。なので、生成過程の第一歩としては、カテゴリーが決まっていない $\sqrt{\text{吃}}$ が文頭に移動した後に、C によって名詞化されるということである。ここでは、 v' の下に残された「 $\sqrt{\text{吃}}$ 」が文頭の「 $\sqrt{\text{吃}}$ 」に c 統御されているため、削除操作を受けるはずである。しかしながら、中国語にもアスペクトが存在し、完了を表す“了”や経験を表す“过”が顕在的に現れ、これらのマーカが単独で出現できない。そのため、アスペクトマーカをサポートするために、残された「 $\sqrt{\text{吃}}$ 」のコピーがアスペクトマーカと形態的融合を行い、発音される必要がある。以上のようなメカニズムを経ることで、(34)の文が生成される。このような派生を仮定すると文頭の動詞はなぜ名詞性を持つのか、すなわち V_1 と V_2 の性質上のずれが説明できると考えられる。

一方で、先述したように、単独の動詞だけではなく、(36a)のように目的語を伴って主題位置に生起する場合が存在する。仮に Cheng and Vicente (2013)の動詞移動分析を適用させると、(36a)の文は動詞句 (VP) が移動していると分析される。そのため、VP が移動するのであれば、コメント文内に VP 全体が残されて発音されるはずである。しかし、この場合には、(36b)に挙げるように V_2 は目的語と共に起ることができない。

- (36) a. [TOP 吃 _____ 饭], 我 是 吃过 了, 不过
 食べる ご飯 私 COP 食べる-EXP-PERF しかし
 「ご飯を食べることに関して、私は食べたが…」

動することによって、ゼロ焦点詞と併合してから焦点の機能を持つという分析が行われている先行研究を提示した。Nagata and Ko (2020)では、Verb Echo Answers (VEA)に対する考察を通して、中国語の“是”と日本語の「だ」の両方ともが機能主要部であることを指摘している。そのため、本稿では詳しく議論しないが、この分析に従い、(34b)の構造では、“是”が直接焦点機能主要部として FocP の主要部位置に現れると考える。

b. * [TOP 吃 饭], 我 是 吃过 饭 了, 不过……

食べる ご飯 私 COP 食べる-EXP ご飯 PERF しかし

直訳：「*ご飯を食べることに関して、私はご飯を食べたが…」

以上に示した V₂ が目的語と共起しないという事実からも V₂ は項構造を持たない little v だという分析が裏付けられる。また、主題位置に現れる動詞は動詞性が失われているため、(65a)における文頭の“吃饭”(「ご飯を食べること」)全体は「食事」というイベント名詞句と見なされる。さらに、(37a)の“这碗”(「この杯」)や(37b)の“一本”(「一冊」)のように指示的代名詞や数量詞が目的語と共起すると非文となることから、V₁が動詞性を失い、名詞性を持つという分析が支持される。

(37) a. *吃 这 碗 饭 , 我 是 吃 了。

食べる この 杯 ご飯 私 COP 食べる PERF

直訳：「*この杯のご飯を食べることに関して、私は食べたが…」

b. *看 一 本 书 , 我 是 看 了。

読む 一冊 本 私 COP 読む PERF

直訳：「*一冊の本を読むことに関して、私は読んだが…」

以上の分析に従うと、(36a)の派生には、√root 移動の分析が適用できない。それは、仮に√吃が主題位置に移動するのであれば、それに付加する目的語はどこから挿入されたのかという問題が生じるためである。しかし、基底生成分析の可能性も(38)(39)の事実から排除される。

(38) *吃 饭 , 我 是 [在外面 吃过了 以后], 才 回家。

食べる ご飯 私 COP 外で 食べる-EXP-PERF 後 その時 帰る 家

直訳：「ご飯を食べることは、私は外で食べた後に家に帰る。」

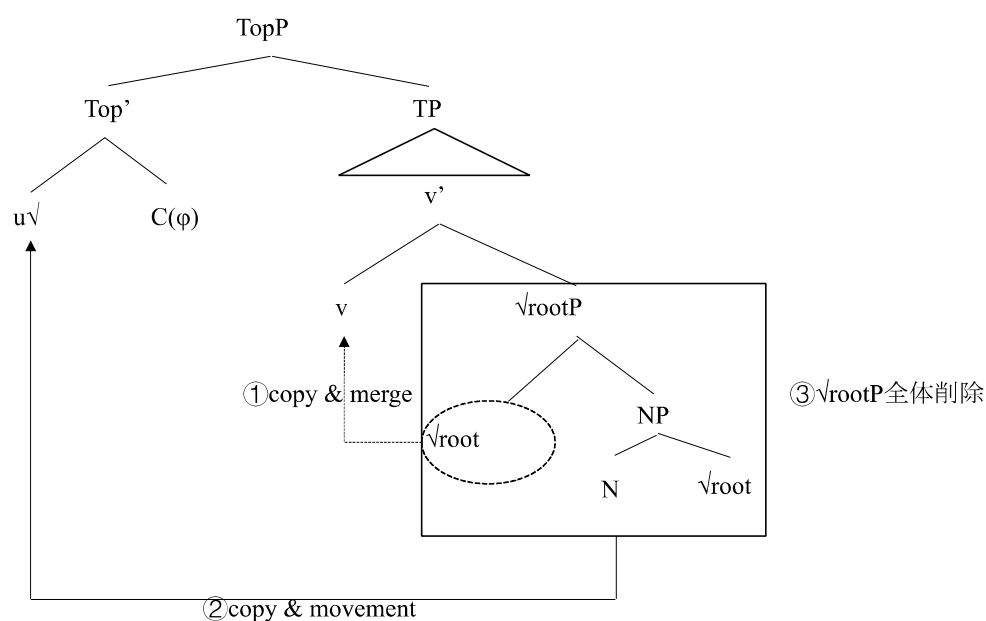
(39) *吃 饭 , 我 是 去 了。

食べる ご飯 私 COP 行く -PERF

直訳：「*ご飯を食べることは、私は行ったが…」

(38)は「付加詞制約」に関わり、 V_2 が付加詞の中に生起すると非文になる例である。また、(39)は動詞同一制約によって容認不可能になることを示している。したがって、(34)のように V_1 が目的語を伴って主題位置に生起する場合も移動が生じていると考えられる。しかし、 $\sqrt{\text{root}}$ のみが移動するのであれば、目的語の出現が説明できなくなる。そのため、(40)に示すように本研究は $\sqrt{\text{rootP}}$ 全体が移動すると分析する。

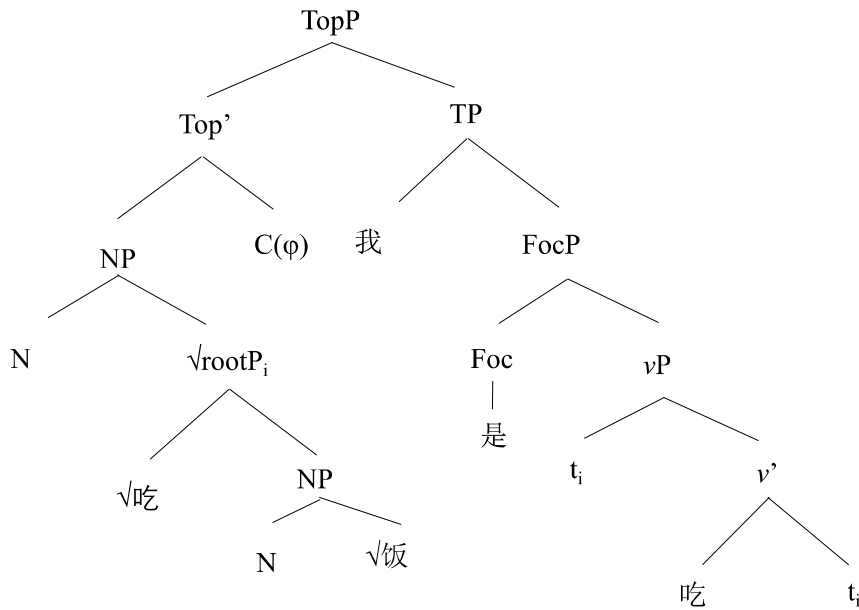
(40)



(40)では、まず、① $\sqrt{\text{root}}$ がコピーを残して v に移動して併合し、次に、② $\sqrt{\text{rootP}}$ 全体が構成素として **TopP**の指定部に移動し、**C**によって名詞化される。最後に、③元位置に残された $\sqrt{\text{rootP}}$ が削除されることが示されている。この分析に従い、(41a)の具体的な派生過程を(41b)で説明できる。

(41) a. [TOP 吃], 我 是 [FOC 吃过], 不过,... ((34)再掲)
 食べる 私 COP 食べ- EXP しかし
 「私は食べることは食べたが…」

b.



本節では、動詞（句）が文頭の主題位置に生起し、後続のコメント文の中に同じ動詞が重複される場合の主題化派生メカニズムを考察した。先行研究の分析では、動詞（句）重複構文は、島の制約と動詞同一性制約に従わなければならないため、移動が生じていると仮定される。一方で、 V_1 と V_2 の性質の差から、動詞そのものが移動しているという考え方は不適切だと考えられる。ここから、本論文では、これらの問題点を解決できる派生メカニズムとして、分散形態論の観点から新たな移動分析（ $\sqrt{\text{rootP}}$ 移動）を提案した。次節では、動詞（句）が主題位置に生起し、後続の文の中に異なる動詞や動詞句が現れる場合を考察する。

5. 基底生成分析

前節までは動詞（句）が主題位置に生起し、コメント文内に同じ動詞が重複して生起する場合、動詞そのものが移動するのではなく、 $\sqrt{\text{root}}$ もしくは $\sqrt{\text{rootP}}$ 全体の移動によって生成されると分析した。

それでは、中国語の動詞句主題構文は全て $\sqrt{\text{root}}$ 移動分析で説明できるのだろうか。2.2 節において、Cheng and Vicente (2013) では動詞重複構文における前と後ろの二つの動詞は同一でなければならないと主張していることを示した。

(42) a. *旅行, 我 是 [坐过] 飞机 ((18)再掲)

旅行する 私 COP 乗る-EXP 飛行機

直訳:「旅行することは、私は飛行機に乗ったことがある。」

b. *煮菜, 我 是 [烤过] 鸡

料理を作る 私 COP 焼く-EXP チキン

直訳:「料理を作ることは、私はチキンを焼いたことがある。」

(42)のように V_1 と V_2 が異なっている場合は「 V_1 …是… V_2 」構文が非文となる。しかし、次の(43)のように、動詞同一制約に従わず、 V_1 と V_2 が異なっても容認される文が観察される。

(43) 旅行, 我 是 去过 美国

旅行する 私 COP 行く-EXP アメリカ

直訳:「旅行することは、私はアメリカに行ったことがある。」

(43)では、“旅行”（「旅行する」）と“去”（「行く」）という形態的に異なった動詞が生起しているにもかかわらず、非文にはなっていない。これは、“旅行”（「旅行する」）と“去”（「行く」）という二つの動詞が「目的地へ向かっていく」という類似した意味を持ち、主題が後続の文脈と意味的に関連していると言える。また、“旅行”は後続文脈と文法的関係を持たないため、 V_1 と V_2 が同一でない場合の動詞（句）主題は、関連性主題と見なすことができる。

なお、第2章の先行研究で提示したように、中国語の関連性主題は基底生成によって派生されるという分析(cf. 第2章第3節, Huang, Li and Li 2009; Shyu 1995, 2014など)に基づき、(43)のような単独の V_1 、あるいは「 V_1 +目的語」の連鎖は基底生成であると考えられる。その証拠として、(44)の文は島の制約に関わらないため、このような文に対する基底生成分析は妥当だと言える。

(44) 旅行, 我 是 早就 决定了 [和 谁 一起 去]。

旅行する 私 COP ずっと前 決める-**PERF** と 誰 一緒に 行く

「旅行することは、私はずっと前から誰と一緒に行くのかをきめた。」

ただし、このような場合であっても、主題位置に現れる動詞“旅行”(「旅行(する)」)は名詞化されていると考えられる。中国語の“旅行”は日本語の「旅行」という名詞的用法と「旅行する」という動詞的用法の両方を持つ、いわゆる動名詞である。ここでの“旅行”が名詞である証拠は、(45)のようにアスペクトマーカ―と共起できないこと、(46)のように否定時と共起できないこと、および(47)のように単音節副詞と共起できないことから示される。

(45) a.*旅行了, 我 是 去了 美国。

旅行する-**PERF** 私 COP 行く-**PERF** アメリカ

「*旅行したことは、私はアメリカに行った。」

b.*旅行过, 我 是 去过 美国。

旅行する-**EXP** 私 COP 行く-**EXP** アメリカ

「*旅行したことは、私はアメリカに行ったことがある。」

(46) *不 旅行, 我 是 不 想 去 美国。

ない 旅行する 私 COP ない たい 行く アメリカ

「*旅行しないことは、私はアメリカに行きたくない。」

(47) *只 旅行, 我 是 想 去 美国。

だけ 旅行する 私 COP たい 行く アメリカ

「*旅行することだけは、私はアメリカに行きたい。」

上述の分析から、動詞(句)が主題位置に生起する際には、後続文内に同一動詞が現れるかどうかによって派生方法が異なることがわかる。つまり、動詞のみが主題位置に生起し、後続文内に同一動詞が現れる場合は $\sqrt{\text{root}}$ 移動によって派生される。また、動詞とその目的語が主題位置に生起し、後続文内に同一動詞が現れる場合は $\sqrt{\text{rootP}}$ の移動が生じている。そして、動詞(句)が主題位置に生起し、後続文内に異なる動詞

が現れる場合は基底生成だと考えられる。ただし、移動生成や基底生成といった異なるタイプの動詞（句）主題構文であっても、主題化された動詞や動詞句が動詞性を失っているという点は共通している。以上のように動詞の性質と派生メカニズムを解明したことで、これらの構文における統語的性質の違いについて説明を行った。

6. 含意関係制約

ここまでは、中国語において、二つのタイプの動詞（句）主題化構文が存在することを示し、それぞれの統語的性質および派生メカニズムを説明した。また、 V_1 が動詞性を失っている証拠として、否定辞、アスペクトマーカ―および単音節の副詞と共に起できないことを示した。本節では、さらに動詞（句）主題に関して他の生起制限があるかどうかを検討する。

6.1. 基底生成される動詞（句）主題化構文

まず、基底生成される動詞句主題では含意関係によって容認可能性が変わることが観察される。

- (48) a. 干 家务, 我 是 做过 饭。
 する 家事 私 COP する-EXP 料理
 「家事をすることに関しては、私は料理をしたことがある。」
- b. 做 饭, 我 是 包过 饺子。
 する 料理 私 COP 作る-EXP 餃子
 「料理をすることに関しては、私は餃子を作ったことがある。」
- c. *做 饭, 我 是 干过 家务。
 する 料理 私 COP する-EXP 家事
 「料理をすることに関しては、私は家事をしたことがある。」
- d. *干 家务, 我 是 包过 饺子。
 する 家事 私 COP 作る-EXP 餃子
 「家事をすることに関しては、私は餃子を作ることがある。」

(49) a. 运动, 我 是 跑过步。

運動する 私 COP 走る-EXP

「運動することに関しては、私は走ったことがある。」

b. 跑步, 我 是 跑过 三千米。

走る 私 COP 走る-EXP 三千メートル

「走ることに限っては、私は三千メートルを走ったことがある。」

c. ?运动, 我 是 跑过 三千米。

運動する 私 COP 走る-EXP 三千メートル

「運動することに関しては、私は三千メートルを走ったことがある。」

d. *跑步, 我 是 运动过。

走る 私 COP 運動する-EXP

「走ることに限っては、私は運動したことがある。」

(48)では、“干家务”（「家事をする」）“做饭”（「料理をする」）それぞれが“做饭”“包饺子”（「餃子を作る」）より前に生起することができるのに対して（=(48a)(48b)）、逆にすると非文になり（=(48c)）、また、“干家务”が中間的な動作“做饭”を超えて直接により細かい動作“包饺子”と共に生起すると非文になる（=(48d)）ことを示している。(49)も同様である。ここから、類似した構文であっても、 V_1 と V_2 の意味や生起順序によって容認可能性が変わることがわかる。この現象の特徴から得られる一般化として、以下のような制約を提示することができる。

(50) 関連性動詞主題化構文における含意階層性制約：

動詞が示すイベント (e) の含意関係 (>) を

… > e_{n+1} > e_n (e_n は e_{n+1} を含意するが、逆は成立しない)

と表すことができる場合、隣接した含意関係を示し、かつ含意されるイベント (= e_{n+1}) を示す動詞のみが、「 V_1 …是… V_2 」構文において文頭の位置に生起できる。

(50)の制約と照らし合わせると、(51a)と(51b)で容認性に差が生じることに對して説明を与えることができる。例えば、(51a)では“坐飞机”（「飛行機に乗る」）は必ずしも

“旅行”（「旅行する」）は含意しない一方で、(51b)において“去美国”（「アメリカに行く」）は“旅行”（「旅行する」）を含意する。

(51) a. *旅行, 我是 [坐过] 飞机 ((42a)再掲)

旅行する 私 COP 乗る-EXP 飛行機

「旅行することに関して、私は飛行機に乗ったことがある。」

b. 旅行, 我是 去过 美国 ((43)再掲)

旅行する 私 COP 行く-EXP アメリカ

「旅行することに関しては、私はアメリカに行ったことがある。」

先述した他の文についても同様の説明が可能である。例えば、(48)では“干家务”（「家事をする」）(e₃) > “做饭”（「料理をする」）(e₂) > “包饺子”（「餃子を作る」）(e₁) といった含意関係を表すことができる。「料理をする」や「餃子を作る」であれば「家事をする」ことを含意するが、「家事をする」からとって、「料理をする」や「餃子を作る」ことを必ずしも含意しない。従って、「家事をする」と「料理をする」は隣接しており、かつ「料理をする」ことは「家事をする」ことを含意しているため、(46a)は容認可能であり、その逆の(48c)は非文となる。また、(48b)では、「餃子を作る」ことと「料理をする」ことは隣接しており、前者が後者を含意するので、容認可能となる。また、(48d)の「家事をする」と「餃子を作る」は隣接関係ではないので、非文となる。(49)にも同様の説明が当てはまる。

6.2. $\sqrt{\text{root}}$ 移動生成される動詞（句）主題化構文

続いては、主題位置に生起される動詞と後続文に現れる動詞が同一の場合、いわゆる $\sqrt{\text{root}}$ 移動が生じている動詞（句）主題化文の場合に「含意階層性制約」が関わるかどうかを考察する。以下では動詞が単独で主題化する場合と動詞句が主題化する場合をそれぞれ観察する。

6.2.1. 単独の動詞が主題化する場合

まずは、次のような基本的な叙述文を考えてみたい。

(52) 我 在 公園 睡着了。

私 で 公園 寝る-PERF

「私は公園で寝た。」

(52)では“在公園”(「公園で」)が前置詞句PPである。このとき、(53a)のように、“睡”(「寝る」)だけが主題位置に生起することは可能であるが、(53b)のように“睡”がPPを伴って主題位置に生起することはできない。

(53) a. 睡, 我 是 在 公園 睡着了。

寝る 私 COP で 公園 寝る-PERF

「寝ることに関して、私は公園で寝た。」

b. *[_{TOP} [PP 在 公園] 睡], 我 是 睡着了。

で 公園 寝る 私 COP 寝る-PERF

また、以下に示すように、“在”だけではなく、他の付加詞でも同じ結果が観察される。(54a)では、“吃”(「食べる」)が“用勺子”(「スプーンで」)を伴って主題位置に生起すると非文になり、(43b)のように“吃”だけが文頭に生起し、元位置に“用勺子吃”(「スプーンで食べる」)が現れるのは容認可能であることを示している。(55)にも同様の説明が当てはまる。

(54) a. [_{TOP} 吃], 我 是 [PP 用 勺子] 吃了。

食べる 私 COP で スプーン 食べる-PERF

「食べることに関しては、私はスプーンで食べたことがある。」

b. *[_{TOP} [PP 用 勺子] 吃], 我 是 吃了。

で スプーン 食べる 私 COP 食べる-PERF

「スプーンで食べることに関しては、私は食べたことがある。」

(55) a. [TOP 看], 我 是 [PP 从 楼 上] 看了。

見る 私 COP から ビル 上 見る-PERF

「見ることに関しては、私はビルの上から見たことがある。」

b. *[TOP [PP 从 楼 上] 看], 我 是 看了。

から ビル 上 見る 私 COP 見る-PERF

「ビルの上から見ることに関しては、私は見たことがある。」

以上の経験的事実に対する観察を通して、(53b)および(54b)(55b)が非文となる理由は(50)の「含意階層性制約」に違反しているからだと考えられる。例えば、(53b)の文では後ろの文にある“睡”(「寝る」)は必ずしも“在公園睡”(「公園で寝る」)を含意しないため、(50)に違反することになり、非文となる。一方で、(53a)の文では「在公園睡(公園で寝る)」は“睡”を含意するため正文となると言える。このことは、(54)(54)においても同様である。

次に、前置詞句以外に、他の副詞的要素も動詞(句)と共に主題位置に生起できないことが観察される。

(56) a. *[TOP 天天 吃], 我 是 吃。

毎日 食べる 私 COP 食べる

「毎日食べることに関しては、私は食べる。」

b. *[TOP 努力 跑], 我 是 跑了。

一生懸命 走る 私 COP 走る-PERF

「一生懸命に走ることに関しては、私は走ったことがある。」

(56)の非文法性も「含意階層性制約」から説明することができる。すなわち、(56a)において“吃”(「食べる」)ということは“天天吃”(「毎日食べる」)ということを経験的事実を必ずしも含意しない。同様に、(56b)においても“跑”(「走る」)は“努力跑”(「一生懸命走る」)を経験的事実を必ずしも含意しない。したがって、(56)の文は非文となる。

ただし、(57)のように副詞を含んだ動詞が元位置に現れる場合、含意関係が逆転し、正文となる。

(57) a. 吃, 我 是 天天 吃。

食べる 私 COP 毎日 食べる

「食べることに関しては、私は毎日食べる。」

b. 跑, 我 是 努力 跑了。

走る 私 COP 一生懸命 走る-PERF

「走ることに関しては、私は一生懸命に走ったことがある。」

6.2.2. 動詞句が主題化する場合

動詞句が主題化する場合にも同じような制限が生じると予測される。実際に、以下の例では付加詞や副詞が文頭の主題位置に生起すると非文となる。

(58) a. 吃 饭, 我 是 在 家 吃了。

食べる ご飯 私 COP で 家 食べる-PERF

「ご飯を食べることは、私は家で食べた。」

b.*在 家 吃 饭, 我 是 吃了。

で 家 食べる ご飯 私 COP 食べる-PERF

「*家でご飯を食べることは、私は食べた。」

(59) a. 看 书, 我 是 天天 看。

読む 本 私 COP 毎日 読む

「本を読むことは、私は毎日読んでいる。」

b.*天天 看 书, 我 是 看。

毎日 読む 本 私 COP 読む

「*毎日本を読むことは、私は読んでいる。」

(58a)では、付加詞の“在家”(「家で」)が後続文内の動詞とは共起できるのに対して、(58b)のように、主題としての“吃饭”(「ご飯を食べる」)と共起すると非文になる。(59a)も同じように、副詞の“天天”(「毎日」)は文頭の主題位置に現れない。

このような経験的な事実における(非)文法性は、「含意階層性制約」に違反するという分析だけでなく、文頭のV₁は動詞性が失われ、名詞化されているという分析に対し

でもさらなる証拠となる。6 節の議論の帰結として、主題位置にある要素は基底生成であっても、移動生成であっても、「含意階層性制約」に従わなければならないことが明らかとなり、どのタイプの動詞（句）主題化構文においても、主題化された V_1 は名詞性を持つことが明らかとなった。

7. 第 4 章のまとめ

第 4 章では、日本語の動詞（句）主題構文との形態的な違いを出発点とし、中国語の動詞（句）主題構文に対して、以下の点を論じた。

(60) a. V_1 の性質 :

Tsao (1987) の分析に従い、動詞あるいは動詞句が文頭の主題位置に生起する場合は、脱動詞化が生じており、動詞性が失われた要素になることを主張した。

b. $\sqrt{\text{root}}$ 移動分析 :

V_1 と V_2 の性質のズレから、Cheng and Vicente (2013) の動詞そのものが移動するという分析を廃棄し、分散形態論の観点から $\sqrt{\text{root}}$ 移動という新たな派生を提案した。具体的には、単独の動詞が主題化される場合は $\sqrt{\text{root}}$ 移動が生じ、目的語を伴って主題化される場合は $\sqrt{\text{rootP}}$ 移動が生じると分析した。

c. 基底生成分析 :

V_1 と V_2 が形態的に同一でない場合は、関連性主題の一種として、基底生成によって派生されることを示した。

d. 文頭に主題化される動詞句の制限 :

主題要素の派生については、基底生成か $\sqrt{\text{root}}$ 移動生成かにかかわらず、必ず「含意階層性制約」に従う必要があることを示した。

ここから、中国語において、動詞や動詞句が主題位置に生起する際に、日本語のような「こと」「の」という形態的なマーカーを伴わなくても容認される事実から、中国語と日本語の動詞（句）主題化に対して異なる統語的な制限が課されることが予測されるが、本章での分析を経て、実際には共通した特徴を持つことが解明された。それは、主題位置に生起される動詞（句）は動詞性が失われており、表面的には範疇変化

が見えないものの、統語構造上は名詞化された要素ということである。この点から見ると、日本語の「こと」「の」を伴う動詞（句）主題と同じ制限が課されていると言える。また、中国語の動詞（句）主題構文では、文頭の動詞 V_1 と後続文の動詞 V_2 が同一かどうかによって、動詞（句）主題構文の派生メカニズムが異なることを示した。すなわち、同一動詞の場合は目的語を伴って主題化することが可能であり、 $\sqrt{\text{root}}$ もしくは $\sqrt{\text{rootP}}$ の移動によって名詞化された後に主題位置に現れるというメカニズムで派生する。一方で、異なる動詞の場合、主題化された動詞は日本語の「動名詞」と同じように、出来事自体を表す名詞用法と動詞用法が存在し、主題位置に現れる場合は名詞用法のままで基底生成すると考えられる。さらに、この二つのタイプの動詞主題化構文は両方とも、本論文で提案した「含意階層性制約」に関わることを主張した。

第5章 結論

1. 本研究のまとめ

本論文では、日本語の主題構文との形態的な違いを出発点にして、中国語の二つの主題化現象に対して統語的な分析を行った。一つ目の現象は“连……都”焦点構文における“连”を伴った主題化についてである。もう一つは動詞（句）の主題化現象である。具体的には、まず、日本語の焦点マーカ―としての「さえ」「も」は主題マーカ―の「は」と共起できないのに対して、中国語では「さえ」「も」と同様の意味を表す要素“连”は主題位置に生起できるという違いが見られる。また、動詞（句）が主題位置に生起する際に、日本語では必ず「こと」「の」という名詞化辞によって名詞化されるのに対して、中国語動詞（句）がそのまま主題になりうる。この二つの相違点から、各主題化現象に対する理論的な分析をそれぞれ第3章と第4章で議論した。以下では、本論文で行った議論を章ごとにまとめる。

第3章では、中国語の“连……都”（「さえ」「も」）焦点構文を考察対象とし、構文中で焦点マーカ―とみなされる“连”という要素が主題位置に生起できる現象に着目して分析を行った。先行研究では“连……都”焦点構文における“连”に対して二つの捉え方が見られる。一つは、“连”を意味的に焦点マーカ―と見なし、“连……都”全体が焦点構文だと捉える分析である。もう一つは、“连”自体は焦点マーカ―ではなく、“连”と“都”を組み合わせることで構文全体が焦点の機能を果たすという分析である。本論文では、まず、さらなる経験的な事実を提示し、“连”が焦点マーカ―ではないという立場を支持することを明示した。また、“连……都”焦点構文において焦点機能を果たすのは“都”であることを示し、「さえ」「も」に関する先行研究の作用域分析を参考に、(1)のように“都”は生起位置によって取れる作用域の範囲が異なると提案した。

(1) a. “连 NP” が主題位置に生起し、“都” が複文の主節に生起する場合：

连 玛丽 张三 都 认为 [CP 李四 不喜欢]。

LIAN メアリ 张三 DOU 思う 李四 好ではない

「メアリのことさえ、李四が好きではないと张三も思っている。」

→ “都” の作用域：焦点連結は主語を含む vP まで拡張し得る (= 「も」)

b. “连 NP” が主題位置に生起せず、“都” が複文の従属節や単文に生起する場合：

b1. 连 玛丽 张三 认为 [CP 李四 都 不喜欢]。

LIAN メアリ 张三 思う 李四 DOU 好きではない

「メアリのことさえ、李四も好きではないと张三が思っている。」

b2. 张三 认为 [CP 李四 连 玛丽 都 不喜欢]。

张三 思う 李四 LIAN メアリ DOU 好きではない

「张三は李四がメアリのことさえ好きではないと思っている。」

→ “都” の作用域：焦点連結は VP まで拡張し得る (= 「さえ」)

さらに、“都” を含む焦点マーカーが主題位置に生起できない事実を通して、表面上には形態的な違いが見られるものの、統語構造の観点からは、日中両言語において、焦点マーカーが主題位置に生起できないという主題要素の生起制限には違いが見られないという一般化を行った。最後に、“连……都” 焦点構文において、主題位置に生起する“连 NP” は対照主題として、「比較」という語用論的な機能を持つと論じた。

第 4 章では、動詞（句）が主題位置に生起する際に、日本語と中国語の形態的な違いが存在することから、なぜその差異が生じたのかをめぐって議論を行った。具体的には、日本語の動詞（句）が主題位置に生起する場合は、「こと」「の」のような名詞化辞を伴う必要があるのに対して、中国語の場合には、動詞（句）が形態を変えずにそのまま生起することが可能である。もちろん、中国語が形態的なマーカーを欠いている言語だということも要因ではあるが、それ以外にも統語的な説明が必要である。そのため、第 4 章では主題位置に生起する動詞（句）の性質及び動詞（句）主題構文の派生メカニズムという二つの側面から考察を行った。まず、主題位置に生起する動詞（句）の性質については、Tsao (1987)における副題タイプの動詞主題に対する分析を踏まえて、文頭の主題位置に生起する動詞（句）はすでに動詞性が失われており、

名詞化されていると指摘した。また、動詞（句）主題構文の派生メカニズムについては、二つのタイプの動詞（句）主題化構文を分けて議論した。一つ目は主題化された動詞が後続文の元位置に残された動詞と同一の場合である。この場合、動詞（句）の名詞化という分析から、主題位置の動詞と後続文の動詞は形態的に同一であるが、範疇のズレが生じている。そのため、本章では、Cheng and Vicente (2013)によって提案された動詞がそのまま移動するという派生メカニズムが適用できないことを指摘し、分散形態論の枠組みで新たな移動方法を提案した。これは、範疇が決まっていない語根 $\sqrt{\text{root}}$ が、主題位置に移動してから目に見えない名詞化辞によって名詞化されるというメカニズムである。具体的には、動詞単独で主題位置に生起する場合は $\sqrt{\text{root}}$ 移動、動詞と目的語が両方とも主題化される場合には $\sqrt{\text{rootP}}$ 移動が生じていることを提案した。もう一つは、主題位置に生起する動詞（句）が後続文にある動詞と異なる場合である。この場合、主題位置に生起する動詞はむしろ日本語の動名詞のように、動詞としても名詞としても用いられることが可能であり、島の制約に関わらないことから、 $\sqrt{\text{root}}$ 移動ではなく、名詞用法のまま主題位置に基底生成するという分析を主張した。本章の分析を通して、主題位置に生起する動詞と後続文内にある同一の動詞の範疇上のズレが説明される。さらに、中国語は日本語と同じように、動詞がそのまま主題にはなり得ないことを明らかにした。

本論文の結論として、表面的には、中国語の“连……都”構文における“连”が主題位置に出現できること、及び動詞（句）が、名詞化辞を使わずにそのままの形式で主題になり得ることは、一見すると中国語の主題構文に課される制限が日本語のそれとは異なるように見える。しかし実際には、両言語では主題位置の生起制限、主題位置における範疇制限という点で類似した制限が課されていることを示した。また、中国語は孤立語であり、語彙の形態変化や形態的なマーカーが欠けているものの、これらの要素は空の形式で存在しており、これによって「主題卓越型」言語としての日中両言語の並行的性質が捉えられることを示した。

2. 今後の展望

本研究では、同じ「主題卓越型」言語に属する日本語と中国語の主題構文における共通の制限を捉えることを試みた。しかし、未だ多くの課題が残されている。本節では本研究で扱わなかった問題と説明しきれなかった問題を提示する。

まず、第3章の4節では、Rizzi (1997)の一般化によって提示した“连”が主題マーカ―ではない証拠のうち、主題は複数出現できるのに対して、焦点は一文の中に一つしか容認されないことを示した。しかし、日本語の場合、焦点マーカ―である「さえ」「も」が複数現れることも可能である。

(2) 太郎さえ、花子さえ、あの人は勝てないと思っている。

(3) 太郎も、花子も、あの人は勝てないと思っている。

このような現象は、「さえ」「も」が焦点マーカ―ではないことを示しているのか、それとも別の要因があるのかは説明できていない。つまり、本論文では、日本語の「さえ」「も」に関しては中国語との形態的な違いでしか提示されておらず、具体的な分析は行われていない。そのため、日本語の「さえ」「も」と主題の関係をどのように捉えるかを、今後の課題の一つにしたい。

また、本論文では日本語の動詞（句）主題化構文に対する分析が行われていない。日本語の場合、動詞（句）主題化という現象は、先行研究によって動詞（句）主題化構文としてはあまり議論されていないが、動詞重複構文として分析が行われている。例えば、Nishiyama and Cho (1998)や Ishihara (2013)では、それぞれ(4a)(4b)の構文に対して議論を行なっている。

(4) a. 太郎が 炒飯を {食べた／食べる} ことは食べた。

b. 太郎が 炒飯を食べる {に／の} は食べた。

(4a)(4b)に対して、Nishiyama and Cho (1998)および Ishihara (2013)は、「は」は対比的焦点を示すマーカ―であるとし、FocPの主要部に移動することによって「は」が具現すると論じている。また、派生のメカニズムとして、Nishiyama and Cho (1998)では、

動詞の重複には移動が生じているとしているが、移動の対象となる要素は NP や NP を含む CP ではなく、TP 全体であると提案している。

上述の説明から、①対比的焦点マーカ―としての「は」は本論文で提示した対照主題の「は」と考えることが可能なのか、②通常、TP は移動の対象にはならないが、仮に Nishiyama and Cho (1998)の分析が正しいとすると、なぜ日本語では TP が移動できるのか、また Nishiyama and Cho (1998)の分析が妥当でなければ、本論文で提案した $\sqrt{\text{root(P)}}$ の移動分析が適用できるかという二つの問題を今後解決すべきである。

参考文献

- 阿部潤 2008. 『問題を通して学ぶ生成文法』 ひつじ書房
- 青柳宏 2006. 『日本語の助詞と機能範疇』 ひつじ書房
- 井上優 2004. 「「主題」の対照と日本語の「は」, 益岡隆志(編)『主題の対照』くろしお出版, pp. 215-226.
- 尾上圭介 1995. 「「は」の意味文化の論理-題目提示と対比」, 『言語』24 卷 11 号
- 奥野忠徳・小川芳樹 2002. 『極性と作用域』 研究社
- 影山太郎 1993. 『文法と語形成』 ひつじ書房
- 澤田浩子・中川正之 2004. 「中国語における語順と主題化-主題化とその周辺の概念を中心に-」, 益岡隆志(編)『主題の対照』くろしお出版, pp. 19-42.
- 高見健一・久野暁 2006. 『日本語機能的構文研究』 大修館書店
- 中村捷・金子義明・菊地朗 2001. 『生成文法の新展開—ミニマリスト・プログラム』 研究社
- 堀川智也 2012. 『日本語の「主題」』 ひつじ書房
- 益岡隆志 1987. 『命題の文法』 くろしお出版
- 益岡隆志 2000. 『日本語文法の諸相』 くろしお出版
- 益岡隆志 2004. 「日本語の主題-叙述の類型の観点から-」, 益岡隆志(編)『主題の対照』くろしお出版, pp. 3-17.
- 三上章 1959. 『現代語法序説 : 主語は必要か』 刀江書院
- 三上章 1960. 『象は鼻が長い』 くろしお出版
- 三上章 1963. 『日本語の構文』 くろしお出版
- 山田孝雄 1936. 『日本文法学概論』 宝文館
- Badan, L. 2007. *High and low periphery: a comparison between Italian and Chinese*. Dissertation. Universita' Degli Studi di Padova, Padova.
- Badan, L. and F. del Gobbo. 2010. On the syntax of topic and focus in Chinese. In: *Mapping the left periphery*, Benincà, P. and Munaro, N. (eds.), 63-90. Oxford: Oxford University Press.

- Benincà, P. and C. Poletto. 2004. Topic, focus and V2: defining the CP sublayers. In: *The structure of CP and IP: the cartography of syntactic structures*, Rizzi, L.(ed.), 52-75. Oxford: Oxford University Press.
- Bianchi, V. and M. Frascarelli. 2010. Is topic a root phenomenon? *Iberia: An International Journal of Theoretical Linguistics* 2(1): 43-88.
- Bowers, J. S. 1976. On surface structure grammatical relations and the structure-preserving hypothesis. *Linguistic Analysis* 2: 225-242.
- Büring, D. 2003. On D-trees, beans, and B-accents. *Linguistics and Philosophy* 26: 511-545.
- Chafe, W. 1987. Cognitive constraints on information flow. In: *Coherence and grounding in discourse*, Tomlin, R. S.(ed.), 21-51. Amsterdam: John Benjamins.
- Cheng, L. L. S. 2008. Deconstructing the shi...de construction. *The Linguistic Review* 25: 235-266.
- Cheng, L. L. S. and L. Vicente. 2013. Verb doubling in Mandarin Chinese. *Journal of East Asian Linguistics* 22: 1-37.
- Cheng, R. L. 1983. Focus devices in Mandarin Chinese. In: *Studies in Chinese syntax and semantics*, Tang, T., Cheng, R. L. and Li, Y. (eds.). Taipei: Taiwan, Students Book Co.
- Chiu, B. H. C. 1993. *The inflectional structure of Mandarin Chinese*. Dissertation. UCLA, Los Angeles.
- Chomsky, N. 1977. On Wh-movement. In: *Formal syntax*, Culicover, P. W., Wasow, T. and Akmajian, A. (eds.), 71-132. San Diego, CA: Academic Press.
- Chomsky, N. 1981. Lectures on government and binding, foris, dordrecht.
- Chomsky, N. 2008. On phases. In: *Foundational issues in linguistic theory*, Freidin, R., Otero, C. P. and Zubizarreta, M. L. (eds.), 133-166. Cambridge, MA: MIT Press.
- Chu, C. C. H. 2003. Please, let topic and focus co-exist peacefully! In: *New ideas about Topic and Focus*, Xu, L. J. and Liu, D. Q. (eds.), 260-280. Shanghai: Shanghai Education Publisher.
- Cinque, G. 1990. *Types of A'-dependencies*. Cambridge, Mass: MIT Press.
- Embick, D. and A. Marantz. 2008. Architecture and blocking. *Linguistic inquiry* 39: 1-53.
- Erteschil-Shir, N. 2007. *Information structure: the syntax-discourse interface*. Oxford: Oxford

University Press.

- Gao, Q. 1994. Focus criterion: evidence from Chinese. In: *Proceedings of the Sixth North American on Chinese Linguistics*, Camacho, J. and Choueiri, L. (eds.), 51-73. Los Angeles: University of Southern California.
- Givón, T. 1983. Topic continuity in discourse: an introduction. In: *Topic continuity in discourse: a quantitative cross-language study*. Givón, T. (ed.), 5-41. Amsterdam: John Benjamins.
- Gundel, J. K. 1988. Universals of topic-comment structure. In: *Studies in syntactic typology*, Hammond, M., Moravcsik, E. and Wirth, J. (eds.), 209-239.
- Gundel, J. K. and T. Fretheim. 2004. Topic and focus. In: *The handbook of pragmatics*, Horn, L. R. and Ward, G. (eds.), 175-196. Oxford: Blackwell.
- Halle, M. and A. Marantz. 1993. Distributed Morphology and the pieces of inflection. *The view from Building 20: Essays in linguistics in honor of Sylvan Bromberger*. Hale, K. and Keyser, S. J. (eds.), 111-176. The MIT Press.
- Heycock, C. 2008. Japanese -wa, -ga, and information structure. In: *The Oxford handbook of Japanese linguistics*. Miyagawa, S. and Saito, M. (eds.), 54-83. Oxford: Oxford University Press.
- Higgins, F. R. 2015. *The pseudo-cleft construction in English*. Routledge.
- Hoji, H. 1985. *Logical form constraints and configurational structures in Japanese*. Ph.D. dissertation, University of Washington, Seattle.
- Huang, C. T. J. 1982. *Logical relations in Chinese and the theory of grammar*. Ph.D. dissertation, MIT.
- Huang, C. T. J. and Y. H. A. Li. 1996. Recent generative studies on Chinese syntax. In: *New horizons of Chinese Linguistics*, Huang, C. T. J. and Li, Y. H. A. (eds.). Dordrecht: Kluwer.
- Huang, C. T. J., Y. H. A. Li. and Y. Li. 2009. *The Syntax of Chinese*. Cambridge University Press.
- Ishihara, Y. 2013. Nominalization in the Japanese predicate doubling construction. *English Linguistics* 30: 269–291.

- Ishii, Y. 1991. *Operators and empty categories in Japanese*. Ph.D. dissertation, University of Connecticut, Storrs.
- Johns, A. 2007. Restricting noun incorporation: root movement. *Natural Language & Linguistic Theory* 25: 535-576
- Koenig, J. P. and A. R. Davis. 2001. Sublexical modality and the structure of lexical semantic representations. *Linguistics and Philosophy* 24(1): 71-124.
- Kubo, M. 1992. *Japanese syntactic structures and their constructional meanings*. Ph.D. dissertation, MIT.
- Kuno, S. 1973. *The Structure of the Japanese Language*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Kuroda, S. Y. 1965. *Generative grammatical studies in the Japanese language*. Ph.D. dissertation, MIT
- Kuroda, S. Y. 1988. Whether We Agree or Not. *Linguisticae Investigationes* 12: 1-47.
- Lambrecht, K. 1994. *Information structure and sentence form: topic, focus, and the mental representations of discourse referents*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Landau, I. 2013. *Control in generative grammar: a research companion*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lee, H. 2005. *On Chinese focus and cleft constructions*. Ph.D. Dissertation. Tsing-hua University, Hsinchu.
- Li, C. N. and S. A. Thompson. 1976. Subject and topic: a new typology of language. In: *Subject and topic*, Li, C. N. (ed.) 457-489. New York: Academic Press.
- Li, Y. 1990. On V-V compounds in Chinese. *Natural language and linguistic theory* 8: 177-207
- Lohnstein, H. 2016. Verum focus. In: *The Oxford handbook of information structure*, Féry, C. and Ishihara, S. (eds.), 290-313. Oxford: Oxford University Press.
- Marantz, A. 1997. No escape from syntax: don't try morphological analysis in the privacy of your own lexicon. *UPenn working papers in linguistics* 4: 201-225
- Miyagawa, S. 2017. Topicalization. *Gengo kenkyu (Journal of the linguistic society of Japan)*. 152: 1-29
- Nishiyama, K. and E. Cho. 1998. Predicate cleft constructions in Japanese and Korean: the

- role of dummy verbs in TP/VP-preposing. *Japanese and Korean Linguistics* 7: 463-479.
- Paris, M. C. 1994. Position syntaxique et valeur discursive: le cas de même en chinois. *Cahiers de linguistique Asie orientale* 23 (1-2): 241-253.
- Paul, W. 2005. Low IP area and left periphery in Mandarin Chinese. *Recherches linguistiques de Vincennes* 33: 111-134.
- Paul, W. and J. Whitman. 2017. Topic prominence. *The Wiley Blackwell companion to syntax*, Second Edition. Everaert, M. and van Riemsdijk, H. (eds.), 1-31. MA: Malden.
- Reinhart, T. 1981. *Pragmatics and linguistics: an analysis of sentence topic*. Reproduced by the Indiana University Linguistics Club.
- Rizzi, L. 1997. The fine structure of the left periphery. In: *Elements of Grammar: handbook of generative syntax*, Haegeman, L.(ed.), 281-337. Dordrecht: Kluwe.
- Rizzi, L. ed. 2004. *The structure of CP and IP: the cartography of syntactic structures 2*. New York and Oxford: Oxford University Press.
- Saito, M. 1985. *Some asymmetries in Japanese and their theoretical implications*. Ph.D. dissertation, MIT
- Shi, D. 1992. *The nature of topic comment constructions and topic chains*. Ph.D. dissertation, University of Southern California.
- Shi, D. 1994. The nature of Chinese emphatic sentence. *Journal of East Asian Linguistics* 3: 81-100.
- Shyu, S. I. 1995. *The syntax of focus and topic in Mandarin Chinese*. Ph.D. dissertation, University of Southern California.
- Shyu, S. I. 2004. (A)symmetries between Mandarin Chinese *lian...dou* and *shenzhi*. *Journal of Chinese Linguistics* 32: 81-128.
- Shyu, S. I. 2014. Topic and Focus. In: *The handbook of Chinese linguistics*. Huang, C. T. J, Li, Y. H. A. and Simpson, A. (eds.) , 100-125. Hoboken: John Wiley and Sons.
- Strawson, P. F. 1964. Identifying reference and truth values. *Theoria* 30: 96-118.
- Tateishi, K. 2017. Double nominatives in Japanese. In: *The Blackwell companion to Syntax*, Everaert, M. and van Riemsdijk, H. (eds.), 1-29. Oxford: Blackwell.
- Teng, S. H. 1979. Remarks on cleft sentences in Chinese. *Journal of Chinese linguistics* 7:

101–114.

Tsai, W. T. D. 1994. *On economizing A-bar dependencies*. Ph.D. dissertation, MIT.

Tsao, F. 1987. On the so-called ‘verb-copying’ construction in Chinese. *Journal of Chinese Language Teachers Association* 22: 13–44.

Tsao, F. 1989. Comparison in Chinese: a topic-comment approach. *Tsing Hua Journal of Chinese Studies* 19: 151–189.

Xu, L. J. and T. Langendoen. 1985. Topic structures in Chinese. *Language* 61(1): 1-27.

Xu, L. J. 1986. Free empty category. *Linguistic Inquiry* 17: 75-94

曹逢甫. 1994. 再论话题和“连……都/也”结构. 《功能主义和汉语语法》北京语言学院出版社

何元建. 2011. 《现代汉语生成语法》北京大学出版社

徐烈炯, 刘丹青. 1998. 《话题的结构与功能》上海教育出版社

胡亚敏 2017. 「動詞重複構文」同志社大学修士論文

各章と既発表論文および口頭発表との関係

第1章 序論

新規執筆

第2章 先行研究の概観と問題所在

新規執筆

第3章 主題と焦点の区別：“连”の主題化現象から

胡亜敏 (2020) 《“连……都”结构中“连”的主题化现象——与日语的「さえ/も」对比——》现代语文(2020年第9期) (出版予定)

Nagata, Shohei and Abin Ko (2020) On the expletive status of copula da and shi: A view from answers to narrow focus questions in Japanese and Mandarin. the 28th Japanese/Korean Linguistics Conference.

第4章 動詞（句）主題化構文

胡亜敏 (2018) 「中国語の動詞重複分裂文における ROOT 移動仮説」『第157回日本言語学会予稿集』 pp.34-39

胡亜敏 (2018) 「中国語動詞重複分裂文と ROOT 移動」『言語学論叢』オンライン版第11号（通巻37号） pp.67-68

第5章 結論

新規執筆